浪江・二本松

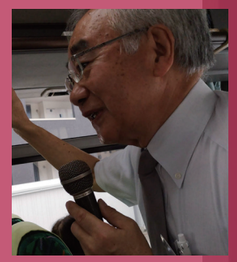
浪江・二本松交流のこれまで・これから

オープンディスカッション・スタディツアー

東日本大震災と東京電力福島第一原子力発電所事故により浪江町は役場機能を二本松市に一時移転し、多くの住民が二本松市内に避難しました。それから8年が過ぎ、未だに帰還困難区域が残る中、解除された地区に帰町される人、県内外の他地域に移住された人、二本松市に落ち着こうと決めた人とそれぞれの暮らしが始まっています。本事業では、「くらし」の根幹となるコミュニティ再生、ソーシャルインクルージョンの視点から、二本松市の方と二本松市に落ち着こうとされている浪江町の方の交流の機会を作り、これまでを振り返り今後の展望を考えました。

原田アキイ（はらだあきい）

東日本大震災とそれにともなって起きた東京電力福島第一原子力発電所の事故により全国に散らばった浪江町民の自治会組織は、各地域名を冠して「○○コスモス会」と称する。「二本松コスモス会」は、主に借上げ住宅の町民による自治会。会員として活動。浪江町商工会女性部監査、浪江町民生委員も務める。



原田雄一（はらだゆういち）

大学卒業後、浪江町の家業・原田時計店に入る。２００４年浪江町商工会副会長。１９９６年から浪江町請戸川堤防の桜の手入れを始める。２０１１年浪江町商工会の仮事務所を二本松市に設置、避難先で会社を再開。２０１２年まちづくりＮＰＯ新町なみえ設立、初代理事長就任。２０１２年浪江町商工会会長就任。２０１８年浪江町商工会会長退任、同顧問就任。

武田良典（たけだりょうてん）

１３２０年（元応２年）に恵燈律師が行基作の聖観音を得て開山したとされる龍泉寺。真言律宗の密教寺院から、後に曹洞宗に改宗された。室町時代の二本松城主畠山氏、江戸時代の城主加藤氏、丹羽氏から保護され、二本松の古刹としての歴史は長い。現在、様々な団体等との連携を続け、地域の拠点としての開かれた寺院を実践している。

安斎文彦（あんざいふみひこ）

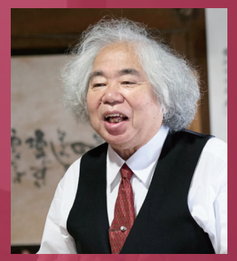
市民や市民団体、企業などを繋ぎ、活力に満ち、魅力溢れる二本松市の未来を創り出すためのまちづくり活動を行っている「にほんまつ未来創造ネットワーク」代表。震災後は、二本松市の現状発信なども積極的に行っている。

元田典利（もとだのりとし）

１９８０年代にアメリカ留学。帰国後、折元立身『パン人間』『アートママ』等のパフォーマンス／記録を行う。又、国内外で、個展企画展等にパフォーマンス、インスタレーション、写真を発表する。２００６年メイドイン川崎現代美術賞展大賞。

木村裕之（きむらひろゆき）

令和元年度より浪江町立浪江小学校長。東京電力福島第一原子力発電所事故により全町避難となった浪江町は２０１１年より役場機能を二本松市に移した。それにともない浪江小学校・津島小学校も二本松市内の旧下川崎小学校で開校。同校ではふるさとを離れて暮らす子どもたちが浪江町と避難先の二本松市の文化などを学ぶ「ふるさとなみえ科」を展開してきた。



折元立身（おりもとたつみ）

パフォーマンス・アーティストとして長年にわたり国際的に活動を続け、２００１年第４９回ヴェネツィア・ビエンナーレで紹介され、各地のアートプロジェクトに参加するなど、国内外で高い評価を得る。自身が介護する母・男代（おだい）さんとの日常をアートとして表現した「アート・ママ」シリーズをはじめ、その表現は人間への愛情に溢れる。

渡邊晃一（わたなべこういち）

主な個展に、川口現代美術館、田中一村記念美術館、Century Gallery London、Gallery Paris 等での企画展。舞台、映画やオペラの美術協力などその活動は広範囲に及ぶ。「福島ビエンナーレ」（２００４年〜）を企画監修。２０１６年〜２０１８年には福島ビエンナーレとの共催として二本松市で開催された「重陽の芸術祭」の総合ディレクターを務めた。

大松良子（おおまつりょうこ）

国立磐梯青少年交流の家（猪苗代町）で県婦人指導員の資格を取得した二本松市の女性らでつくる二本松磐青の会会長として、長く地域づくり等に尽力。広島市平和記念公園に納められた折り鶴の再生紙「平和おりひめ」を用いて二本松市に避難している浪江町のみなさんと製作した千羽鶴を二本松市内の塩沢神社に奉納するなどの活動も行っている。

オープンディスカッション1

day 1

オープンディスカッション1

福島の記憶を学ぶ〜二本松に避難した浪江小学校のふるさと学習のあゆみ

日　時：8月30日（金）14：30〜16：00
会　場：二本松市市民交流センター　第2会議室
講　師：木村裕之氏（浪江小学校校長）
司　会：小林めぐみ
（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

浪江・二本松

day1　オープンディスカッション

事務局・小林めぐみ

みなさん今日はお越しくださいましてありがとうございます。福島県立博物館の小林と申します。私どもの県立博物館で県内外の大学や博物館、美術館さんなどにもご一緒いただいて、昨年度からライフミュージアムネットワークという事業を始めました。ライフは「いのち」と「くらし」ですよね。その命と暮らしがとても大切だということに私たちは2011年に気づきました。それが、この活動のスタートでした。命の大切さや暮らしを守っていくこと、暮らしの中で伝えてきたこと、それをどう受け継いでいくかということ、その大切さは、元々博物館や美術館が大事にしてきたことです。それをみなさんともう一度考え、未来にどう渡していくかを共有できる博物館、美術館の持ち味も発揮できるのではないかと立ち上げた事業です。昨年スタートしてから、福島県内各地でいろいろな活動をしてきました。

今年はこちら二本松市で何回かトークイベントをしたいと考えています。「浪江、二本松交流のこれまで・これから」というタイトルですけれど、2011年の後、浪江町のみなさんが二本松に避難してこられて数年が立ちました。県立博物館もほんの少しですけど、数年前にこのライフミュージアムネットワークの前の事業、はま・なか・あいづ文化連携プロジェクトで浪江小学校、津島小学校におじゃまさせていただいたことがありました。小学校で浪江小、津島小のみなさんが避難してこられた経緯や、二本松に来られてからどんなふうに学校生活を送ってきたのかを、外の方や学校に来られる方に伝えていきたい。それを子どもたちとやってみたいということで、当時の先生からご相談をいただきました。そこで、博物館の手法で、子どもさんたちが作ったものを小学校の2階に展示して小さな博物館を作るのを一緒にさせていただきました。その年に、これは有名なのでみなさんご存知だと思うのですが、「浪江っ子カルタ」を小学校で作っていました。小学生のみんなが先生に教えてもらったり、お家の人にお聞きしたりしながら、小さい1年生、2年生、3年生は避難した時、自分の記憶の中に浪江町があまり残ってなくて、自分のふるさとはどんなところなのか、調べながら絵札を作る作業をしていました。この絵札を作るところで博物館もお手伝いしました。絵本作家の飯野和好さんに来ていただき、カルタは色がはっきりしているほうが見栄えがするよとか、一人一人にアドバイスをしてくださり、このカルタを一緒に作りました。

その時にちょっとだけ見えたのですが、先生が浪江のことと同時に避難して暮らすようになった二本松のことも子どもたちに知ってもらおうと、両方の土地のお料理、両方の街の歴史を調べて成果発表するということをしていました。そんなふうに学校が、地域を繋げる場所になって、避難先とふるさとの両方を子どもたちに伝えている姿が見えてきて、素晴らしい取り組みだなと思った記憶があります。

そんなこともあり、あらためて浪江、二本松の交流のこれまで、これからどんなふうになっていくか、そんなことをみなさんと話し合う場を何回か作るにあたって、スタートに小学校のお話しをお聞きしたいと思いました。それで相談しましたところ、木村校長先生が引き受けてくださり、今日来ていただけることになりました。二人になってしまった浪江、津島小学校がこれからどうなるのか、子どもたちが浪江のこと、育って暮らしている二本松のことをどう受け止めているのか、これまでのこと、これからのこと両方をお聞きして、みなさんから感想などもお聞きする時間も持てればと思っています。それでは木村先生どうぞよろしくお願いします。

二本松に避難した浪江小学校のふるさと学習の歩み

木村裕之

4月から浪江小学校と津島小学校の校長を仰せつかっております木村裕之と申します。よろしくお願いします。スライドを見ながらお話しをさせていただければと思います。今日は二本松に避難した浪江小学校のふるさと学習の歩みというお題をいただきました。

本校は現在も二本松市の旧下川崎小学校をお借りして、浪江町立の避難先再開校として日々教育活動に励んでおります。これも二本松市当局をはじめ、下川崎地区のみなさま、そして、全国のご支援くださっているみなさま、何よりも浪江町の関係のみなさまのおかげと心より感謝しております。

こんな感じで下川崎小学校の隣に浪江小の看板と津島小の看板も並べてみました。現状とこれまでの推移で言いますと、被災した年の8月に浪江小学校が再開しました。当時は31名の児童が在籍しておりました。その3年後の平成26年4月に津島小学校が再開しました。その時津島小学校は3名。この平成26年度は合計21名の在籍。

懐かしい写真で振り返ってみます。震災直後の年には特別に集合写真を撮るような余裕はなかったと思いますけれど、24年度鶴ヶ城に遠足に行った時の写真があります。25年度は東京ですね。26年度は野毛山動物公園。27年度は子どもの数もこじんまりしてきました。いろいろアルバムを確認したところ28年度から在籍児童だけで集合写真を撮るようになり、ガクンと少なくなります。

小林

私たちがおじゃましたのは27年度ですね。

木村

そうでしたね。29年度あたりから浪江っ子ファイブなんて外部には説明をしていたかな。昨年度が3名、今年度は2名。津島小学校1名、浪江小学校1名。つまり、今年度いっぱいで浪江小学校は休校、津島小学校は来年度いっぱいで休校になる予定です。これで二本松市でお世話になっておりました再開校はすべてその役目を終えて、昨年度4月から開校しております浪江町の小中学校にすべてその役割を引き継いでいくことになると思います。

「浪江を愛し、未来に向かって笑顔で生きる」

さて、学校には学校教育目標というのがございます。現在の本校の教育目標は「浪江を愛し、未来に向かって笑顔で生きる」。これは平成25年度からですが、平成24年度までは「よく考える子、思いやりのある子、たくましい子」、いわゆる知、徳、体です。大体どこの学校でも知、徳、体に合わせたものになっています。ですが、本

校は「浪江を愛し、未来に向かって笑顔で生きる」という教育目標にしています。

具体的には、浪江の「な」は、大好きなふるさと浪江町の産業、伝統、文化などを学習し、浪江町の新たな発展や希望ある将来について考える子どもを育てていきたい。浪江の「み」は将来なりたい自分に向かって夢や希望を抱き、何を学習し身に付けるべきなのかを考える子どもを育成したい。最後の笑顔で生きるは、明るく、元気で笑顔を絶やさず、周りの人も笑顔にできる子どもを育てていきたいということで、「浪江を愛し、未来に向かって笑顔で生きる子ども」という教育目標に平成25年度からしました。

「ふるさとなみえ科」

実はこのきっかけになったのが、本日お題をいただいております本校の郷土学習です。本校の郷土学習は教育の柱としてふるさとなみえ科という学びに取り組んできました。ふるさとなみえ科は総合的な学習の時間や各教科との関連を意識した横断的な学びに、体験学習や探求学習を組織し、年間70から90時間取り組んでおります。もう少し掘り下げてみますと、浪江を離れて学び生活せざるを得ない子どもたちに避難先にある学校が地域文化を経験させることを仕組む必要性に迫られ、ふるさとを愛する心を育み未来を創造的に生き抜くたくましい人間の育成を目指して、震災翌年の平成24年度からスタートさせた学習プログラムです。

目的は具体的に二つあります。一つ目は子ども一人一人に心の中にふるさとへの太い柱を張らせること。もう一つがふるさとの良さを守り引き継ぐ人々やふるさとのために活躍する人々の生き方に学び、子ども自身に志を持たせるということです。このふるさとなみえ科は、2年後にスタートする双葉郡八町村が取り組んでいる「ふるさと創造学」にも少なからず影響を与えたのではないかと思います。ちなみにこの「ふるさと創造学」、新聞報道が前にありましたが、小学校ですとビッグパレット福島で8月9日にあった「絆づくり交流会」とか、その一週間前に有名な方々がいらっしゃって、未来学園でやった中高交流会も、「ふるさと創造学」の一環として取り組んでいるものです。

では、具体的なところに入っていきますと、地域の素材や人材を活用し、ふるさとの良さを伝えることでふるさとを愛する心を育み未来を創造的に生き抜くたくましさを身に付けてほしいと当時の教員が願い「ふるさとなみえ科」を創設しました。ただし、避難先で開校している場合は地域と学校の関係は通常とは大きく異なります。出かける地域を失ってしまいました。基本的に地域学習というのは地域に出かけて行って、その地域の中で学んでいくことですが、出かける地域がなかなかままならない状況になってしまいました。そこで、学級の中に地域を想定し、学校にふるさとの人材においでいただき、子どもたちにふるさとの良さを伝えてもらうことにしました。四つのプログラムを組んでみました。一つ目はふるさとの良さを発見するプログラム。二つ目が伝統文化を学ぶプログラム。三つ目が浪江町の人々と交流するプログラム、そして、四つ目がふるさとの未来を考えるプログラム。四つ目につきましてはすでに浪江町に帰町して小中学校も開校しているということで、現在はこの役割は一段落かなという状況にあります。

一つ目のふるさとの良さを発見するプログラム。ここでは、三つの取り組みを行ってきました。はじめに浪江っ子カルタ。平成24年度からスタートした「ふるさとなみえ科」で学習のまとめとして子どもたちはカルタを作ってきました。あえて手書きにして、ふるさと浪江町への思いをカルタに表しました。今も展示してあります。平成27年度に自分たちがこれまで作ってきたふるさとのカルタで浪江のみなさんに元気になってほしいという子どもたちの願いを込めて、カルタづくりの集大成として浪江っ子カルタを完成させました。

当時の浪江小、津島小の児童15人が、前年度までに作りためてきたカルタを改めて見直し、およそ200枚の中から地区やジャンルのバランスを考えて50音順に46枚選定しました。絵本作家の飯野和好先生に絵のポイントをご指導いただき、一枚一枚丁寧に子どもたちが仕上げていきました。完成したカルタは卒業生や仮設住宅、ご支援いただいている多くの方々、そして浪江町役場に寄贈しました。当時の馬場町長さんともカルタをして楽しみました。例えば、「くじ引きで毎年当てた十日市」とか、「三匹獅子、津島に響く太鼓の音」、「大晦日、除夜の鐘なる大聖寺」。

次にふるさとオリジナルソングとして、「んだげんちょ」という取り組みがあります。これは平成27年の5月に福井県出身のレゲエ歌手シング・ジェイ・ロイ（Sing J Roy）さんをお迎えして子どもたちが学習を通して学んだ浪江の良さ、伝統文化、方言、名称などを元にロイさんと子どもたちが協議して作り上げたオリジナルソングです。作詞のところに「だべ」とか、「めんげ」「さすけね」「おもせ」、なんて感じの方言をはじめ、生活の一コマを浪江の言葉で表して一人一人の心に息づくふるさとの調子の良いレゲエ音楽という感じです。仮設住宅の訪問とか十日市などでも発表させていただきました。

平成29年12月に行われた「第5回全国小中学校リズムダンスふれあいコンクール」という全国大会にも参加させていただきました。これに合わせて福島にありますOTEダンススクールに、先ほどのダンスからもうちょっと洗練したものに加工していただき、ここで発表しました。審査委員の方々や会場のみなさんからも拍手と大変好評をいただき、当時の新聞にも大々的に取り上げていただきました。続きがありまして、さらに町民のみなさまにこの「んだげんちょ」に親しんでいただきたい、笑顔と元気を多くの方にもっと届けたいということで、昨年10月に再びシング・ジェイ・ロイさんにご足労いただき、続きの歌詞を作りました。歌詞は子どもたちが浪江町や二本松市で働く方々へインタビューして得られた言葉ですとか、町民のみなさまへのアンケートなどをお願いして候補となる言葉を分類しまして、なみえ創成小学校の子どもたちにもテレビ会議システムを使って、参加していただき完成させました。

今度のニューバージョンはダンスではなくて、町の保健士さんのアドバイスで、健康づくりのきっかけとしてもらうためにダンベル体操とコラボをしました。振り付けは宮城教育大学の鈴木先生にお世話になりました。12月にビッグパレット福島で行われたふるさと創造学でも発表しました。それぞれの町ごとにブースがありまして、浪江町のブースに多くの他の町村の子どもたちが来て見学しました。この前で子どもたちが踊り方をレクチャーしました。こういった学びを通じて浪江子ども新聞に、気づいたこと、考えたことを表現したり、振り返ったりしてきました。この新聞は仮設があった時には仮設にもお配りさせていただきました。B1グランプリが郡山で行われた時には「焼きそば新聞」を作って、全国大会でも披露させていただきました。

この一つ目のプラグラムのふるさとの良さを発見するに戻りますと、浪江で暮らした記憶がほとんどない子どもたちにとっても浪江をふるさととして意識することができ、ふるさとの風情や暮らしの良さを発見する機会にできたのではないかなと思います。

続いて二つ目のプログラムとして文化を学ぶということで、伝統工芸、食、祭り、その他について取り組んできました。特に本物との出会い、先ほども申し上げましたが地域に出かけていくことができない分、できるだけ本物との出会いを大切にして取り組んできました。ただし、平成26年度までと、平成27年度からでは少し取り組みに違いがあります。平成26年度までは大堀相馬焼、浪江焼きそば、安波祭、このように当初の主旨通りに浪江のことを中心に取り上げていました。

第二のふるさと

先ほど小林さんからもありましたように、平成27年度からは物事を多面的に見る力を育てるために、この仮校舎があり、第二のふるさととなってきている二本松市の、同じ分野について調べ、浪江町のそれと比較させるようにしてきました。例えば伝統工芸の大堀相馬焼と二本松の箪笥。学習のまとめとしては、この二つの学習を生かして二本松の家具作りの技術を生かした木製のコースターを、子どもたちが二本松の職人さんにご指導いただきながら作りました。二つの地域の伝統工芸の良さを生かした、コラボレーション作品を作って学習のまとめにしました。次に食として、かぼちゃ饅頭と和菓子。二本松市には和菓子屋さんが多いですね。あとは、紅葉汁とざくざく。先日道の駅に行ったらざくざくのレトルトが売っていてびっくりしました。実際に学校に来ていただいて、一匹の鮭を捌くところから見せていただき、一緒に食べるなんてこともありました。

祭りでは、浪江の十日市祭りと二本松の提灯祭りの同じところ、違うところを見せていただき、学習のまとめとして神輿を作りました。手作りです。神輿の一部分は浪江の海と二本松の空をイメージした青色、浪江焼きそばと二本松の家具をイメージした茶色、こじつけではありますけど、でも、子どもなりの発想としてちょっと笑っていただければと思います。本体の前の部分には浪江小と津島小の校章、横には浪江のコスモスと二本松の菊。後には浪江のカモメと二本松の松を飾り付けました。この神輿をプレ十日市と二本松の感謝祭で披露して会場をだいぶ盛り上げました。新聞でも取り上げていただいたようです。

次にその他、これは明確に分けるのが難しいので、その他としたのですが、三匹獅子と和紙、こちらも同時に比べながらやりました。漉いた紙は自分の卒業証書として、在校生は卒業生への送るメッセージとして、使っています。これは毎年今も続いています。

小林

これは上川崎の和紙ですか。

木村

道の駅「安達」の和紙伝承館で作っています。今年も12月ぐらいかな、予定に入っています。

もう一つその他としまして、厳密に申しますと浪江町の伝統芸能ではないですが、東京のロータリークラブさんの支援をきっかけに、平成25年度から標葉せんだん太鼓にも取り組みました。保存会の横山会長さんのご指導をいただき、夏休みに汗をダラダラかきながら教えていただいきました。結構厳しかったです。

何か自分たちで、元気だと

いつもただ支援していただいているということが多かったので、何か自分たちで、元気だと発信できるアイテムが欲しかったこともあって、この標葉せんだん太鼓に取り組んだと聞いています。今年二人なのですが、和太鼓演奏は二人でもできるのです。職員も入っていますけど。十日市祭りをはじめ、運動会、来校する方がいらっしゃった時に披露していました。曲は二曲あります。天響と朝日です。横山会長さんからは姿勢や目線、歩き方の所作から礼に至るまで、太鼓の技能だけじゃなくて、大事な心構えまで教えていただいたと担当から聞いてきました。このプログラムではふるさとを離れても伝統文化を維持しようとする人々の心意

気に触れることができましたし、他地域と比較することで自分たちのふるさとの魅力を発見すると同時に他地域の良さも理解することができたという大きな成果があったと考えます。

三つ目のプログラムです。三つ目のプログラムでも四つの具体的な取り組みを行っています。不自由な生活をされていた町民の方々を少しでも元気づけることができればと、仮設住宅訪問も行ってきました。平成24年度から29年度までの6年間続けました。塩沢、岳下、旧平石小学校、杉田、杉内、永田、大平、安達、恵向、郭内、建設技術学院跡などの仮設を訪問してきた記録が残っています。太鼓やダンス、歌を披露したり、昔の懐かしい遊びを一緒にしたり、直接触れ合ったりもしました。もちろん浪江っ子カルタも一緒にやりました。また春と秋の二回メッセージを添えたお花をお届けしました。仮設はなくなりましたが、もう一ヶ所、継続的に訪問しているのが、オンフール双葉さんです。平成24年度の一周年から現在まで継続しております。今年は5月に太鼓を持ってやってきたのですが、和太鼓演奏とか、クイズ、紙芝居、紙芝居は浪江の民話をやってきました。ダンベル体操やハンドベル、「さくらさくら」「ふるさと」、涙ぐまれていた方もいたと思います。二人しかいないのでやってもらうことが多いのですが、お年寄りのみなさんのために努力をして、それを認めてもらえた喜びは大きな自信になったと思います。

子どものこんなにも優しくて、穏やかで、うれしそうな表情はなかなか見ることができませんし、この子は立ってインタビューしていたのですけど、だんだん跪いてお年寄りと目線を合わせて、手を握りながら話しをしている表情は、学校で机に向かっているだけではなかなかできません。本当に有意義な時間にすることができたと思っています。

運動会も地域の方々と直接触れ合う貴重な場となっています。今年度は、「手と手を繋いで輪になろう。どんなことにも笑顔で頑張る浪江っ子」というスローガンのもとに地元の下川崎区長さん、グラウンドゴルフのメンバーの方々、福島大学や東京学芸大学の学生のみなさん、もちろん浪江のみなさん、そして保護者のみなさん。二人のために約80名を超える方々が参加、駆け付けてくださいました。本当に幸せなことだなと感じております。せっかくの機会ですのでプログラムもおいでいただく方々にちなんだものに工夫して、「下川崎ゴルフレース、ゲートの先には」、「請戸の鮭キャッチ、目指せ、大漁」なんていうのも恒例種目としてやっています。こじんまりとしながらもアットホームに盛り上がった良い運動会だと思います。来年は一人になってしまいますので、どうしたものかと思っているのですが、やりたい方向でおりますので、来年ぜひ駆けつけていただければありがたいです。

もう一つが学校応援の会のみなさまとの触れあいです。本当にたくさんの方々に関わっていただきました。正式には平成29年度に組織して、今年3年目の取り組みになると思います。これまでも運動会では、浪江焼きそばを準備していただいたり、事前に校庭にこいのぼりを用意していただいたり、交流会をしていただきました。このようなことをすでに今年度実施しております。2学期以降もまだまだお世話になります。よろしくお願いします。

最後にグラウンドゴルフの方々との交流です。毎週水曜日に学校の校庭で下川崎のみなさまがグラウンドゴルフをされております。今年度は2回ほど一緒にまぜていただきました。手取り足取り。仲良しになって、これがご縁で下川崎地区の第一回の夏祭りに招待いただきました。こういう古い地区で第一回目なのかと思ったのですが、地域興しをなんとかしなくちゃいけないと思ったという、区長さんのお話しでした。区長さんがわざわざチラシを持ってきてくださったので、参加してきました。だいぶ暑い日でしたが、やっぱりグラウンドゴルフをやっていました。9月にはグラウンドゴルフ並びに交流会をして、一緒にまたお話しができるような機会を予定しております。浪江町の人々との交流プログラムでは、さまざまな関わりを通して、不自由な避難生活をする町民の方々に元気をお届けすることができたのではないかということが一つ。

もう一つ、これが子どもたちにとって一番大事なことだと思うのですが、子どもたちにとって未来のふるさとを考える上で浪江町の方々との繋がりができたこと。これは大変意味あることだと思います。

先ほど小林さんからも紹介がありましたが、校舎内を丸ごと「まるごとなみえ博物館」というふうに捉えまして、看板を一緒に作業して作りました。常時ふるさとなみえ科の学習状況が見渡せるような学習環境づくりを小林さんにお手伝いいただいて進めています。学習の成果としての新聞、カルタの展示など発表、展示を工夫しながら教科の枠を超えた学びの可視化となり、子どもたちの学びにはもちろんですが、私たち教員にとってもこれからどうしていけばいいのかを考える良い効果を発揮しております。

これから、これだけのものを、休校になった時にどうしていけばいいのか。今、子どもたちと相談しています。一部は創成に引き継いでいくことになると思うのですが、どんな形で引き継いでいくのか相談を始めているところです。

「小さな学校で大きな感動」

最後、総括になりますけれども、教育の土台である地域と学校が引き離され、学習の機会を失いかけていた子どもたちの前に、当時の教師が作り上げたのがこの「ふるさとなみえ科」です。ふるさと喪失という先の見えない問題に直面しながらも喫緊の課題として子どもたちにふるさとへの誇りをもって、子どもたちが自ら課題を追求して、生き抜く力を育てたい。こんな思いが結実した学習プログラムです。本校のモットーは「小さな学校で大きな感動」でございます。この学校経営の中心に据えるモットーに「ふるさとなみえ科」は大きな成果を上げていると思います。具体的な成果としては、ふるさとと学校を繋ぐ本物との出会いを大切にしたことにより、子どもたちの課題解決に向かう探求心や挑戦心を刺激して、課題解決を自分たちのものとして意識できたのではないかと思います。また何より避難という学習環境での課題追及の新たな可能性として浪江町と避難先の二本松市、二つの地域との関係を大切にしながら探求的な学習過程を展開することができて、それぞれの人、もの、ことを活用した深まりのある学びをすることができました。子どもたちにはふるさとを誇りに思う心、地域の方々に対する思いやりの心が確実に育ってきていると感じます。今後もこの学びが自分にできることは何かについて考え、未来を見つめ、将来の夢を抱くことに繋がっていけばいい。長々とご清聴いただきましてありがとうございます。

小林

木村先生ありがとうございました。浪江小学校、津島小学校が今までやってきたことが良く分かりました。先生たちの思いも、子どもたちがそれを受け止めて浪江の方たちに届けようといろいろなことをしてきたことも。

ふるさとなみえ科で取り組まれた浪江と二本松二つの地域を大切にというところ。第二のふるさとと言ってらっしゃいましたよね、二本松市を。低学年で避難した子であれば、小学校から中学校の時間を二本松で過ごしたということですので、間違いなく大事なふるさとに二本松がなっていると思います。その子たちが学校を通して二つのふるさとを自分たちの中に持ち続けているとお話しを聞きながら感じました。

後半は、浪江、二本松のみなさんからぜひご感想等もお聞きできればと思います。何度かお名前も出ました原田さん、ぜひご感想と子どもたちを見つめてこられての思いを一言お聞きできますか。

日本初のこの9年間

参加者・原田雄一

木村先生どうもありがとうございました。こちらに避難してお世話になってから9年近くになります。その間、ずうずうしく小学校におじゃまして、こちらが勝手にいろいろお願いしたことがずいぶん出てきました。先生の子どもさんを心配する教育の姿勢といいますか、そういうのが私の心を打ったものですから、何とかこちらにいる大人だけでも学校を応援したいということでできたのが応援する会でした。子どもたちと一緒に浪江の未来を模型で作りました。早稲田の先生、ロータリークラブの支援がありました。今も大切に学校に保存されています。それは、9年間の学校の歴史といいますか、学校が終わったからポイ捨てじゃなくて、何らかの形で残していただきたい。あれは学校だけの宝じゃなくて私たち浪江町民一人一人の宝でもあると思います。どうやって残すか、できればオープンな形で浪江町民の方も話し合いに交ぜていただき、一番良い方法を考えていただければと思っております。町が意外と、日本初のこの9年間を、何と言うのでしょう、蔑ろとまでは言わなくてもどういう形で残すかという議論がまったくなされていないのです。これは本当に大事なこと。これを次の世代に伝えることが、私たちの災害の心の痛みとか、これからの生活とか、そういうことを考える上で本当に大事なことなのです。検証がね、意外と少ないのです。役場に聞いても知っている人がいない。ということは、担当の方がお辞めになって、次に伝えていないのですね。

今、浪江に浪江小学校がありますけど、浪江小学校をあのままにしておくのではなく、今の下川崎の浪江小学校のすべては難しいから、そのエッセンスを向こうに持っていき、二本松ではこういうことをいろいろな方の協力をいただきながらやってきたということをぜひ残していただきたい。実は木村先生がおいでになる前に教育長に文書を出したのです。新しい教育長に伝えますということでしたけど、まだリアクションがない。心配な部分があります。二本松でのいろいろな私たちの体験を忘却の彼方に忘れ去るのではなくて、何とかみんなで共有して、これからのまちづくりに生かしてもらいたいと思っております。

小林

ありがとうございます。博物館でこういう事業を始めたのも、震災の後に起きたことを伝えることで次に何か起きた時に、もっとスムーズに動けるのではないかと思ったからです。博物館は昔のことから学んで、それを今に生かす場所です。先生、学校の博物館の今後のことで子どもさんたちと話していることなどを補足していただけますか。今どんな意見が出ていますか。

木村

基本的にそのものの引き継ぎは別として、内容的なものは創成小学校に引き継いでいけるようにしたい。今年度と来年度の二年間かけて、内容をまとめていくというふうにはなっています。

小林

そうすると、浪江に戻ったみなさんに二本松のことも伝わっていったりするのですかね。

木村

ただモノが難しいですね。物理的に場所の制約があるので、創成小学校にそのスペースが

あるかというとそうでもない。どのような形になっていくか教育委員会も含めた相談になっていく。

小林

昨日ニュースを見ていたら大熊町でもアーカイブズの施設を作りましょうという答申が委員会からあったとお聞きします。起きたことが大きかっただけにどこも何とかして残そうという思いはあって、それぞれの町村で動いていかれるのでしょう。

身の回りに子どもがいない

参加者A

先生ありがとうございました。途中からでしたけど懐かしく見ていました。私たち最初は小学校と触れ合う機会がなかったのですけど、途中からお声かけしていただきました。その頃私は仮設に住んでいたのですけど、身の回りに子どもがいない。自分の孫も手元にはいない。小学校に行くと子どもたちと触れ合える。昔の運動会、家族全員で出て行ってみんなで応援する、あの懐かしい運動会を経験させていただいたのがご縁で、ずっと関わってきました。代理ママと言っているのですが、津島小の子どもたちが、だんだん大きくなっているのを見ているのは、手元に子どもがいなかったですから、すごくうれしかったです。本当にありがとうございました。

参加者B

ちょっと気になったのは、浪江に創設された小学校はどのぐらいの人数が今いらっしゃるのか、ちゃんと町が構築できているのかが気になりました。町に材木屋さんがあるのですが、帰って始めるという。昼間だけ動かしてどこまで仕事になるのだろうと心配になったことがあります。それがだんだんと新しいコンビニもでき、6号線もまだダンプが多いのですが、乗用車でも結構混み合うようになったのが今の状態ですね。二本松にいた時期は消すことができないし、それを記憶から避けることは絶対にして欲しくないと言いますか、それを含めてこれからの子どもたちの生活なのだと思うのです。それも浪江町を再構築することがあっての話しだと思いますので、ぜひどんどん子どもが増えていったらと願う次第でございます。

小林

ありがとうございます。創成小中は何人ぐらい。

木村

小学校14名になります。中学生は2人です。多いと言える状況では決してありませんが、昨年度小学生については8名でしたので、微増している。夏前にはイオンが開店し、生活の基盤となる環境が少しずつ整っていけばまた増えてくる可能性がないわけではない。町でも子どもたちが増えるような取り組みをいろいろ考えているようです。

参加者C

私は浪江小学校、津島小学校さんと接するようになってからまだ日が浅いです。今、二本松の借り上げ住宅にいた人たちの自治会を二本松コスモス会員としてやっています。学校にすごく子どもは少ない。でも、恵まれた環境の中でたくさんの先生と触れ合って、町民と触れ合って、地元の方との触れ合いもあって、うらやましいなって思える部分もあります。子どもたちがそれを、卒業していって、どこまで憶えていてくれるのか。自分たちのふるさとは浪江だけど、浪江に対する思い入れというか、そういうものをどこまで憶えていられるのか。今の浪江と津島の小学校の思い出が深く残って、本当の自分たちの浪江は忘れ去られてしまうのではないかと思ったりします。私も孫がいますけど、郡山の小学校、中学校にいます。でも、そっちの学校から見たら、今の下川崎で授業を受けている子たちのほうがすごく恵まれていて素晴らしい。本当にうらやましく思っています。それをどういうふうに大人になっても思っていけるのか。浪江の創成小学校、中学校に行って、それを向こうの子たちがどこまで分かってくれるのか。二本松に避難して、みなさんにお世話になって、ここまで自分たちはやってきたという思いが向こうで授業している浪江の子どもたちにどこまで伝わるのか、そんな心配もあります。こっちで授業を受けた子どもたちがすごく恵まれていて良かった。本当にこれは忘れないで欲しい、忘れてはいけないと思っています。避難生活だったからこそできたのであって、もともとの浪江小、津島小でなかなか今のような触れ合いはなかったと思う。

小林

おっしゃること分かります。先生が地域と学校が引き離されたということをお話しされましたけど、こんな状況に陥るってことは普通ない。そういう大きいことが2011年に起きて、その中で学校は何ができるのだろうということで「ふるさとなみえ科」をやって来られた。離れた土地で、本来だったら土地と一緒にあるからこそ伝わるふるさとのことを、離れている中でどうしたらいいのか頑張って来られた。だからこそうらやましいと言われる授業の中身になったのだと思います。帰ったらどうそれが伝わるのか、今いる子たちに浪江がどう伝わっていくのか、きっと先生も模索しながらの数年間だったと思います。それを大事にしながらやってこられたのですよね。

本物に出会ったことは価値

木村

そうですね。地域に出かけていくことができない分、本物に触れさせたいとお願いをしました。浪江の方はもちろん、二本松の方々も快く引き受けて学校に来てくださり、あのような体験をさせていただいた。普通ではないことだったと思います。やはり日常生活の中でこれから先、そういったことも忘れていくと思うのですが、またもう一回出会った時、触れた時、一緒にやった人と再会した時、きっとすぐに記憶は戻ってくるに違いない。だからこそ、本物に出会ったことは価値があったと思います。やっぱり創成に引き継いで、それをどこまで理解してもらえるかとなると難しい部分はあると思うのですが、でも、何かしらアーカイブとして残しておかないといけない。

参加者C

きっと大変だと思いますけど、これを引き継いで残していこうとすると、どこまでやっていけるのか不安もあると思う。今の学校を残してあげたほうが子どもたちにはいいと思ったりするけど、それは無理なことですね。無理なことだと分かっているけど、浪江の創成学校に持って行っても、どこまで引き継いで残していくことができるのか不安が大きいです。せっかく良い体験をしている子たちなのに。

小林

二本松では、震災後の浪江のみなさんと過ごした数年間を残していけないかみたいな話しは出たりするのですか。

何かが残っている

参加者・大松佳子

二本松に住んでいます。二本松の中で残していけるのかどうかという提案があるとか、考えがあるとかはまったく分からないです。ただ見聞きさせていただいたことから想像するに、日本国中でいろいろなことが常に起こっている。廃村になったり、合併になったりして、ショッキングな東日本大震災という大きな事件じゃないにしても、学校、思い出を失っている人たちは日々いるような気がします。自分はそういうことに遭遇していないけれど、小学校の思い出って何だろうと思うと記憶していないことのほうが多い。でも、記憶していることもたくさんあって、鮮明に覚えていて、何十歳になっても自分の中に残っている。それが具体的な建物なのか、思い出の中の匂いなのか、一人一人違うような気がします。木村先生に紹介していただいた日々の生活を拝見した感想で、やっぱりそこにいた一人一人の中にこの日々は覚えていようがいまいが何かが残っていると思います。せつない話しだけれどもそれは、失っていく日々、時間の中でなくしてしまうものも多いと思う。でも、その中の誰かの行動の中に何か残っている可能性があって、具体的な言葉でなくても、書いた絵、人に話す時のトーンに反映されていくと思うと、まったくなくなってしまうことはないし、逆にすべてが残るわけでもない。今回のような特別なことでありながらも仕方のない、時が過ぎていくってことなのかなと思います。ただ残していく方法は知恵を絞ると良い方法があるような気もする。

私たちは突然浪江の方たちと一緒に過ごすことになった。浪江の方たちのお話しを一人一人に聞くと筆舌に尽くしがたくて、お一人お一人に一つ一つの物語があって、それは言葉では言い表せない。今、日本で突然にふるさとを失う人、これからどうしていこうかと考えている人がどれだけいるのか。そう思うと、誰もしたことのない経験、誰も答えを出すことができない経験をして、その中でもこんなにたくさんの方が仲良くして、良い思い出をもらったと言ってくださることに本当に頭が下がる。二本松で過ごしたこの時間を私たち大人ですらも消し難いので、子どもたちはさらに衝撃的なものが心の中に残っているのかな。

具体的に二本松でどうするとか、そういうのは政治の力、経済の力、いろいろなことが上手くいかないと見通しが立たない。これから町がどうなっていくかということと小学校自体がどうなっていくかというのはとても深い関係があるので、一言で 私たちが申し上げられるような話しではないですけれど、おそらく子どもにしろ、大人にしろ、一人一人の人間の中に残った欠片みたいなものが、いつか何かの形になって表れてくるというふうに私自身は考えてこれを拝見しました。

小林

子どもたちのキラキラをずっと追いかけてきてくださった方が会場にいらっしゃいます。後ろで寡黙に撮影してくださっている赤間さんは、先ほどお話ししたカルタを作る時に私たちが学校に入らせていただいた頃から、ずっと浪江小、津島小の子どもたちの日々の姿を記録しています。赤間さんは今では二人になってしまった子たちが小さい頃からずっとご覧になっていたので、今日のお話しを踏まえて一言ください。

スタッフ・赤間政昭

そうですね。福島県立博物館のプロジェクトで3年ぐらい前ですかね、関わらせていただいて、その仕事は終わってしまったのですけど、学校さんからお願いされて、そのまま引き続き映像を撮らせていただきました。最初に撮影している時に貴重な記録になると思ったものですから、そこで終わってしまうのは残念だったので先生方にご相談して続けて撮らせていただいています。来年度の津島小学校の閉校まで。写真でもいいのですけど、映像の方が情報量は多い。画、音、声といろいろなものが入るので、引き続き撮らせていただいています。

小林

どうですか、この数年間、子どもたちの様子は。

浪江・二本松

day1 オープンディスカッション

浪江・二本松

day1　オープンディスカッション

赤間

最初ちょっと思ったことがあります。僕も含めていろいろなメディアの方たちが来ます。浪江、津島以外の前にやっていた中学校もそうでした。言い方が不謹慎かもしれないけど、子どもながらメディアに慣れている、慣れてくる。それがちょっと、こういう現場に行くことがあまりなかったので、自分で撮っていながら違和感を感じることが正直ありました。年頃の中学1年生の女の子なんかはすごく慣れちゃう。何度も来るものだから。同じ年齢の他所の、普通の子だったらどういうふうに対応するのだろうって感じたことがありました。今、浪江小学校の子たちはあまりそういうことはなくて、本当に素直に育っている感じがします。それはやっぱり先生のご指導の賜物だと思います。先ほどおっしゃられたように学校は、すごく恵まれている。生徒さんたちは2人しかいないですけど、周りの人たちは運動会があると、80人超とおっしゃっていましたけど、本当にみなさんで応援して盛り上げてくれる。そんなことってないじゃないですか。いろいろなところに見学に行ったり、創成中学校と交流があったり、本当に恵まれているなと思います。引き続き撮っていきたいと思っております。

小林

ありがとうございます。赤間さんのようなカメラを抱えた大人がふっと学校に入ってくる状況もイレギュラーですよね。通常であれば学校の中にいないタイプの大人がいる。今の浪江、津島小学校は良い意味で開かれていて、だからこそ浪江の方も下川崎の方も来られて、学校が人の交わる場所になっている。

セキュリティのことも最近よく話題になるので、学校が閉じていく印象を受ける時もありますが、今日の先生のお話しを聞くと、学校が開かれて、いろいろな人が交わる場になって、いろいろな世代、タイプの大人が周りにいることを子どもたちが当たり前に体で感じている。そういう場所に学校がなっている印象を受けました。先生はどう思われていますか。初めましての挨拶が学校で発生する。すごいことですよね、それって。

どんどんおいでいただきたい

木村

運動会はそういう場だったでしょうね。セキュリティとたくさんの方に関わっていただくこととは別かなと思うのです。セキュリティはきちんと強化しておかなければいけませんが、だからと言って関わってくださる方の枠を狭めるのはまた別な話だと思っておりますので、どんどんおいでいただきたいと思っています。

先日こういったことがありました。昭和の終戦間際と直後に卒業された方が、下川崎小学校に懐かしくて建物を見たくなって来たことがありました。ご兄弟で神戸や東京から。四人姉妹できょうだい会をされたそうです。そこで学校の話しになって懐かしくなっていらっしゃったので、どうぞどうぞと入っていただき、その当時のお話を子どもたちにしていただきました。そんな感じでいつでもウェルカムですので、みなさんいらしてください。

参加者D

この10年間、浪江が置かれている状況というのは、みんながバラバラ。今、バラバラにならないようにすることができたのかどうかをまとめようとしている。同じように二本松と浪江の方が交流されたということをただ言葉だけで終わらせるとなくなっていくと思う。お隣におられます佐藤先生は杉田小学校の先生だったのですけど、近くに杉田の仮設が2つあった。そこに合唱の子たちを連れて、浪江の人たちを励ましに行ってくれていました。そういうことも、ここで話したらそれでなくなっちゃう。

だから、私は、私たちはどうやって過ごしてきたか、二本松の人がどうしてくれたかを可視化、言葉に残してまとめる、いわゆる検証の時期が来ていると思う。10年を機会にそれをまとめていく。それをまとめないと、これからはありえない、そんなふうに思いました。

そこで生活があった。あの子たちはここから来たのだ

参加者E

子どもに音楽を送る会と言います。今は原田さんが会長でそこには大松さん、浅井さん、私とその他の理事が何人かおりまして、いろいろな活動をさせていただいています。内容をちょっとお話しします。原田さん、橋本さんとの出会いが浪江さんとのすべてです。涙が出ちゃいますね。当時、私は小学校の教諭をしていたのですが、入ってきた浪江の子、大熊の子、富岡の子、その子たちと一緒に授業をやるわけです。ふるさとの授業で浪江の子たちに昔話を聞いたのですが、まったくお話しができないと言われました。それは本当に無垢な小学校5年生だから。いろいろ素材がなかった。学ぶべきことがあるから学校で学ぶわけで、学ぶべき素材が結局なかったということです。

その子たちと道徳の授業、総合学習で話しを聞き、作文をすると浪江町から逃げてきたこと、浪江町で食べたもの、それから、お裾分けがあるとこの辺では果物だけど、浪江ではお魚をたくさんもらったとか、そういう地域性の違いを話してくれました。

原田さんたちが中心になってやった盆踊り、二本松の商工会議所の方たちと一緒にやった盆踊りに各学校にバラバラに避難した子たちが来た。ある男の子が同級生に会うわけですよ。でも、声をかけられない。その気持ちが何から生まれるのか分かりません。私のクラスに来た男の子が俺は浪江小学校で5番目に悪かった男だって言う。5番目が微妙とか言いながら笑っていたけど。浪江町に入らせてもらって、小学校を見ました。あの大きな浪江小学校の中に500何人かがいて、そこで生活があった。あの子たちはここから来たのだなと思いました。そこが、私が今こういう活動をやっている原点です。

私たちの活動の中の「請戸小学校物語」は請戸の子たちが避難してきた経験を語っています。41人メンバーがいますが、二本松市内の小中学生、任意で集まった子たち。大きな子は大学生になっています、6、7年続けているので。子どもたちが疲弊した部分もあって、自分は大学には行けないと言う。どうしてと尋ねたら、家にお金がないからって。そういう数年前のことが、私が退職して今いろいろな活動をやっている中身になっています。

今回は、良い経験、機会だと思う。私は二本松にいて、教職員で、子どもたちと関わりがある。その中で、こういう関わりの中で、私が、「子どもに音楽を送る会」でやらなければいけないのが、浪江さんがこれからアーカイブで残したいということがあった時、素材として出せるものを常に集めていくことだと思っています。

当事者であるみなさんが、浪江町として請戸小をどう扱うかとか話しているそのことに意見を言うべき立場ではないと思いますが、こんなことが欲しかった、あんなことが欲しいって思った時にすぐにお出しできるような資料をきちんと出せる立場にありたいと思っています。

原田さんに先ほど少しお話しをしたのですが、浪江小学校の中にアーカイブを、請戸小学校と違う形で残すには、私は今の浪江・津島さんの小学校の中身を残すのがとても適切だと思います。どのような形で残すか、お手本が神戸の人と防災未来センターのブース、行ったことがある方もいらっしゃるかもしれないですが、映像、モノ、証言をパソコンのデータできちんと残してある。ずっと変わらないブースと常に変わるブースがあって、それが浪江小学校の中に残されていれば、それは素晴らしいと思っています。

浪江町の中学校の26年度卒業生が作った「未来の光へ」という歌があります。私、認識が不足していて、浪江中学校さんが今年まであると思っていました。今年の4月で閉校したってまったく知らなくて申し訳なかった。「未来の光へ」を歌っているところは、僭越ながら、私たちの集団だけかと思います。あれをどうにかして残したい。「群青」という歌も同じ24年に大熊中学校の子たちが歌って、わりとよく歌われています。その歌をどうにかして残したい。私たちの声では駄目なのです、やっぱり浪江町の子の声でないと。創成中学校の校歌もありますけど、第2校歌、又は愛唱歌、何でも構わないです。どこかで必ず浪江の子どもたちや人たちの声で残してもらいたいと、強く思っています。その時の中学校の校長先生が、今の教育長さんであられるので、教育長さんにもお願いしたいと思っています。これから大松さんやこのメンバーでどこまでやれるか分かりませんが、6年目になるので頑張ってやっていきたいと思います。

小林

歌の形で残るのはいいですね。歌い継がれていくでしょうから。何かの時、欲しいと言われた時のために準備して残しているというお言葉も印象に残りました。

参加者F

浪江の子たちが書いた作文とか、当時のクラスの子どものものがあります。

小林

時間になってきてしまいました。二本松でみなさんと芸術祭をされてきた福島大学の渡邊先生がいらっしゃいます。お願いできますでしょうか。

人の思いを残すこと

参加者・渡邊晃一

福島大学の渡邊晃一です。木村先生の話し、すごく整理されていて分かりやすく、プレゼンのやり方に感激しました。どういうことをなさってきたのか、知らないことも多かったので今回いろいろと勉強させていただきました。私は北海道の夕張出身です。夕張は炭鉱事故があって炭鉱が閉山されて、私自身の小学校はもうありません。跡形もない。今後、どういう形で自分たちの思い出を引き継ぐか、重ねて聞かせていただきました。

浪江について勉強不足で、福島大学に来ても25年ぐらいになるのですけど、震災の時の記憶が一番強い。学生が三匹獅子をテーマに調査をしていたので、浪江に行き三匹獅子の話しを聞きました。その時に聞いたのは、元々男の子しかできなかったものが女の子もできるようになって、女の子ももういなくなったと。

歴史がどう引き継がれるかという問題と重なってくると思う。私がずっと研究室で使っているカップは大堀相馬焼です。震災後、二本松で芸術祭をやっていて、ここの美術館が中心なので浪江焼きそばをいろいろ食べた記憶もある。県立博物館とご一緒した活動で、請戸小学校で黒塚をテーマにした映像作品を撮らせていただいて、その時に二本松と浪江が繋がる映像を残した記憶も振り返りながら拝見していました。

夕張の問題と重ねた時、私は中学校の時に父の転勤で札幌に移っちゃったけど、夕張の資料は、例えば夕張の高校の資料が今ホテルになっているひまわりという学校に残されたりしていますが、なかなか難しいです。物質としてモノを残すということよりも、大松さんもおっしゃっていたけど、人の思いを残すこと、これが一番重要。一番良いのは子どもたちの繋が

りを残すことだと僕は思っています。私は夕張が大好きで、札幌にいた友達よりも夕張の小学校時代の仲間と会う機会が多いです。昔の話しをよくします。運動会で親が一生懸命お昼のお弁当作ってくれた記憶、その時食べたものの記憶が大事。なぜあの時足袋で走ったのかな。なぜか運動会の時に足袋を履かされた記憶。そういうことをお互いに同級で喋ることで残していったものが大事だったりする。でも、それを語るきっかけとしてモノがなければだめで、そういうモノを残すことも大事。

二本松で芸術祭を重陽というキーワードでやって思ったのは、「んだげんちょ」「未来の光へ」のような音楽とかアートは絶大な力を持つということ。記憶を戻した時に当時一緒に歌った歌、見て来たものの記憶がもっと違った記憶を引き出すきっかけになることがあると思う。直接的なモノを残すのも大事だけど、記憶を残していく活動を引き継いでいく。

実はモノを残す以上に重要

この活動はライフミュージアムですけど、ミューズとは記憶の女神ですから、美術館とか、博物館はモノを残すためにあるのではなくて、その時代、地域の記憶を残すためにあったと思う。そこにライフがついているから絶大な力を持っている。だから、福島、浪江の記憶をキーワードにした勉強会とか集う会、子どもたちが出会う会を残すことが実はモノを残す以上に重要なのかもしれないと思いました。30人いた子どもたちが、2人になって、1人になってという話しも僕も自分の夕張の思いと重ねながら聞きました。卒業して40年経った自分が子どもの頃の記憶に遡った時、一番大事なのは語り合うきっかけですよね。同時に人と人との繋がり、当時出会っていた友達と出会える場を作る、それがライフ、生活を残していく重要なキーになっている。自分の記憶と重ねながらそう思いました。

木村先生が提案したものや、残したものは本当に貴重な資料だと思うので、それは博物館に残していただくなり、学校で残して、それ以上に子どもの繋がりを大事にしてもらいたい。子ども同士が出会える場を作ることを今後手助けできればなと思います。今日はありがとうございました。

小林

ありがとうございました。まだみなさんのお話しを聞きたいですけれども、お時間になりました。木村先生、渡邊先生が言ってくださったような場。それが学校、博物館や美術館いろいろなところでできるといいと思います。そこで私たちもご一緒させていただけたらうれしいです。

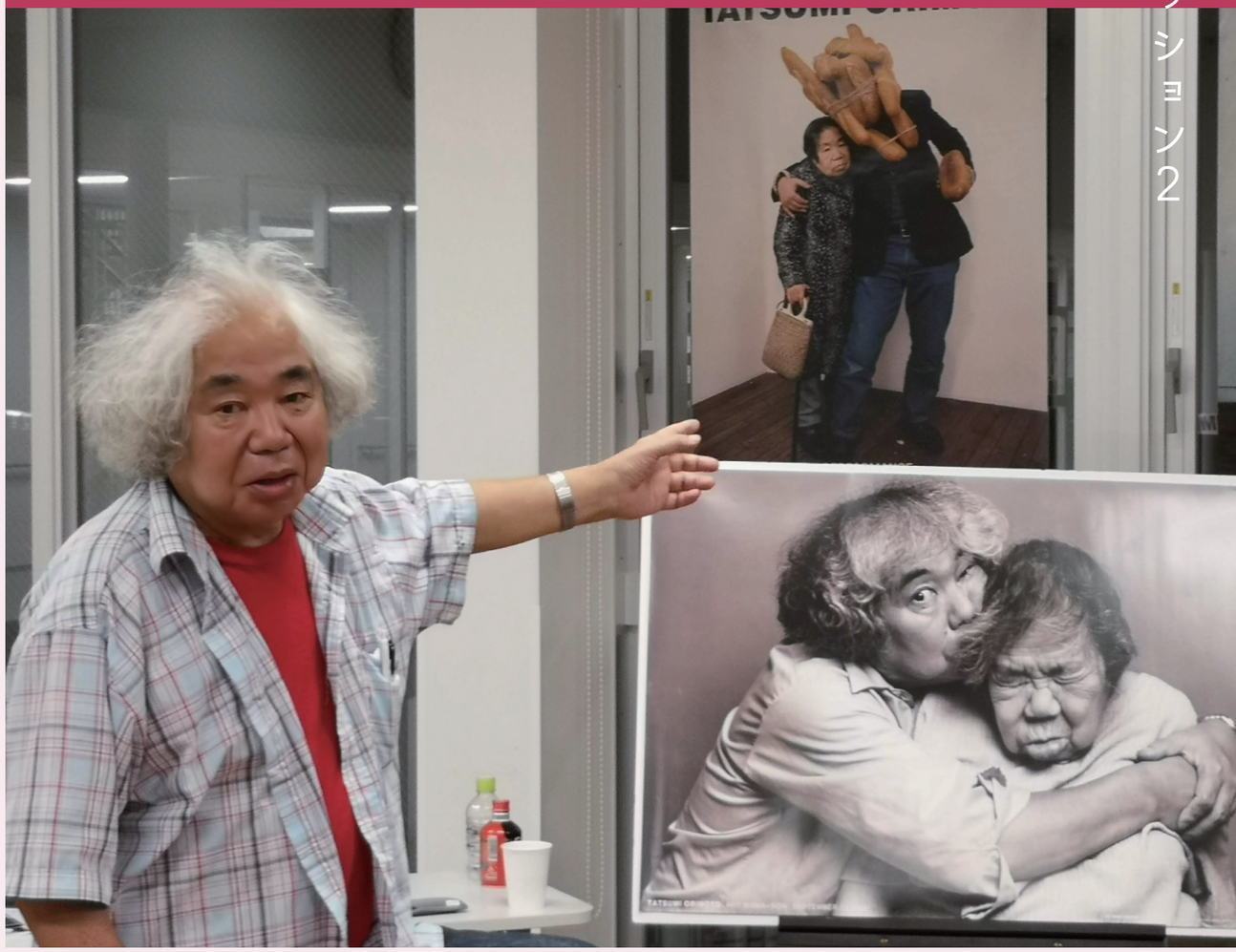
浪江・二本松

day1 オープンディスカッション

day 2 オープンディスカッション2

オープンディスカッション2　地域でアート、ハートでアート

日　時：9月11日（水）18：00〜19：30
会　場：二本松市市民交流センター　第2会議室
講　師：折元立身氏（美術家）
　　渡邊晃一氏（美術家／福島大学芸術による地域創造研究所所長）
講師補助：元田典利氏（美術家）
司　会：小林めぐみ（福島県立博物館学芸員／
　　ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）



浪江・二本松

事務局・小林めぐみ

みなさんお待たせいたしました。今日はお忙しいところお越しくださいましてありがとうございます。県立博物館の小林と申します。よろしくお願いいたします。今日は「地域でアート、ハートでアート」というテーマでお二人の講師をお招きしました。お一人目、折元立身さんです。折元先生よろしくお願いします。そしてもうお一人は二本松のみなさまにはおなじみの福島大学の渡邊晃一先生です。

今日は渡邊先生に二本松でこれまで行ってこられたアートプロジェクト、芸術祭のことをお聞きし、折元先生からはこれまで世界各地や日本国内各地で地域と繋がりながらやってこられたことについてお聞きしまして、後半は会場のみなさんともアートプロジェクトや文化事業は地域に何を残せるのか、交流を生む場になり得るのかということもお話ししていけたらなと思っております。

それでは渡邊先生からお話しをお聞きします。先生どうぞよろしくお願いいたします。

渡邊晃一

よろしくお願いします。重陽の芸術祭で実行委員をやっていただいたみなさんにお越しいただけて本当にうれしく思っています。折元さんウェルカムトゥ福島。福島までお越しいただきありがとうございます。今日は地域でアート、ハートでアートということで私がやってきた二本松でのアート活動をお話しさせていただきます。

折元先生がいらっしゃっているので懐かしい写真を見つけてきました。2005年、大学に来ていただいて先生にワークショップしていただきました。その前の年に「老い」展という川延さん中心に行っていた県立博物館の展覧会で出会ったのがきっかけで、その後CCGAという大日本印刷のギャラリーでの講演をお願いして、福島大学にもお越しいただきました。折元先生に影響を受けて、学生が顔に花をつけて福島駅前でパフォーマンスをして検挙されたという事件もありました。影響力の大きい先生にお話しいただけたことを感謝しています。2006年に、福島ビエンナーレで「二人のタツミ」展を開催しました。土方巽という舞踏家と折元立身というパフォーマンスアーティストを重ねて福島大学の芸術祭の中で紹介させていただきました。バングラデシュから来ていた学生もいたので、一緒に雪の降る中を温泉に行った思い出があります。で、川延先生の若い写真も。もう13年前。みんなでこうやって歓談していました。

福島ビエンナーレ

今日は芸術祭ということでお話しします。2006年、2005年に折元先生がいらして福島大学で芸術祭に関わっていただくきっかけがあったのです。福島大学は今年から新しく芸術表現コースというのに生まれ変わったのですけど、2004年からは、それまで教育学部だったものがスポーツ芸術創造専攻という専攻に変わって、人間発達文化学類となりました。

この時からです、芸術祭を始めたというか福島ビエンナーレという展覧会を企画し始めたのは。教育学部の頃は将来教員になることを名目にしていれば良かった。折元先生にパフォーマンスしていただいた時はまだ教育学部の学生たちでした。2006年から芸術祭が始まって人間発達文化学類になる中で、どう地域とアートを繋げていくかの課題が出てきました。学校の先生になるのであれば、一つの簡単な結論があります。将来小学校、中学校、高校で美術の先生として教えていく。でもそうではなくて福島大学という福島にある大学が地域とどう繋がっていくか考えた時に、アートによる文化活動を通じたまちづくりや、地域の活性化に関する実践を行っていかなきゃいけない。最初の頃はまちづくりとか文化政策、国際交流みたいなことを取り入れたのですけど、その後震災が起きて、復興支援という名目も加わってきました。それぞれの名目で、例えば地域産業と連携して新たな商品デザインを開発しました。例えばももりんサブレーみたいなもの。発泡スチロールを作る会社と一緒にアート作品を作る。国や県のアドバイスもある。国が行ったものでいえば、生涯学習フェスティバルを少し支援する。県が行っている映画祭で一緒になってアートの映画を上映する。

今日の話しのメインはアートプロジェクト、芸術祭でのアートを通じたまちづくり、地域にアートを持ち込んでいく活動。2011年、12年、震災を経た時に最初は福島空港、2012年に福島空港、その後喜多方、湯川村で行い、その後着地したのが二本松でした。二本松での芸術祭は2016年から。「重陽の芸術祭」というタイトルをつけました。

「重陽の芸術祭」

二本松市の振興公社さん、道の駅とかふるさと村を管理しているグループの方々が重陽の芸術祭の実行委員を含め実行委員長をなさっていて、その中で行ってきた芸術祭です。二本松のキーワードとして一つは鬼婆伝説のある安達ケ原があります。二つ目に智恵子の生家。さらには二本松城。二本松での芸術祭はどういうタイトルがいいかという入り口から、まず話しをしたいと思います。福島ビエンナーレは2004年から継続的に行ってきて、「風と土の芸術祭」を会津美里町、「豊穣の芸術祭」を湯川村で行ってきました。「重陽の芸術祭」はずっと継続的に続けさせていただいています。昨年2018年は南相馬で「海神の芸術祭」という芸術祭を行ったのですけど、これは1回で終わってしまいました。

二本松でなぜ芸術祭が継続的に行われるか。一言で言えばみなさんのご尽力というか、手伝ってくださる方々が本当に多かった。

結論から先に言うと、地域で、アートで何ができるか考えた時に、アーティストの作り出す作品を連動させて新しい財産を生み出していく可能性を地域の中でどう作るかということ。二つ目としてアートを介して人と人が繋がっていくネットワークを作っていく一つの媒介になるということ。三つ目としては、作られたものが地域の中の記憶になること。記憶というのは個人の心の中に残るし、作品が残されることによって文化的財産になっていく。

二本松でのテーマというところにもう一度戻します。二本松は富士山の見える最北端の地の一つで、日本一の菊人形祭りが行われている。智恵子の生家はもともとお酒を作っていて、菊とお酒を繋げた時にこれは重陽ではないかと思った。お酒に菊を浮かべて長寿を祝うと

いう祭りです。安達ケ原の鬼婆も長寿だった。

重陽の節句の風習をアートに盛り込み新しい作品を作ってみました。文化資産では、例えば智恵子の生家、黒塚、ふるさと村とたくさん地域の財産がある。そういうものを活用しながらアートとして繋げていく。地元には様々な伝統文化、例えば上川崎和紙、二本松の菊人形もある。そういうものを新しい若い作家たちに使ってもらい作品作りをしていくことで芸術祭を盛り立てました。

具体的にどんな作品かというと、菊人形祭りの中にアート作品を持ってきた。ヤノベケンジさんが増田セバスチャンさんと一緒に作ったフローラという作品。菊人形祭りという伝統的な形の中でこういう大きなアートを持ってくることに否定的な考え方もありましたが、地元の方々、市長さん、協力的な方々が多かったために展示することができました。しかも喜びは倍増して、このフローラは電飾ですごくきれいだから、夜のイベントを作ろうよと。一般的にはこういうイベントを地域の中で急に持ち出しても、最初から決まってないということでダメになっちゃうことが多い。二本松はそうではなかった。夜道にLEDをつけて若い人たちが来られるような環境作りを含めて夜の芸術祭を盛り立ててくださった。芸術祭は単純にアートのイベントとしてアーティストと観客を繋ぐだけではなくて、会期中に二本松でTシャツを作って多くの人たちに着ていただき、二本松のお酒屋さん大七酒造さんが作品フローラをラベルにしたお酒の販売をしてくださった。地域の中にどんどん広がっていきました。道の駅さんが実行委員の中心として活動してくださった経緯もありザクザクカレーとか重陽丼みたいなものもできた。地域の中で「重陽」というキーワードがどんどん盛り上がった。大松さんにもご協力いただいて、お酒じゃ、昼間の乾杯ができないから菊茶で乾杯した。夜は夜で二本松の万古焼で菊をかたどったお猪口を作ってそれで乾杯をした。こういうふうに衣食住すべての文化を網羅しながら、重陽というキーワードで組み立てました。

学生たちも一緒になって実行委員の中に最初の頃は入っていました。残念ながらその後の実行委員会には学生が入らないで地域の方だけになってしまった。その理由は単純で、福島大学は国立の大学なので、お金を使う時に芸術だけで切り分けることができなかった。芸術祭の管理は外部にお願いしたいと言われてしまった。でも学生たちの学びの機会としてもいろいろと展開させていただきました。大山忠作美術館では菊をテーマにした作品展示で様々なアーティストが作った菊の作品を展示した。美術館の向かいには市民ギャラリーがあって、そこでは福島のアニメーション制作会社のガイナックスと作家さんとのコラボレーションのアニメーションを上映しました。

さらに地元に上川崎和紙という和紙があります。この和紙は平安中期のみちのくの和紙として紫式部や清少納言が使用したとも言われています。2004年とか6年の頃かな。私が大学に来たのは1995年ですけど、その頃は和紙を作っている家がたくさんありました。学生と一緒に何年かその和紙作りを体験させてもらった記憶があります。道の駅に和紙の伝承館ができたのは何年くらいでしょう。平成13年、2001年ですか。だからこの芸術祭の最初の頃、2004年に始まった頃にはもうなくなっていた。私はこの福島にいて、福島のこういった伝統的なものがどんどん失われていることにあまり気が付かず、この時期は外に目を向けて展覧会を企画していたような気がします。震災後は福島の伝統的な材料を活用しながら、地域の方々と連携してやらなきゃいけないという気持ちが強くなりました。

で、この上川崎和紙を利用してどんなものをやってきたか。もともと智恵子さんは切り絵の作家です。オランダ在住の日本人アーティスト鈴木樹里さんに和紙を使った立体絵本というものを作っていただいた。スイスのイラストレーターのコーネリアさんは切り絵をモチーフにして震災前と後というテーマでワークショップを行った。芸術祭のメインのコーナー智恵子の生家では、小松美羽さんが上川崎和紙で障子を全部張り替えて、そこで公開制作をしました。私はその時に地域のものを使ってくれたこと、若い子たちがそれを使った経験を活かして発表活動の中に二本松とか重陽という言葉を残しながら活動歴を加えていくことがとてもうれしいと思った。

2016年のこの芸術活動を地域の資産として、智恵子の生家を利用した活動を継続的に若い女性アーティストにお願いしようということになり、その次の年は清川あさみさんにお願いした。彼女は刺繍を使って作品を作るアーティストです。彼女が智恵子の生家でインスタレーションしたら、ニュースゼロっていうテレビ番組が全国ネットで紹介した。それが放映されたことによって、またたくさんの人が来てくださるきっかけを得ることができた。福井利佐さんは切り絵の作家さんですけど、彼女に声をかけたら、ちょうど黒塚を作っているところだって、そういうタイミングだった。宝生流の能のポスター、黒塚を作っているという経緯から、ぜひ発表したいと。最初の年は智恵子の生家は清川あさみさんだった。彼女は黒塚をテーマにふるさと村で展示する機会を得ました。

黒塚

話しを黒塚に移していきたいと思います。黒塚を二本松の方はみなさんご存知だと思うのですが、鬼婆の住んでいた岩屋、これは昔の絵はがきと今も同じように残っています。実際には鬼婆が亡くなって埋めて作られた塚で、そこに木が生えています。明治の頃の写真を見てもほとんど似たような形。私は福島に来て一番訪ねたかったのは智恵子の生家と黒塚でした。黒塚を知った最初のきっかけはこの月岡芳年の「奥州安達ケ原ひとつ家の図」。この浮世絵に登場する黒塚はここにある。どんな場所なのだろうと探索しました。震災後、この黒塚をキーワードに作品を作って福島を発信していきたいという思いがあって、福島県立博物館と一緒に「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」で、黒塚をキーワードにした舞台作りをしました。1分ぐらいのトレーラーなのでお見せします。実はこの作品は二本松と浪江で撮影したものです。「黒と朱」というタイトル。恋絹という女性、鬼婆によって殺されてしまった女性と鬼婆が同一人物であるという前提で作った。撮影場所の一つは請戸小学校です。浪江の海岸沿いで撮影しました。この時私が考えたのは、もともと「黒塚」は赤子の生き胆を取って、それを食べさせることで乳母が自分の育てていたお姫様を治療する、そういうストーリーです。じゃあ、なぜ福島、二本松まで来たのか。それに対して一つのイメージとして重なったのは、原子力発電所をなぜ福島に作って東京に電気を運ぶのかという問題。このタイトル映像で使われているのは漆ですけど、漆はもともと赤い漆であっても水をつけると黒くなっていく。黒い色を使ったわけじゃなくて、漆は水分が含まれると黒くなる。赤がどんどん黒くなってくる映像を写して出しています。

文化は自然と向き合って手を加える試み

地域というものを考えた時、それぞれの地域によって文化的な違いがある。よく私が講演の中で使っている例ですけど、文化は自然と向き合って手を加える試みで、宗教、オカルトという言葉はカルティベイト、耕すになるし、アグリカルチャーになったら農業。土地の土の中にある崇拝、信仰みたいなものがあって文化ができてくる。これに対して、文明、シビライゼーションのシビルはもともと18世紀の都市化するという造語です。都市化するっていうのは自然、例えば老いという問題もそうですけど、私たちは歳を取って病になってくることはどうしても避けられない。でも文明的な世界ではそういう自然を徹底的に管理、支配、排除して、なかったかのようにしていく。夜でも昼のような授業ができるとか、夏でも冬のように涼しく生活できるように、シビライズという言葉はエネルギー、電気があって初めて成り立つ。都市を均質化していく考え方に繋がっていく。

最初の頃に行っていた芸術祭は都市を均質化するわけではないけど、海外で行っているものを早く福島に紹介してあげるという思いがあった。それが地域にある財産をいかに活かして普遍化するか、地域のものを世界に発信していくかという考え方に方向が転換したのです。で、その変化の中で、重陽の芸術祭で、私が一番いい活動だったと思うのは、黒塚を切り絵で作っていた福井利佐さんの活動。智恵子の生家でインスタレーションを行いましたが、彼女が切り絵を調べていくうちに二本松にもともとお飾りという文化があることに気が付いた。そういう祈りとして正月に捧げていたものは、みんな焼いちゃうのですね。護摩焚きと同じように。だから残っていないです。個人の頭の中に引き継がれていたものが、伝承されて若い人たちに引き継がれていたけれど、もう継承する人はいない。福井さんが実際に自分でこういうアート活動を紹介していく中で、娘さんが継承するという話しになってきた。

油井小学校って智恵子さんの通っていた小学校で福井さんがワークショップをしました。型紙をもとに子どもたちがアレンジして福助のお飾りを作った。智恵子の家の神棚がとても大きかったので、そこにはおそらくこういうお飾りがあったのではというのを想定して、福井さんが上川崎の和紙で作りました。上川崎の和紙が他の和紙と一番違うのは切れないのですよ。僕は版画を作る時に紙を束ねてピッピッと定規を当てて切るのですけど、切れないのです、上川崎の和紙は。カッターで切る時も大変だったと福井さんはおっしゃっていました。智恵子の生家で、彼女が頑張って作ったものを飾らせていただいた。

子どもたちが二本松のキーワードで作った小さい切り絵を重ねて、灯篭のように浮かべる作品も作りました。智恵子の作品を紹介しながら、切り絵という文化や上川崎の和紙にも結び付いていった。

失くしたら取り返しのつかないもの

なぜ黒塚がここにあるかを考えた時に、この地域には大きな川があって、ここから下流は大きな岩で覆われていて、川の文化がここでせき止められてしまう。そういうことがドローンで撮影したりしながら分かっていきました。地域で作られた文化は、その土地の属性に大きな影響を受けて生まれてきた。新しいスーパー、新しいファミリーレストランができると、それが文明的な意味で都市が活性化した、盛んになったと思われるかもしれないけれど、そうではない。地域にそれぞれのコミュニティがあって、そのコミュニティの中で培われていた文化はかけがえのないもの、失くしたら取り返しのつかないものだと思う。

智恵子の詩に詠われていた安達太良山、阿武隈川。『智恵子抄』の中の「あれが阿多多羅山、あの光るのが阿武隈川」という詩、光太郎によって「樹下の二人」に描かれています。『智恵子抄』の中にある「あどけない話」には「智恵子は東京に空が無いといふ、ほんとの空が見たいといふ」とあります。安達太良山の上に登って、毎日ある空が本当の空であるという考え方も文化。

今回、芸術祭に際して、福井利佐さんとの活

動で地域の中に入っていきながら、その歴史を探る面白さがあって、またファミリーストーリーでも面白いことがありました。オノ・ヨーコさんの一人一人のキャンバスやハンドペーパーを繋げて大きな空を作っていきましょうという作品ですが、この作品を今度二本松でも展示しますよというお話しを伝えてから、オノさんから新作が送られてきました。それは二本松城で重陽の乾杯をする場所に設営された、彼女が言うインストラクションという作品。その作品がオノさんから送られた時にちょうど「ファミリーヒストリー」という番組が放映された。その中で二本松城との関りがお父さんとあることが分かった。もともとオノさんのルーツが二本松にあることが分かってきた。個人のヒストリーと地域のヒストリーを探り寄せながら芸術祭を行ってきたみたいな形になりました。

このストーリーを元に次の芸術祭はもう少し地域を広げていこうということで2018年には「重陽の芸術祭」と「海神の芸術祭」を開催しました。二本松と南相馬の芸術祭を繋げて福島ビエンナーレアートバスが循環して行き来するような形で計画しました。それはあまり上手くいきませんでした。南相馬は私が住んでいるところから遠かった。それから地域の中で二本松のように連携を得て実践していく形に歯車が上手く回らなかったという問題点があった。もう一つは、アーティスト個人のレベルで地域の歴史を探ることをもう少しできたら良かったのですが、アトリエで制作して持ってくる作家が多かった。そこがたぶん二本松と一番違っていたところです。

地域に入って、その地域を探りながら活動する。そういう例でもう一人上げるとしたらワタリドリ計画さん。彼女たちは二本松に滞在して、しかも二本松の方々に自分たちが作ったその絵葉書の作品を送って、地域の良さを言葉で聞き取ったものをフラッグにして、道の駅に飾る活動をしました。こういうワタリドリさんとか、やはりアーティストの資質にも関連するなと思いました。

連動性を生み出していく面白さ

地域の中でアートに何ができるか。アートの作品としてどのようなものを生み出していけばいいか。私たちが介在して一緒になって連動性を生み出していく面白さ、人と人とを繋げる可能性があるけれども、アーティストの持っている考え方、資質がそういったものではなくて、ものづくりに準拠してしまったら、そういった連動性は生まれてこないと思った。

そこで、折元さんに繋げていきたい。私が折元さんの作品を素晴らしいと思うのは、やはり作品をものとして捉えるのではなくて、一つのパフォーマンスの中に関係性が組み立てられているというところ。もう一つ言うなれば、お母さんってかけがえのないもの。美しい女性というイメージで描かれた絵ではなくて、自分が対峙している。

折元立身
その話しは僕が後で話しますから。

渡邊
はい。分かりました。そういうことで、アートは視覚的に絵画、彫刻、デザインの領域があるけど、身体性を通じてできあがっているパフォーマンス性を芸術祭には取り込んでいかなければいけないと思いました。「重陽の芸術祭」という地域の中で組み立てられたこのアートイベントの中で、私たちは「重陽」というキーワードのもとに様々なアーティストを呼んで、地域の人々のネットワーク作り、福島を語る財産になっていくものとして組み立てられないかと考えています。

アーティストが今まであるものをもう一度再生産して作り出すことができるならば、新しい記憶を上積みすることができる。今まであるものを大事に残すことも大切ですけど、同時に今の若い人たちに引き継いでいく時にはモノとしての価値だけではなくて人と人との関係、その財産をもとにして、印象を自分の中で表現に変えていくのかという問題も出てくると思います。地域作りの中でアートを考えていく時に「重陽の芸術祭」はこの三つがいい形で生まれてきた展開だったと私は思っています。ありがとうございました。

小林
渡邊先生ありがとうございました。すごく丁寧に二本松のみなさんと芸術祭を作り上げてこられたことがよく分かりました。では、ここから折元先生にお話しをうかがっていきます。

僕は話すことがアートなの

折元立身
面白い話しをしますから。俺はアーティストだからね。君たちもここに座って。こんな前に椅子を置いてくださいと言ったのは、僕はマイクを使わないで目と目で見て話すからです。僕は理屈じゃないの。僕はね、性格自体がアートだから。僕は話すことがアートなの。ここでやることが。今日はパン人間やろうと思ったけど、パン買ってくるのを忘れた。もう僕73歳よ。痛風だし足も痛い。これもお母さんの遺伝。女の人は痛風出ないよね。でも尿酸が高いのはお母さん。血液検査するとお母さんは高いし、男三人兄弟みんな痛風。親父は全然痛風じゃない。病気までお袋からもらっちゃった。すべて体で話します。

今日は何を話そうかと思っているのだけど、僕はいろいろ日本の、最近も名古屋の若い人に呼ばれて話しをした。これからおばあちゃんの話しを名古屋でもやる。世界中でやる。だけど、はっきり言ってね、もう日本的過ぎる。もうね、こういう町おこし的なビエンナーレって日本でいっぱいやるのよ。お客さん呼んで。それで成功したのが、成功したというか人がいっぱい来たのは新潟。一回も行ったことないけど。つい最近新潟で展覧会をやりました、その時僕は面と向かって言いましたよ。もう新潟から世界をターゲットにしないとだめ。新潟から二本松から。東京じゃないよ、もう。東京とか、アジアじゃないの。地球があるでしょ、二本松、浪江っていう地球の中の一つ。ニューヨークもロンドンもその一つと思ってくれればやりやすいのよ。

じゃあなぜ外人を呼ばないの。僕はもう日本にいるとね、日本という国が嫌なのよ。あまりにも保守的で。僕はニューヨークに7年間住んだ。それはなぜかって言うと藝大7回落っこちたの。で、家が貧乏だった。4畳半に5人で住んでいる。お父さんお母さんと息子3人、僕が真ん中ですけど。すごく貧乏だったから、私立は何百万とかで行けないのよ。で、藝大7回も受けたけど、親父はもう働けっていうから、どこかデザイン会社に行けなんて言われたけど、僕はお袋のおかげで7回藝大受けて落っこちました。そしてもう日本では僕は学校入れない。それは予備校の先生が言いました。折元君はもうアーティストになっているから学校には入れないよって。学校は教えるところだから、行かなくてもいいみたいなことを言う。

藝大落っこちてニューヨークに行った。ラッキーなことにニューヨークがすごい。パリがだめになってニューヨークになった。ニューヨークで勉強してパフォーマンスもやった。学校に入らなくて良かったの。その頃は山手線に外人なんかあまり見ませんでしたよ。ところが向こうに行ってから、もうインターナショナルになりました。ニューヨークは黒も赤も黄色もみんないる。感覚的に、僕は23歳で行ったけど、そういうものを体で憶えました。それで7年目に帰ってきて、バブルで大儲け。それで世界中に行きました。その時にもう日本だけでやっていたらだめだと思った。

渡邊先生、福島大学辞めな。学校にいるうちに休学して外国行きな。今ね、ロンドンいいから。もうパリの時代じゃない。僕が行った頃のニューヨークは別だよ。もう時代は動いているね。パリもね、エコールドパリがあったり、シャ

浪江・二本松
day2 オープンディスカッション

ンソンが良かったり、歌も良かったり、絵も良かった。そういう金持ちになって美味いものを食って、いい服を着ると美術はダメになる。で、ニューヨークが世界中から移民してきて、それでみんなバーッとお金が入ってきた。いい作家が世界中からいっぱい来た。そういうことでその時僕は行った。運良く。結局ニューヨークに行った。日本で学校行けないからね。ニューヨークの学校に入れて、運というか自分でパフォーマンスをやった。だから学校なんて行っちゃだめ。僕だって学校入りたくてしょうがなかった。でもお金がない。で、ニューヨークに行った。

僕も勉強しましたよ。ちょっと見たら誰の作品かすぐ分かります。そのぐらい勉強したけど、その頭の中の知識をなくすために顔にパンをつけてみた。そしたら、それまでに習った固まった知識が全部なくなったの。パン人間を最初にやった時は外に出たくなかった。恥ずかしかった。でも、それを300回もやりました。300回やって、それを私の作品にしたのよ、自分で。横浜トリエンナーレに選ばれてパン人間やった時、弟の娘が、パン人間やめて、私恥ずかしいって言う。でっかいポスターとかが貼られる。その前を通るのが嫌だって。でも、僕はやり通しましたよ。

もう一回言います。パン人間を僕がアートにしちゃった。もう世界を相手にしないとダメ。日本は住みやすい。トイレはきれい。公共トイレは世界一きれい。ケネディ空港のトイレは汚い紙がいっぱい。やっぱり人間は優しい、食べ物はうまい、約束は守る。けど、芸術面がダメ。

今朝テレビを見たら、猫ブームで、アフリカのケニアまで猫を撮りに行っている。イタリアのどっかの島まで行っている。今、日本の若い人たちは猫が好き。俺も見ていると心休まる。でも、そこまでやっているのに、なんで世界の美術を放映しないの。いっぱいありますよ。有名なイタリアのヴェネツィアビエンナーレとか。世界の美術とか、そういうものをいっぱいヨーロッパに行ったらテレビで見られる。新聞に出ている。なぜ日本にはないのか。日曜美術館を若い人は視ていますか、俺はずっと見ているけど。

だから、二本松から世界にダイレクトに繋がればいい。もう慰め合っていてはダメ。SNS見ても世界の情報が分かる、どんどんと。さっき言ったように日本は世界一面白い国なのよ、ある意味で。裸で男同士がぶつかり合って相撲取っている。向こうから、ドイツ人から言わせると、男同士が裸で何やっているって。ヨーロッパの地図を見ると日本は一番東にある。端っこの海に落っこちそうな一番遠い国。でも、インターネットで近づいてきているから、二本松をこっちから発信すればいい。

僕は川崎市に住んでいます。藝大落っこちて、一人でニューヨークに行って帰ってきて、それからパン人間をやった。ドイツで、その頃はベルリンが中心だった。もうパリの時代じゃなくなって、ニューヨークもちょっときれいになっちゃって。ベルリンが良かった。壁が崩れるちょうどその時にいた。すごかった、その頃は。ベルリンのどこでも展覧会やってよかった。駐車場で夜中までもすごい音響でパフォーマンスやっていた。

エコールドパリの人がなぜ有名になったか。モディリアーニ、シャガール、あれはパリのいい時に行った。二本松で待つっていうのはダメなの。今は行かなくてもいい。昔みたく長く住んでいなくても、行ったり来たりすぐ行ける時代、インターネット見れば分かる。だとしたらこっちに呼べばいいじゃん。そういうコミュニケーションができれば、もっとこっちから発信できる。

僕は今、ロンドンのディレクターと一緒にやっています。僕のドキュメンタリー映画を作っている。僕の生活とか、パフォーマンスとか、僕が絵を描いているとこ。そういうふうに世界がなんだか川崎に面白いやつがいるぜってなってきた。二ヶ月前も向こうに行ってインタビューされて、パン人間をビデオカメラが撮った。すごいだろ。

すごくきつかったよ。でも、僕は一人でやってきた。日本の美術館はまだ保守的だから。僕は自分で、自分の金でやった。元田は僕のアシスタント、ずっと世界中に連れて行っている。僕は全部自分で払っている。稼いでいたからそれ全部。だから、本もこんなに出している。本も大切だから。自分のお金でやっている。それは自分でいいものをやりたいの。どこか事務所が入ると売れる本を作ろうとか口出すでしょ。金出すのは口も出すよ。どうしたらいいか。ここから世界に発信するしかない。僕はどこに行っても言っている。若い人は休学してもいいから、向こうを見る、向こうの人を呼ぶ。だからこのビエンナーレもそういうのをやらなくちゃいけない。

まだ行っていない、伝達が

もう一つ面白い話し。マーク・ウォーという僕のディレクターと奥さんのジュリア・ウォーにこの前会って、「ジュリア、僕ね、今度福島でおばあちゃんのランチってパフォーマンスやる」と言ったら、「えー、福島」って言う。「そうだよ、福島」って言ったら、「まあ、デンジャラス」って怖がる。何でと思ったら、やっぱし風評。まだ福島って名前聞いただけで怖がってる。ロシアのあれみたい感じでいる。

それはなぜか。彼女にも、みんなにもまだ行っていない、伝達が。俺は言ったよ。福島の魚食って、酒飲んで、福島の野菜でサラダ食っているって。それをまだ知らない。だから、俺、来年呼んでやろうと思っている。見せてやろうと思っている。

さっき言った猫の話しじゃないけど、ここで慰め合っていてはダメ。もうそういう時代じゃない。俺もこういういろんな所でやっている。去年は広島の尾道でパン人間やった。パン人間30人が街を歩いた。ちょうど尾道がブームで観光客がいっぱいいた。みんながスマートフォンで撮って流した。そしたらさ10万人だかって、びっくり。テレビがニュースで俺のことをやっている。パン人間が歩いている。

人間自体がアート

だからさ、この町もここの特徴のあるものがいい。美術も同じことをやっていたらダメ。俺のポリシーだよ。あのね、もうアートは生活自体がアート。だから、僕はお母さんをアートにした。それから人間同士、人間自体がアートなの。ペインティングを描く、それから彫刻、それもあるよ。物だよな。でも、これだけ複雑になった時は人間のコミュニティね、コミュニケーションがだんだんアートになって来ている。だから、人間同士で、そしてちょっと酒があるといいな。人間同士、コミュニケーションがもうアートになっている。

僕もドローイングを描く。評判いい。ドローイングで生活を日記のように描いたり、オブジェを作ったりします。それもアートだけど、もっと社会と関わる。僕は社会との関わりをわざと作るのではなくて、パン人間をやって普通の人とコミュニケーションする。それも世界中でやる。アメリカ以外は全部やった。ひどい時は友達の結婚式でやらされた。新婦とパン人間で踊ったことあるよ。僕は嫌だなと思ったけど。

地域活性化とか福祉とか、協力、そういうものを含めて美術をやるといろいろ展開していくわけ。それを僕はやっているつもり。偶然お母さんがアルツハイマーになって、僕は23年間、自分で面倒を見ました。あの作品見てください。おばあちゃんが俺の作品の前でケーキ食っている。この現状をアートにしちゃったらいいって、プロのカメラマン呼んで撮ってもらった。だから、生活自体になっている。僕の彫刻、ドローイング、段ボール、タバコの箱で作った。

智恵子がなぜいいか知っていますか

智恵子がなぜいいか知っていますか。智恵子は精神病院に入った時、お見舞の人が持ってくるケーキの箱とか、その包みで作っている。折り紙ももらったかもしれないけど。そういうものを大切にするというポリシーが好きなの。俺も段ボール使う。高いものでなくていい、そこの中でやれる、造形的なものをやればいい。あれ評判いい。

小さなおばあちゃん、1m30cmしかない、そういうおばあちゃんと生活しながら制作する。うちのおばあちゃんはスター。やれと言えば何でもやる。言わなくてもやる。「ビッグシューズ」という作品があります。おばあちゃんはいつも散歩に行く時に話していました。埼玉県の秩父に生まれてすごく貧乏だった。小学校を卒業したらすぐ子守り。埼玉県秩父の皆野町の皆野小学校に入った時、一番小さくて朝礼で一番前に並ばされたって。一時間ぐらいかけて学校に行く。金がないのでゴム靴の先が開いていた。整列した時に先生が下ばかり見る、それが嫌で嫌でしょうがなかった。もうちょっと背が高くて三番目くらいなら足を見られなかったって。

「ビッグシューズ」は段ボールだよ。材料費安いから段ボールで作った。「スモールママ、ビックシューズ」、グッドネームでしょ。この靴を買いたいっていう人もいる。いくらにしようかな。一作しかない。作ろうと思えば作れる。でも、そうやっちゃいけない。1、000万でも売らない。僕は売らないので有名。自分が欲しいと思ったら1、000万でも出すじゃない。いらなかったら1、000円も、100円も出さない。アートってそういうものなのよ。マルセル・デュシャンっていうフランス人のアーティストが展覧会の時に便器を逆さにして「噴水」って名前で出した。作らないで、出来たものを置いた。それが初めて。今のコンテンポラリーアートの走りよ。

作らないでもアート、美術館で逆さまにしただけで「噴水」と言って出した。概念を変えたわけ。描かなくても、作らなくてもいい。作家が日本にいないの、概念を変えるような。ポロックっていう人は描かないで、絵の具をバッってキャンバスにドリッピングした。描くっていうのはどういうことか、そういう概念。だから、すごいのよ、ポロック。

音楽ではジョン・ケージ。リサイタルやりますって言った。ピアノの前に座った。4分33秒っていうタイトル。4分33秒間何もしないで座ったまま、そのまま終わって帰った。何だろう、音楽って。概念を変えたの。

僕はそういうふうになりたい。そういうのを天才って言うのよ。僕はね、プロフェッショナルにならない。日本の技術はみんな上手い。でも、概念を変えていない。それは天才じゃないよ。それはプロフェッショナル。俺はジーニアス、天才にしか興味がない。それになりたいのよ。だから、顔にパンつけてなんかやっている。だんだん認められてきたけどね。いい事言うでしょ。笑うとこじゃない、泣くところだよ。僕の話しから自分で感じてくれればいいから。この二本松、浪江から、世界をターゲットにしてもらえればいいと思っている。

話すこと自体も僕のアート

福島ってさ、広島と同じ。ジュリアだってデンジャラスなんて言う。でもさ、その逆、みんなが福島でものを食うパフォーマンスを俺はやる。もっと外人も呼んであげたい。ノット・デンジャラス、口で言ったってダメ。アートは感じるもの。ブルースリーが言ったよ、弟子が教えてくれっていうのに答えて、ノー、ドント・シンク、フィール。考えるな、感じろ。アート

浪江・二本松

day2 オープンディスカッション

浪江・二本松

は感じるもの。だから、俺は目と目で話す。

俺は人生を話したいわけ、俺の経験を話したい。こういう人に会ったよって。それで君たちが分かってくれればいい。だから、僕がこうして話すこと自体も僕のアートだと思ってやっている。時間があれば、おばあちゃんのもっと面白い話しをするけど。なんて言うのかな、たいしたことじゃない。いや、たいしたことだけど、僕は73歳になって、おばあちゃんは2年前に98歳で亡くなった。寂しいよ、一人で。一軒屋に一人で住んで、一人でテレビ見て痛風になって痛い。寂しいけどアートは続けて、今はドローイングをいっぱい描いている。

いいオーガナイザーだったら来る。お金の問題じゃない。自分のいいアートライフ、いい歴史を残したいと思ってやっている。だから、いい人に会いたいのよ。

はっきり言ってね、目にオーラがある、目がしっかりしている、そういう人になかなか日本では会わない。卓球の福原愛ちゃんのお母さん、練習の時にすごく怒る。愛、目を見て話しなさいって。お母さんが目を見て話しなさいって言う。そういうのが大切。スマートフォンばっかり見てないで。いい人に会いたい、世界に行って。なかなか日本にはいない。うちのばあさんぐらいかな。

あ、一人会いたい人がいる。美智子妃殿下。東京の森美術館で「愛」っていう展覧会をやった。そこに美智子妃殿下がお忍びで来てくれた。この絵はいいですねって言ってくれたのよ。で、美智子さまが買ってくれた。だから、もう大好きよ。あの人はいい顔をしているね。本当に苦労した人。平民代表で皇室に行った。皇室に入るなんて大変だよ。俺ね、美智子さんに、これは僕ですって言ってみたい。そんなことやらせてくれないだろうけど。

俺のお袋にはオーラがあるってみんな言う。小さいけど。この人から人の思いやりを俺は習った。すごく貧乏だったけど。この人のおかげで僕の作品は温かいって言われる。それはこの人のおかげ。色彩の才能ももらったけど、でも才能だけじゃだめ。やっぱり努力をコンティニュー、継続しないといけない。なんと言われようと。ただね、一人じゃやらない。今現代美術は一人じゃやれない。ゴッホだって弟のテオがいたし、ダリにもガラっていう奥さんがいた。みんなそう、一人でやれない。作家ってさ、作品作るしか能がないのよ。俺も美術しかやらない。でも、母ちゃんがいない。

笑われる、怒られる、いじめられる。そういうこともコミュニケーション

で、もうちょっと面白い話が、時間だけどもうちょっと。ニューヨークから帰って来てパン人間をやって世界中を回りました。パンを顔につけてみたらどういうリアクションを取るか。アフリカ以外は全部、ネパールにも行った。国によって違います。一番つまらないところは日本。銀座でパンつけて歩いたらお巡りさんがすぐやってきて帰りなさいって言われた。これは僕の展覧会ですって言っても、早くやって帰りなさいって。それからね、「変なおじさんが変なことしているから触っちゃだめ」って言っているのが聞こえる。ところがロンドンなんかに行くと子どもがいっぱい寄って来て、エレファントマン、エレファントマンなんて言う。で、俺を、パンを触ろうとする。ドントタッチ。なんか面白いものにタッチしたい、アートかなにか分からないけど。国によっても違う。北欧、フィンランドの電車の中でパンをつけて座ったら、隣に座った若い男が知らん顔。静かだから、そういうものは好きなようにやりなさいって感じ。それは私には関係ないわって。アメリカは怖いよ。黒人がすぐスープ投げてきて、アイ・キル・ユーって。殺されるぞ、危ないぞって。国によってリアクションが違う。

笑われる、怒られる、いじめられる。そういうこともコミュニケーション。アートはそうなってきているわけ。人間同士。だから面白い。やるのは大変だよ。パン人間を、広島でもう一回やってくださいって言われている。同じ所で二回はやらないよって言っているけど、お金をたくさんくれればね、冗談だけど。僕は絶対にやらない。パン人間は軽くやると、ちんどん屋に見られるから。いつかこんな厚い本を作りますよ、もう300回やっているから。自分をしっかり持っていなきゃいけないと思っています。

みなさん今日はラッキーだね、俺に会えて。お母さんの話しをします。この写真、見て。これが俺。全部にカレンダーが貼ってある部屋。大工さんを呼んで、この箱を作っておばあちゃんを入れた。カレンダーって、時間、時でしょ。おばあちゃんも90歳近くだったから歳だな。アートは説明しちゃいけない。見た人が感じて答える。理論はいらない。だから、感じなくちゃいけない。さっき言ったでしょ。ブルースリーは、フィール、感じろ、シンク、ドント。考えるなと言った。

そういうものだよ。

目を肥やす

やっぱり、いろいろ世界を回ってみると、いい顔をした人は顔と目が輝いている。それを見分けるにはどうしたらいいか。「何でも鑑定団」をたまに見る。「いい仕事していますね～」って焼き物の先生いるじゃん。あの人がいいこと言っている。どっかの親父みたいなのが焼きものを持ってきて、これは2、000万って言う。ところが2、000円とか。それはどうしてか、どうしたらいいか。それにはね、いいものをチェックする。1、000回見る。国宝を1、000回見る。いい絵を1、000回見る。目を肥やすしかない。答えはない。自分の目で良いものをずっと見ていたら分かる。僕もそう思う。僕はドイツに行くと同じ美術館に必ず行く。いつも同じところを見ます。100回ぐらい見る。すると分かってくる。本物をすごい国宝の良いものを見る。それを見ると自分の目が肥えて騙されない。目を肥やすこと。

君たちに言いたい。人間もそう。もう日本にいない。世界中の人に会ってきたらいい。顔というか、いいのは分かるから。何万人も見れば、この人はいい人、この人は嘘つきってすぐ分かるようになるよ。

だから、作品も見えるようになってくるわけ。そういうふうに答えはない、本の上にはない。自分の経験、自分で見て、その肥やしでやるしかない。今日はいいこと言うね。小澤征爾とか美智子妃殿下に会ってみたい。一人でテレビばかり見ているけど、そういう本物で生きようとしている人はテレビに出ない。

テレビに出て有名になった人はテレビに出なくなったら終わり。それは自分に何もないから。落語家だっていいものを持っていればテレビに出なくたって食っていける。軽い変なイメージを付けたら、それを取り除くのはすごく大変。だから、俺はあまり出ないようにしている。ドキュメントしか出ない。自分を大切にしないと、変なイメージが付く。それはすごく怖いこと、アーティストにとって。人間にとって厳しいよ、有名になったらいろいろな話があるし、可愛いお姉ちゃんもいっぱい来るかもしれない。そんなことに興味はない。僕がやりたいのは最後まで僕のアートを続けること。ロンドンからディレクターが俺のドキュメンタリー映画作ろうって来る。人間が面白いからって。それから本も作ろうって。その次は、大きな展覧会をやってくれると思うよ。じっくり本物志向でやりたい。

そういうわけで悪いけど、もうビールタイム。ごめんね、こんな話して。こんな話からなるほどって感じるものがあってくれればそれでいい。そのために来ているので。感じてくれればいいのです。

今回、僕は二本松のおばあちゃんと浪江町のおばあちゃんと一緒にご飯を食べるために、みなさんに会うために来た。終わり、どうも。

小林

折元先生ありがとうございました。お疲れさまです。おかけください。もしご質問、ご感想とかおありでしたら。

参加者A

先生のお名前の「立身」って、立身出世からですか。

折元

だから出世した。

あ、もっと面白い話で、お母さんは「男代」、おだい、男の代わり。埼玉県秩父で生まれた。親父は九州田川。男代と折元、男代は埼玉県の秩父生まれ。苗字は大河原、いい名前だよね。大河原男代。大河原家には男が生まれました。そして、女が生まれましたが、一歳になる前に死にました。次に女が生まれました。やっぱり一歳でだめです。そして、次にまた女の子が生まれました。その時に、もう大河原家では女は育たないと思って、それで男の代わりって名付けた。そしたら98歳まで生きた。

でね、この写真見て。この顔、蓄膿症。蓄膿症で3回も手術した。昔はね、蓄膿症は口を切って膿を出す。だから、手術するとすごく腫れる。鶴見大学に行って、手術して腫れて出てくる。すると顔が全然誰か分からない。看護婦さんが男代の名札を見て、男部屋に入れた。親父が怒ったね。これは俺の女房だ。女だ。そういう面白い話。でも、可哀想ですよね。女のくせに男の代わりって。俺は名前で本当に立身出世したと思うけど、可哀想に、男の代わりって名前を一生つけて。そういうおまけの話。もっとあるけど、ドリンクタイム。

小林

今日はみなさんありがとうございました。明日、明後日、また浪江、二本松の交流をキーワードにトークを続けていきます。明日はこちら交流センターの創作スタジオにお部屋を変えて食がテーマです。二本松のお料理について大松さんから、浪江の料理について原田さんからお話しいただく予定です。

9月13日は、浪江、二本松のおばあちゃんたちと食のテーブルを囲むパフォーマンス、「おばあさんのランチ」が福島大学の渡邊先生の芸術による地域創造研究所と、二本松の重陽の芸術祭実行委員会のみなさんの主催で行われます。ライフミュージアムのトークイベントと複合した感じで行われますので、ぜひこちらもお越しください。会場は龍泉寺さんです。今日は遅い時間にご一緒くださいまして本当にありがとうございました。折元先生と渡邊先生に拍手をお願いします。ありがとうございました。

TATSUMI ORIMOTO
TATSUMI ORIMOTO
TATSUMI ORIMOTO
講師
折元立身氏

オープンディスカッション

day 3

オープンディスカッション3

浪江・二本松　ふるさとの味／ランチもアート

日　時：9月12日（木）14：00〜15：30
会　場：二本松市市民交流センター　創作スタジオ
講　師：折元立身氏
　　大松良子氏（二本松磐青会会長）
　　原田アキイ氏（二本松コスモス会会員）
講師補助：元田典利氏
司　会：小林めぐみ（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

浪江・二本松

day3　オープンディスカッション

折元立身
今日は、楽しくやりましょう。

事務局・小林めぐみ
みなさん今日はお越しくださいまして、ありがとうございます。お天気もすごくよくなって、日差しがまぶしいです。

県立博物館で去年から「ライフミュージアムネットワーク」という事業を始めました。2011年から県立博物館では、震災を伝える資料を集め、避難された方たちがどんなふうに過ごしてこられたかを未来に役立ててもらえるように記録することを始めました。同時に福島が経験したことを話し合うトークイベントもやってきました。

今年は二本松のみなさんと浪江のみなさんとの交流をお聞きして、これからの交流のことなど教えていただきながらお話しできればと思っております。今日は三番目のトークイベントですが、テーマは食べること、食です。食は、その土地の食材で、その地の作り方や加工の仕方で作って召し上がってきたという歴史があります。食は土地の特徴と直結したもので、土地のことをよく伝えてくれるものだと思います。

今日は、二本松からは大松さんにお越しいただきました。浪江からは原田さんです。お二人に来ていただき、二本松と浪江のお料理のことをお聞きいたします。そして昨日から引き続き折元立身さんにお越しいただきました。折元さんは食卓を一緒に囲んでコミュニケーションをするアートの活動をされてこられました。今日は、折元さんのやってこられたことをお聞きします。楽しい食についてのお話をみなさんとできればと思っております。それでは、折元先生、よろしくお願いいたします。

ご飯を一緒に食べるということが、非常にコミュニケーションになる。それが一番大切だと思うのです

折元
楽しんで話したいと思います。昨日より、すごくいい。顔が全部見られる。僕は目と目を合わせて話しをしたいの。僕のおふくろは2年前に98歳で亡くなった折元男代と言います。僕は、このおばあちゃんを23年間、ずっと自分の家で介護して、それをアートにしてきたけど、残念ながら98歳で2年前に亡くなった。今一人で住んでいて寂しいです。

何しろおばあちゃんが大好きなので、おばあちゃんと作品を作っています。こういうふうに目と目を合せて話せるのですごく話しやすい。マイクも使わない。目と目、気持ちと気持ち、そういう話をしたいので、よろしくお願いします。

僕は今言ったように独り者で子どももいなくて、ずっとアートをやってきた。僕の折元男代、お母さんのおかげで。僕はもう73歳です。小さい頃から絵を描くのが好きで、おふくろが全部援護してくれた。おふくろの才能を受けたこと、続けさせてくれたこと。それで今がある。

明日はお寺、龍泉寺で24人ぐらいのおばあちゃんを囲んで地元の料理を二本松と浪江町の人が作ってくれて、食べます。おばあちゃんと一緒に料理を作って食べる、それを僕は世界中でやっています。イギリスでもブラジルでもやりました。それから、ポルトガル。ポルトガルでは500人のおばあちゃんが来てくれた。国がやってくれた。去年は広島の島のおばあちゃんを呼んだ。最初は、僕は川崎に住んでいますけれども、川崎の美術館で最初の「おばあちゃんのランチ」をやりました。その時は30人、50人かな。

おばあちゃんとおばさん方と一緒にご飯を食べる。ご飯を一緒に食べるということが、非常にコミュニケーションになる。それが一番大切だと思うのです。

今は自分の子どもを殺したりするじゃない、小さい子どもを。あれは本当に痛々しい。やっぱり一緒にご飯を食べないから、はっきり言うと。ご飯を一緒に食べるだけでもなんか違う。

家庭の事情があるかもしれないけど、一緒にご飯を食べる。ご飯を一緒に食べるコミュニケーション、一緒に何かを話す、そろってやる。そういうことが一番大切な人間同士のコミュニケーションだと思っています。僕は前から人間の思いやりとか、愛情、親子愛、そういうものを基本にしているけれども、一つの方法としてみなさんとご飯を食べる。特に、僕はおばあちゃんをアートにしてきました。「アート・ママ」というのです。何人か各地で企画してくれる人がいるので、そういうおばあちゃんとご飯を食べるアートをやっていた。それを世界中インターネットで見てくれる。さっき言いましたポルトガルなんか500人です。世界遺産の教会、修道院みたいな所に500人、ウワッアと来た。

うちのおふくろ、折元男代

最初、おばあちゃんの話をするね。うちのおふくろ、折元男代。

僕は痛風です。この痛風もお母さんからです。僕は、親父とおふくろ、そして兄弟3人。僕は男3人の真ん中。全部痛風。女の人は痛風にならないよね、リュウマチです。おふくろは尿酸値が高い、親父は平気なの。だから、お母さんの血を受けちゃって兄弟3人全部痛風。僕が一番重いの。2年前、1ヶ月入院しちゃった。痛いのよ、痛風って。今は73歳ですけど、40の頃に出た。足が骨折するみたいに痛い。で、風が通っても痛いので痛風っていう。あ、痛風が痛い（笑）。

小林
風が通っちゃった（笑）。

折元
兄弟3人で僕が一番重くて、4年前デンマークに呼ばれて行って、帰ってきた時に立てなくて、成田空港で救急車に運ばれて1ヶ月入院。やっぱり、馬鹿にしちゃった。すぐ治ったから40代ぐらいは。一週間で治るのよ。だんだん腫れて、ウワッとなる。でも、一週間ぐらいで治る。それで平気だって頑張る。世界中に行ったりしていたけれど、やっぱり70歳はきついね。

お母さんのことちょっと話します。名前は「男代」、男の代わりと書いて「おだい」と読みます。なぜ、男の代わりなのか。男代ちゃんは身長1m30㎝ぐらい。ああいう顔ね。埼玉県の秩父のすごく貧しい分家百姓で生まれて、土地がなかった。それで、小学校を出てからすぐに東京で子守。まあ『おしん』ですよね。焼き肉屋で子守り。

浪江・二本松

day3 オープンディスカッション

旧姓は大河原といいます。だから、大河原男代です。大河原家は男が生まれて、女が生まれました。ところが、一歳まで育たない、どういうわけか。戦争前ですよ。次も女の人が生まれて、やっぱり育たない。昔は、たくさん子どもを生みましたから。次、僕のお母さん男代が生まれた。大河原家は女が育たない家系だと信じられていた。じゃあ男の代わりと付けてみた。そうしたら育った。98歳まで。だから育つのですよ。ちょっと育てば、98歳まで。だけれど、かわいそうにうちのおふくろ男代は、こういう名前で。嫌だよね、男って名前。

おふくろがどうしてああいう顔をしているかというと、蓄膿です。3回手術しました。こんなに腫れるのよ。包帯を巻いちゃうでしょう、そして手術室から出てくる。出てきたら看護師さんが、男部屋へ入れたのよ。それを見て、待っていた親父はすげえ怒った。「これは、俺の女房だよ」って。みんなでちょっと笑ったけど、かわいそうに顔が見えないので、名前で入れちゃったから男部屋へ。そんなかわいそうなことがありました。名前もそうだけど、手術をして顔がちょっと変わって、男の部屋に入れられたという感じ。

おばあちゃんと、目と目が合ってドッキン

僕、東京藝大を7回受けた。7回落っこちました。すごく貧乏で、四畳半に5人で住んでいた。親父、おふくろ、兄弟3人。貧乏だったので私立の美術大学に行くわけにはいかない、何百万もないから。僕は小さい時から絵を描いていました。どういうわけか、おふくろの大河原家にはそういう血があったらしい。親父は福岡の田川です。炭鉱の町。入れ墨をしていた。この血、色彩感、美術とか、そういうものはおふくろの遺伝だと思っている。僕が大学を落っこちても、おふくろはアルバイトを探してきてくれた。寿司屋の出前を探してくれて、肉屋の店員や保健所のバイトも探してくれた。うちのおふくろは、いい仕事じゃないけど、汚れる仕事でもやれということで。おふくろのおかげで7年間藝大を受けたけどやっぱりだめでした。

それで、僕はニューヨークへ行きました。その頃はアメリカだった。ニューヨーク、ロサンゼルスに1年いて、それからニューヨークに7年間いました。そこで、いろいろな勉強をして、こういうパフォーマンス、アートを知ったわけです。

今回はお寺で、24人の方とパフォーマンスをやります。昔、江戸時代は旅で最初に泊まる宿がある所で、そこの飯を食べさせる。地元のものを食べさせる。外国でも、ポルトガルでも地元のスープを作ってくれて、食べました。そういうふうにしたいので、二本松と浪江町の料理をお願いします。地元のおばあちゃんたちと一緒にご飯を食べる。今回は二本松のおばあちゃん、浪江町のおばあちゃんとご飯を食べに僕は来ました。僕はそれだけを楽しみに、それをアートにして生きています。難しいことは話しません。おばあちゃんと、目と目が合ってドッキン。そういうことでやりたい。楽しんでやって欲しいです。それで今日は、どういうものが出るのかご説明願いたいです。いいですか。

大松さんから。

浪江の人たちと一緒に

大松良子

材料、煮てしまうと明日、使えないから、こんな材料を使うということで、材料だけ準備してきました。

私たちは、「磐青の会」ということで、ここに出ていますけれども、人数が足りなくて二本松婦人会、その他の方たちにご協力いただいて参加しております。よろしくお願いします。復興祭を安達ヶ原でやりました。その第1回の復興祭の時に、台に上がって町長さんがごあいさつをなさったのです。馬場さんです。その時に「二本松で受け入れてくれるっておっしゃったので、本当に助かりました。どこに行っていいかわからない、行方不明になりそうな町民が、ここで安住の地をいただいて」って馬場さんのお声をいただいて、私たちも、ああ、そうなのだ、浪江の人たちと一緒に、しばらくここで暮らせるのだなって、その復興祭の時はとても楽しく過ごしました。

「ざくざく」

その第1回の復興祭で「ざくざくサミット」ということで。ネーミングが「ざくざく」っていうのは、耳当たりがいいから、あらゆるところで取材されるのです。その前の話になりますけれども、全日空の機内に本があります。その本の取材の方が、「ひっつめ」という言葉と、「ざくざく」という言葉の食べ物が東北地方にあるので取材したいと二本松においでになりました。全日空のポケットの冊子に大きく取り上げられて、それを見た私の親戚の者も来ました。わざわざ東京から、「ざくざく」ってどういうのか、本では分かったけれども食べにおいでになりました。ざくざくという耳当たりのいい言葉が、なんとなく広まる原因でないかと思います。

「ざくざくサミット」をやった時に旧市内の二本松とか安達、岩代、いろいろな団体が出しましたけれど、その中には、私たちが思わない材料を使った人たちのグループもありました。それはそれでその地方の材料であって、私たちがそれは違いますよとは言えないです。ざくざくの始まりは、たぶん会津の「こづゆ」から来ているのではないかという感じもします。

でも、会津の「こづゆ」とはまた違って、切り方も細いしおつゆです。ですから、ここにおいでになるそれぞれの家庭でも、隣のお家は違います。

長い間つちかった味なので、それはそれでいいと思うので

「千の花」「磐青の会」が復興祭で出しているざくざくの材料でみなさんと違うのは、ホタテ貝の貝柱がだしになる。おいしいざくざくを毎年好評で200人分振る舞っています。ところが、他所に行くと鶏肉、かまぼこ、何々って、だしを取る材料が違うのです。それを違いますとは言いません。そこで、長い間つちかった味なので、それはそれでいいと思うので。

NHKにも取材されて、できたものを持って行って、アナウンサーとみなさんに食べていただいているところを放映されました。放映されたとたんに電話が来ました。「あの、三角になっているのはなんですか」って。私、テレビを視ていなかったから分からないけれど、たぶん凍み豆腐だと思いますよと申し上げたら、「ざくざくに凍み豆腐は入りません」ガチャって、そういう電話が何本も入りました。その方はその方の自分のざくざく。

一応、ざくざくってこういうふうな材料ですよと、基本になるダイコン、ニンジン、ゴボウとか、焼き豆腐、コンニャクぐらいは同じですけど、その他に入るだしの取り方とかは、それぞれです。そういうつもりで、明日も、お召し上がりいただければ、幸いでございます。

折元

材料じゃなくて、ザクザクと入れるからざくざく、それだったらいいね。

大松

ええ。私の嫁いだ家では五節句のざくざくはそれぞれ違っていました。

小林

へえ、節句ごとに。

大松

年取りの場は普通のざくざく。お正月はお煮しめだからやらないですけど、三月節句と五月節句に。五月節句のざくざくは一番おいしいざくざく。地竹とか蕗が入る。夏のお盆のざくざくには茄子を細かく刻んで。

折元

やっぱり、ザクザクと切って。

大松

ザクザクって入れて、茄子の味が染みたざくざくを食べる。そういう五節句のざくざくを母から教わって、今もやっています。そうは言ってもやらない家庭もありますので。一概には言えないです。私の家ではそうだったということで、やっております。

ざくざくのネーミングが、耳の中に入ってくる、何と言うか、感じが面白いと言うか。

折元

うん。ザクザクとね。

大松

ええ。いろいろな高級なごちそうよりコマーシャルが効くというか、みなさんに覚えていただけるのはいいと思う。

それで、これからどうしようかというのは分からないですけど、今、幸いに浪江の人たちといろいろ交流があります。私は商工会議所の女性会にも関わっています。商工会議所の女性会で話しました。二本松に浪江の人たちがおいでになった。たぶん私たちのように商売をしている人たちが、自分の職業を捨ててここに住んでいらっしゃる。そういう人たちだと思いました。だから、心配しながらですけれど、交流会をしましょうということで、原田さんの会の「コスモス会」の人たちと一緒に商工会議所で交流会をしました。

その時においでくださった方の名刺が昨日偶然、松本茂子さんと言う会長さんの名刺が出てきました。その方は、すばらしい力を持っている方で、だから私もしまってあったと思う。「コスモス会」の新聞を見せていただいたりもしました。

聞く度に「ああっ」と思うことがいっぱいありました

それから、私、息が詰まっちゃうようですけど、原田さんの奥様のご両親がうちのアパートにおいでになって、小黒さんといいます。その小黒さんのお父さんから、二本松に着くまでの行程を書いた本を見せていただいた。

何回か転々と避難して、最後に岳温泉に来て、「こんなに温かい布団に寝て、温かいご飯を食べて、お風呂に入れる、こんなうれしいことはない。感謝、感謝」と涙を流しながら感謝した。その一晩を夢を見るような感じで、感謝しましたということを本に書かれている。その後、東京にいるお孫さんが、おじいちゃんとおばあちゃんが岳温泉にいるので会いにおいでになった。いろいろお話しして帰る時に、お土産のお店の前で、何か買って持たせてやろうと思って買おうとしたら「おじいちゃん、私、何を持っていっても、これは黴菌だからいらないって言って食べてくれない。もらってくれないからいらないよ」って言って、来た時と同じハンドバッグそのままで帰って行く後ろ姿を見ながら涙を流しましたって書いてありました。そういうふうに、私たちは震災に遭っても、そんなに辛いことはなかったけれど、浪江の人たちはその一言一句、聞く度に「ああっ」と思うことがいっぱいありました。今日と明日、浪江の人たちと交流できることを幸せに思っております。どうぞ、よろしくお願いします。

やっぱり現実はすごいなって思いました

折元
この前、下見に来た時に浪江の人が入っている団地みたいなところを見ました。みんな集まっていて、こっちにちゃんとした家も造った。でも、福島の食べ物は汚染されているからお土産はいらないって言われた。その話を聞いて、本当に涙が出るね。僕、涙もろいから。

じゃあね、僕も一つ話します。僕にはイギリス、ロンドンのディレクターがいます。その人が僕の映画を作っています、ロンドンで。本も作ってくれて僕をオーガナイズしてくれる。マーク・ウオーといいます。マーク・ウオーには、マーク・ジュリア・ウォーという奥さんがいます。2ヶ月前に、僕の映画を作るためにロンドンへ行きました。そのジュリアが言いました。僕は9月に福島の二本松へ行って、「おばあちゃんのランチ」というイベントをやるよって言ったら、何て言ったと思う。「立身、そんな、福島へ行ったら危ないじゃないの」って。僕は「ええ、あんた知らないの、僕は福島の魚を食べて、酒も飲んで、酔っ払って、福島の野菜を食べて、ラーメン食ってるよ」と言った。彼女はベジタリアンですけど、「I'm afraid、私、心配、立身、平気なの」って。何言ってんのって。それだけ伝わってないのよ。

だから、僕は来年、そのマークとジュリアを、この福島に、二本松か会津若松かへ呼んでみようと思っている。レクチャーしてもらおうと思っている。イギリスのアートかもしれないけど。見て欲しいのよ。それしかない。本当、泣けるよね。2ヶ月前でまだそんななの。それが現状ですよ。それも、今日ちょっと言いたかった。

はじめて大松さんから聞いて、やっぱり現実はすごいなって思いました。僕は、今回、二本松と浪江のおばあちゃんたちとご飯を一緒に食べる。親しくなるコミュニケーションをやりたい。もう一回言います。僕は二本松のおばあちゃん、浪江町のおばあちゃんと一緒のテーブルでご飯を食べたい、それだけです。それを世界に持って行って宣伝します。

原田アキイ
原田と申します。よろしくお願いいたします。大松さんにお話しいただきましたが、本当に、浪江はいろいろな問題があって、今はみなさんのご厚意によって二本松でお世話になっています。それぞれにみなさんが、よくドラマと言うのですけど、本当に人に言えないようなこともいっぱいありました。また、伝えていかなければならないこともいっぱいありました。

昨日の先生のお話で、アートとは人と人とのつながり、また、それを次の世代につないでいかなければならない、それもまたアートということでお話がありました。

あと、浪江の「はらこ飯」って書かれてますけど、実は浪江では、「はらこ飯」ってあんまり言わなかったですね。

小林
何と言っていたのですか。

折元
ハラコメシって、どう書くの。どういう意味、「はらこ」って。

原田
鮭のお腹の子ども。

大松
筋子。

折元
ああ、筋子か。

「さけのよご飯」

原田
浪江は、だいたい「さけのよご飯」。

「サケ」っていうのは、飲む酒、泳ぐ鮭、二種類ありまして、だいぶ前ですけれども、ある方に聞いたら、福島県はイントネーションがあんまりじょうずじゃない。だから「サケ」を持って来なさいとお父さんから言われたら、飲む酒を持っていくのか、それとも魚の鮭を持っていくのか。

私たちが小さい頃は、最初に浪江のことから説明しないと、ごめんなさい、行ったりきたりになりまして。請戸川、高瀬川。浪江の川は優しい川で、氾濫とかあまりなかったです。請戸で海水浴する時は、魚も「ようよ」と言っていました。川に泳いでいる魚も「ようよ」と教えてもらいました。それをひっくるめて魚は「ようよ」と教えてもらったものだから、「さけのよ」で「さけのよご飯」となるのです。

そして、「さけのよ」は、だいたい秋に獲れる。秋鮭ってよく言いますけど。今の時期はあまり獲れないので、今回お出しするのは北海道の「さけのよ」で申し訳ないです。

そして、その家庭、家庭で「さけのよご飯」は作り方が違いました。私も、このお話をいただいて、何人かの方に聞きました。そうすると「さけのよご飯」は、作り方が二種類ありました。炊き込みご飯にする方、混ぜご飯にする方。「さけのよ」でも皮を剥いでご飯に混ぜる方、皮ごと混ぜる方といろいろいらっしゃいました。

「さけのよご飯」のことを説明させていただくと、お米を研いで、鮭を切り身にして酒とか醤油を入れて混ぜて炊いて、最後にイクラを混ぜる方もいらっしゃいますし、また、底に頭を入れて、そのままご飯を炊いて、炊き上がったら、イクラを混ぜるという方もいらっしゃいました。

折元
イクラを入れるの。へえ、高級だ。

原田
そうです、最後に。それから「さけのよ」にシメジとか、蓮根、銀杏、酒、醤油で炊き込みする方。何もしないで、ご飯を研いだところに、中骨をぶつぶつに切って、さけのよの切り身を入れて、酒、醤油、塩、砂糖、昆布で炊く方。鮭はわりに臭みがある魚、ちょっと、ぬるぬるしますから、臭みを取らないと食べられないからと、一回湯がいて臭みを取ってからご飯に入れてスイッチを入れる方。もう一つは混ぜご飯の場合で、みんな味を付けてから混ぜる方。塩を振って焼いて、ご飯できたところに骨を取ってばらばらにして醤油ご飯みたいにして、イクラをかけて食べる方。あと、ちょっと面白い方がいて、生鮭を湯がいて、皮骨を取って、それからすし飯にしたところに、イクラと混ぜて青ジソをかけて食べるという方もいらっしゃいました。

折元
うまそうだね。

原田
いろいろな食べ方がありました（笑）。

折元
最後にイクラを混ぜて、そんで、ふかして。本当おいしそうだ。

原田
生鮭、「さけのよ」は臭いと、私は子どもの時からそう思っていたものですから。

折元
川鮭だから、川鮭は臭い。だから、臭みを取るために違うものを先に入れるんじゃないの。

原田
一回、湯通しを。

折元
地方によっては、臭み取るショウガとか、そういう強いものを入れる。

原田
ええ。でもね、ショウガを入れるという人は、誰もいなかったです。

折元
だから、一回、鮭を煮る。

原田
そう、一回塩で焼いて臭みを取る。後は酒を入れて。

折元
あ、お酒。

原田
お酒。お酒。ごめんなさい飲むお酒。

折元
そう、飲むお酒を入れればね。なんかもうイメージでうまそうだね。

原田
おいしいです。だいたい中間のお料理の仕方で明日はお出しします。よろしくお願いいたします。

折元
いやいやいや、何しろご飯に鮭、ちょっと野菜のグリーン、青紫蘇を入れて、で、イクラ入れる。最高だ。俺の多く入れてね（笑）。

原田
イクラを作るのも、麺つゆやお酒、みりんを入れる。

折元
漬けておくんだよね。そうそう、醤油の中に入れとくやつもあります。よく知っているでしょう？ね。

原田
一番簡単なのは、麺つゆだけで漬ける。塩で漬けて、保存食にもする。いっぱい獲れますから、冷凍庫に入れて何ヶ月ももたす。

食べる物によってつながって

折元
こういう話しを聞いているとね、もう食は芸術だ。

大松さんから聞いたけど、二本松と浪江も辛い。でも、食べる物によってつながって一つずつ明るさが出る。

原田
そうですね。つながり。

折元
そういうものをしゃべっている時の顔が全然違うしさあ。食は本当に芸術というか人間を豊かにするね。

大松
鮭の話が出ましたけれど、二本松のお祭りにはざくざくと必ず鮭の照り焼きとかが入るのです。ごちそうに。

折元
照り焼きが出るの。へえ。

大松
本当にごちそうの中の一品で必ず鮭は入ります。

折元
ということは、それだけ鮭が獲れた。「シャケ」って言うんだよね。

原田
「シャケ」。学校の先生に聞いた話しによると「シャケ」は方言の言葉ですって。

折元
うん、僕たちは「シャケ」よ、もう。

原田
本当は「サケ」ですって。

折元
僕たちは、「シャケ、シャケ」って。だから「サケ」ってよく聞いたら、ああ魚かと思うけど、僕たちは「シャケ」。シャケにイクラが付くというのは、やっぱり豊かだよ。

大松
家は大勢だったので、必ず一匹。頭はなますにして、いろいろ。筋子が出たら「大当たり」なんて、魚屋さんの目の前で大喜び。それで、宵祭りの日は、それをお汁にして出します。そうすると、子どもたちはそれをお祭提灯、お祭提灯って、ちょうどお祭提灯のように赤いところに、熱が入るとちょっと白みがかかる。二本松のお祭提灯とかけて子どもたちのごちそうの一つでした。

折元
もうさあ、芸術の話なんかしないでさ、渡邊さん、大学にもこういうおばあちゃん呼んでさ、こういう食の話したらさ、地元の人がやっているから、すごくリアリティーがある。大好き。おいしそうだし。うまいなと思うもん。

大松
おいしいです。

原田
おいしいですよね。

文化が始まったわけですよ

折元
僕、シャケじゃないはらこ多めね（笑）。
すごく辛い8年間だったろうけど、少しずつ良くなっている。僕ね、今年のはじめにいわき市でレクチャーをして、ホテルでテレビを視ていた。ニュースをやっていた。震災のニュース。今、一番残っているイメージは何ですかってインタビュー。津波が来て全部灰色の世界になりました。最初に、何をしたいかって言ったら、郵便局が欲しいってテントを張った。まだ、壊れてみんな灰色。その中でテントから、郵便局の赤いオートバイがパッと出てきた。その時、灰色の世界で赤い郵便局のオートバイが走っただけでみんなが「わあ」ってなった。ほら、文化が始まったわけですよ、赤い色のオートバイが走っただけで。それを聞いて、僕はアーティストだから赤いイメージが、そういうものかと。
広島の原爆でも、ちんちん電車が最初に走った。女の人が運転したの。男は全部仕事に出ていたから。ちんちん電車が走ってから、ああ、文明が走ったって。同じようにね、郵便局の赤いオートバイが走っただけで、みんなが「わあっ」て。
それと同じね、今のシャケ、僕はシャケだ。

浪江との繋がりは、私たちの生活には、昔からあった

大松
浪江の請戸川の中に簗がある。簗場のお土産に鮭一匹をちょうだいするのです。一匹ちょうだいしてどうしようという時、鮭を酒粕に漬けておくと、一週間ぐらい経った時、何回かに分けて食べられる。それもおいしいです。浪江との繋がりは、私たちの生活には、昔からあった。

折元
浪江町へ行った時にシャケをくれるの。浪江で獲れるの。

大松
鮭が上がってくるんですよ。

折元
上がって来るんだ。

大松
はい。上がってくる。その鮭を簗場で獲って、それをお土産に。見に行った人たちがお土産に持ってくる。

折元
ああ、こんなでっかいもんな。大きいもんね。うん。

大松
大きいから。海の鮭と違って、少しくたびれているから、すぐに料理しないと。粕漬けにしてしまっておくと、一週間か十日ぐらいは、分けて食べられる。それもおいしいですよ。

折元
簗場ってどういうもの。

原田
簗場っていうのは、さけのよが泳いでくるのを、竹のなんというのかしら堰を作る。

折元
それで獲れるんだ、獲っちゃうんだ。

原田
幾世橋地区の簗が最初。さけのよは前に聞いたのでは、江戸時代から獲っていたらしいです。中村藩の相馬のお殿さまの隠居所が幾世橋にあったので、一番の鮭をお殿さまに献上したのが始まりらしいです。

折元
ああ、やっぱりおいしかったんだ。

原田
ええ。そして、その簗場が小さくなってやめて、高瀬川の簗を造ったのです。その高瀬川の簗場は私たちが小さい頃にはありました。

折元
鮭がバーっと上がって来るんだ。

原田
上がって来るのを、私らは見ていました。

折元
ああ、そう。今でも来るの。

原田
今、簗場は請戸川に。今も来ますけど、食べちゃいけない状態。そして、勝手に獲っちゃいけない決まりがあります。株でしたっけ、組合があって。

折元
それはそうだよね。俺なんか、すぐ獲っちゃうもん（笑）。それで、大松さんの店で料理しちゃう。頼むって（笑）。

大松
浪江ってなんでも日本一だったのですって。杉と松の製材がすごく盛んで、山の杉と松の落ち葉が川に流れてきれいな川になる。小黒さんに「そこに来る鮭はすごい鮭だった」って言われた。日本一ぐらいの製材所があったって。川でなくて海で獲れるサケも日本一だったって、小黒さんの話しでは。それで、福島県の市場には卸さず、真っ直ぐ築地の市場に行っている。そのぐらいに素晴らしい鮭が獲れた。鮭だけじゃなくて、あらゆる魚が獲れた所だったのです。

折元
山にいっぱいいい木があった。よく言うじゃない、木の栄養が海に行く。浪江は森林がすごく良かったから川と海にもいい魚がいた。

大松
私たちは、浪江は遠い所で、あまり近く感じなかったのですけど、こういう状態になって地図を見ると、すぐ隣が浪江だって分かって、ああ、なるほどと思った。

折元
かえって、こんなことを言っちゃ悪いけど、何かのおかげで、浪江と一緒になれた。寂しいけど食べ物が結んだのかもしれないけど。

大松
教えられたことがいっぱいあります。私たちの二本松は割と静かです、みんな、人間がね。ところが、浪江の人たちは、なんて言うのか、感動力が強いっていうのか。

原田
元気がよすぎっか（笑）。

大松
強い力を持っている方が多いです。

折元
どんどん言っちゃえ。言っちゃえ（笑）。浪江のおばあちゃんはうるせえよって（笑）。

大松
一年かそこらで、地元から離れて、すぐお寿司屋さんを始めましたって。食べに行かなくちゃねって言っていたのですけど、まだ行かないでしまって申し訳ないです。そんなふうに、浪江の女性の人たちの力はたいしたものでした。

原田
私もいろいろ聞いたら、二本松と浪江のつながりは結構あったみたいです。婚姻関係も、私はもともと二本松出身ですよっていう方もいらっしゃる。私の近くにもおばあちゃんは二本松からお嫁に来たという方がいらっしゃる。
東和に役場がありましたよね。何かを聞こうと思って、私、農家の人に尋ねたのね。そしたら、そこのお母さんという人が、家のおばあちゃんは浪江からお嫁に来たって。ほら、持って行けって、野菜をいっぱいいただいた事があった。うん、震災後すぐだった。

その仲の良いことをね

折元
浪江と二本松がすごく交流できている。浪江の人は、自然が荒々しいから気性も激しいかもしれない。その仲の良いことをね、大松さん、もっと外国の人に知らせて、東京でもいいから。こんなにいい魚があって、いい料理もあるよって実際にやらないと、やっぱり風評は怖い。さっき言ったイギリス人のジュリアなんかも、「I'm afraid」、そんなことを言う。俺はすごく寂しかった。だから、来年は呼んでみようと思う。いい話を本当にありがとうね。持ってきてもらった材料、ちょっと説明してください。

大松
これは見たとおりの大根。

折元
大根きれいに切ってあるじゃん。

大松
切り方もね、このぐらい細かく切る人ともっと大きいのと。その家によって切り方も違う。

折元
うん。切り方は違うだろうね。

大松
そうです。それぞれです。

折元
これは、品がいいもんね。

大松
これは、千の花の切り方です。

参加者A
あのね、私は安達の田舎なんですよ。こういういいものは使わないですよ。大根とか人参も煮しめに使ったしっぽ。ホタテも入っていない。

大松
鶏肉の人が多いです。

参加者B
私の家は厚揚げくらい。

折元
あ、これ見て。牛蒡、こんなきれいに切っているよ。品が良すぎるよね。

参加者C
二本松のお祭りではお煮しめも作るから、端っこがでるのですよ。それを無駄にしない。

大松
このざくざくで一番助かるのは、不幸の時です。今は自宅でやる方は少ないですけど。

折元
お葬式。

大松
何年か前までは自宅でしたね、お葬式。そうすると、何人来ても、二、三日温め直しても、味が変わらないのがざくざくなんです。だから、いっぱい作っておいて、おいでになった方々にごちそうするのは、お葬式の時は一番助かる。お祭りの時も、何人お祭りを見に来てもどうぞ。夜のお祭りだから、なんでかんで、お菓子とざくざく、鮭の照り焼きと牛蒡炒りぐらいは来た人に振る舞う。

折元
すぐできるように。うん。

大松
何回温めても大丈夫なのは、ざくざくなんです。

折元
でも、大松さん、僕が行く時はイクラを取っておいて（笑）。俺、築に行って獲ってくるよ。僕なんか貧乏で、イクラなんかうれしいよね。ご飯の上に、わって乗っけてくれるイメージだけで、ううう。

大松
大松さん、あれだね、そういうふうに蓄えておく。客が来てもすぐにやれる、なんて言うんだろ。保存食じゃおかしいけど、温めればすぐ。

大松
そしてまた、鮭のあらを、ちょっと塩で漬けたのを残しておいて、それを煮立てる。鮭の骨ってすぐ柔らかくなる、煮ると。

折元
骨まで食べるの。

大松
さくさくぐらいになります、煮ると。それで、あら汁と言って、人参、大根とか牛蒡、コンニャクを入れる。それで、仕上げに粕、酒粕を入れて、あらの粕汁って最高においしい。ある時、お料理の専門の方がおいでになって、残っているのがあるけど食べてみますかって、差し上げたら、冷凍にしておいてお店で出したらって言われた。作っておいて、冷凍にしておいて、何人か希望があったらそれを粕汁に。

折元
大松さん。東京へさ、店出そう（笑）。ね、これからワン踏ん張りしてお化粧してさ、割烹料理大松って書いて。
だからね、昨日も話したけど、去年は広島の尾道に呼ばれました。尾道って、今はすごく外人も来たりなんかする。何しろ、広島県は広島市と、岡山にみんな旅行者が行っちゃうのよ。尾道は観光にはちょっと来るけど、坂が多くてお寺が多い。でも、みんな素通りで泊まる所は岡山、広島。尾道に泊まらない。だんだん造船業はだめになった。それから小津安二郎の映画。今は自転車、島にすごい橋を通して自転車で回る。テレビがいっぱい来ていた。そこで僕が、顔にパンを付けて「パン人間」をして、30人ぐらいで歩いた。そうしたら、観光客がみんなスマートフォンで撮って、それを投げたわけよ。そしたら、10万人が見て、僕はもっと有名になった。川崎の家へ帰ってテレビを見ていたら、日本テレビのニュースに俺が出ていた。そういうふうに、もう地方の時代ですよ。金沢とか京都の時代じゃない。
だからさ、大松さんがいるとか、おいしいものがあるというと、みんながリサーチしているから、そういうもので人が来る。そして広島の知事がいいんだ、若い人だけど。広島、あの辺りは瀬戸内海、島があるから、そしてアートをやろうって僕を呼んでくれた。そういう風に何かのきっかけでみんなが来ます。みんな元気だし。

福島もそれを逆手にとってでもいいからさ

さっき言ったように、原子力のそういう問題で広島って世界的になった。福島もそれを逆手にとってでもいいからさ、生きていかなくちゃいけない。
ちょっと、世界の話になるけど、世界中いろいろ呼ばれて展覧会をやります。でね、やっぱり日本は、本当にいい国なのよ、向こうから見ると。便所はきれい。もうケネディー空港のトイレなんか汚い。ロンドンの駅なんかもごみがいっぱい。日本はきれい、親切、食べ物はうまい。みんな、日本に来たがるよ。だけど、アート、文化面が弱い。それが寂しいところ。今はオリンピックのためにスポーツ、スポーツ。みんな、お金をそっちへ。

地球の中に二本松と浪江がある

今日、朝食で川延君たちと話したけど。ここにNHKの朝ドラが来たとするよ。ここには智恵子さんがいるじゃない。今日、寄ってきたよ。大好き、智恵子さんの切り絵、最高。あれは、世界に通じる。僕は大好きなのよ、本当にいいものなのよ。だから、智恵子ちゃんと大松ちゃんと朝ドラでさ、「智恵子ちゃんと大松っつぁん」みたいなさ（笑）。そういうものは絶対来る。地方の時代だから。
二本松、浪江から世界にアタックする。もう、東京じゃない。アジアじゃないの。地球の中に二本松と浪江がある。パリ、ロンドンとかね、そこの一つというぐらいの頭でないとやっていけないの。特に若い人は。もう、みんなインターネットでやれるから。だから、外人を料理に呼んで、外人が泊まれるようにしていけば全然違う。二本松の駅、ちょっときれいになったけど、なんかさ誰もいない。だけど、かえってそれがいい。It's coolかっこいいんだよ今は。
そしてさ、シャケが来ればさ（笑）。それで、タラコ。それから、ここには智恵子さんがいる。智恵子の切り絵、あれはね本当にきれい、日本刀を磨いたよう。光太郎も「蝉」とか「鯰」とかすごくいいよ、そういうものは通用する。それでいきましょうよ。それとざくざくとかさ（笑）。

涙、涙もあるけど、一緒にご飯を食べる。それだけでいいと思っています

じゃあ、明日の話。みなさんをバスで迎えに行ってもらって、僕はお寺で待っています。僕はちゃんとネクタイを締めてエスコート（笑）。大切なお客さんをエスコートしに行きます。それを、全部ドキュメントを撮ってもらいます。もうちょっとお母さんの話しをさせてもらいます。そして、そういう話をした後にテーブルに来て、また大松さんと原田さんに説明してもらいながら、料理を出してもらいます。そして、ウエイターとか、ウエイトレスがちゃんとして来ますから。僕も、ネクタイしてきて、エスコートをします。そして、今回はこういう箸を作ってくれたのよ、二本松の箸を作る会社とデザイナーが。

小林
いわきの、磐城高箸っていういわきの杉でお箸をつくっていらっしゃる会社です。デザインを、二本松の方がしてくださった。

折元
この箸を使ってご飯を食べてもらうように作ってくれました。明日、持ってきてくれるらしいです。

参加者
あら、かわいい。かわいい。

折元
メニューも。それから、いいですか。パン人間をやって見せます。うれしい、拍手してくれるなんて。どこでやってもね、若いやつは拍手なんかしてくんないのよ。ああ、やるのって感じで。さっきも言ったでしょ、今回は二本松のおばさまたち、浪江町のおばさまたちと一緒にご飯食べに来た。さっき大松さんが言ったように、いろいろなことがあった。涙、涙もあるけど、一緒にご飯を食べる。それだけでいいと思っています。それが僕のアートだから。ええと、すみません、ビールは出ないからね（笑）。
最後におばあちゃんのランチをやった時の動画を見ましょうかね、これ、すごいですから。

パフォーマンスビデオ「おばあさんのランチ」上映

折元
いいでしょう。世界でも呼んでくれる。男代ちゃんが僕を生んでくれてすごく感謝しています。こういう才能をくれて。こういう才能をくれたのと僕がコンティニュー、続けたこと、才能だけじゃなくてね、続けたことをすごく僕はうれしく思っています。本当に、今日のミーティング、ベストだった。良かったよ。ありがとう。本当に。本当。本当。食べ物の話、すごくよかった。難しい話よりもさ、一緒にご飯食べればさ、世界は平和なのよ。でも、イクラはお願い（笑）。本当に今日は、最高でした。どうも、ありがとう。Thank you very much。ありがとさん。ありがとさん。ありがと、ありがと、ありがとさん。Thank you very much。Everybody thank you。明日会おう、see you

tomorrow ね。大松さん、原田さん、どうもありがとうございました。

大松
ありがとうございました。

原田
ありがとうございました。はい。

小林
もう、言葉が出てこないですけれども、みなさん今日はありがとうございました。折元先生、大松さん、原田さん、どうもありがとうございました。

折元
本当に thank you、ありがとう。よかった。good job、good job、どうも、ありがとうございました。よろしく。

day 4

スタディツアー
オープンディスカッション4
共催事業 パフォーマンス

スタディツアー　二本松を眺める

日　　時：9月13日（金）10：00～15：00
　　智恵子の生家→智恵子の実家の菩提寺・満福寺→浪江町復興公営住宅石倉団地→
　　龍泉寺（オープンディスカッション・パフォーマンス参加）

随行講師：原田雄一氏（浪江町商工会顧問）
現地講師：武田良典氏（龍泉寺住職）

オープンディスカッション4　長寿もアート～地域で暮らしを楽しむために～

日　　時：9月13日（金）11：30～13：00
会　　場：龍泉寺
講　　師：折元立身氏
　　安斎文彦氏（にほんまつ未来創造ネットワーク代表）
　　原田雄一氏
講師補助：元田典利氏

共催事業 パフォーマンス　おばあさんのランチ・パン人間

日　　時：9月13日（金）13：30～14：30
会　　場：龍泉寺
出　　演：折元立身氏
　　元田典利氏
主　　催：福島大学芸術による地域創造研究所
　　重陽の芸術祭実行委員会
共　　催：ライフミュージアムネットワーク実行委員会

［おばあさんのランチ］

二本松の料理	ざくざく
浪江の料理	さけのよご飯（はらこ飯）
椀	会津漆器
湯飲み茶碗	大堀相馬焼（提供：浪江町 原田アキイ）
箸	いわきの杉箸（製作：株式会社岩城高箸、デザイン：馬場立治、提供：馬場立治）
箸置	龍泉寺の檀家のみなさんが製作した折紙の鳥＋二本松の菊
花	二本松の菊
	浪江のトルコキキョウ（製造：浪江町 NPO 法人 Jin 川村博、提供：馬場立治）
花器	大堀相馬焼（提供：浪江町 原田アキイ）

浪江・二本松

day4　オープンディスカッション
パフォーマンス

98歳で亡くなったお母さんの僕の作品

折元立身

はい、みんな前を向いて。合掌、一礼、お願いいたします。ここが今日の会場です。厳かなところでやります。

私のお母さんは2年前に亡くなった。98歳で亡くなったお母さんの僕の作品をちょっと説明させていただきます。こちらを見てください。これが僕のお母さん。98歳で2年前に老衰で亡くなった。

ちょっと見て。どうぞこっちへ寄って、寄って。説明するから。これは「パン人間」。これからやる。パンを顔につけているこれは僕。これは僕のお母さん。これからやってみせる。これが僕のお母さん。亡くなる前に撮った。これを東京の美術館で飾りました。そうしたら、美智子妃殿下がお忍びで展覧会に来てくれました。そして「いい絵。いいですね、これ」って。あの人は本当の気持ちが分かる人で「本当にいい絵ですね」と、そう美智子妃殿下が言ってくれた。美智子妃殿下がね、いっぱいいろいろな作品がある中で、これを見て、本物を感じたのでしょう。

おばあちゃんはアルツハイマーになったし、うつ病になって、僕は23年間、自分の家で面倒を見た。それをアートにしています。だから本物を、美智子妃殿下はね、分かってくれたと思うけど、ものすごくうれしくて、美智子妃殿下に会いたいです。このポスターをプレゼントしたいですけど、言ってもだめって言うでしょうね。そういうわけで、これは僕にとって代表作です。

参加者A

お母さんは何歳やったの。

折元

98。この写真は98じゃないです。もうちょっと若い。僕は独り者で、嫁さんも子どももいませんけど、おやじが亡くなってから23年間、二人で生活しました。

僕のおふくろは、僕のためなら何でもやってくれた。この写真、ここに僕が住んでいた、おばあさんと、こんなにすごくものがいっぱいある中で住んでいました。おばあさんが下でアイスクリームを食っている。もっとこっちに寄ってごらん。はい、どうぞ。ここで僕は作品を作っていたの。おばあちゃんは何でもやってくれたよ、僕のために。

この写真を見て。もっとこっちに来てください。ほら、大きいパンとおばあちゃん。ああいうこともね、うちのおばあちゃんは、やってくれる。

参加者B

寝たきりにはならなかったですか。

折元

最後の一年間はもう。

参加者C

いい表情だ。

折元

案外好かれて、看護師さんが、「かわいい、かわいい」って言って、たまにショートステイに預けると、「折元男代（おだい）ちゃんならいいよ」って。だから僕はすごく助かりました。ほら、おばあさんでさ、意地の悪い怖いおばあさんもいるじゃん。そういう人はさ、施設に行くと怒鳴っていて怖い。

うちのおばあちゃんは看護師さんに「ありがとう」と言う。だから、「折元男代ちゃんならいつでもいいですよ」って。僕も外国に行く時、五日間とか一週間、預けるけど、でもちゃんと黙って、静かにしている。

顔もそっくりでしょ。しみまで一緒。ぽつぽつが。性格をこのおばあちゃんからもらった。僕のアートはもらったのですよ。おやじは、競輪、競馬、博打打ち。おじいちゃんも入れ墨をやっていた。だから全然違って、僕は兄弟三人の真ん中ですけど、お母さんに似たの。上と下、兄貴と弟は全然美術とは関係なしに、いい車に乗って、なんか全然違う。僕はお母さんにそっくり。お母さんは僕が面倒を見るって分かっていた。僕は独り者だったし。

僕はニューヨークに7年間住んでいた。帰ってきたらお父さんが亡くなって、お母さんがちょっとアルツハイマーになって、うつ病になって、僕が面倒を見るようになった。

この写真の左の方、おばあちゃんはベッドで寝ていますが、下りてきて、アイスクリームを食べて、こんなところに座っている。これいいだろうって言って、撮った。最高でしょう。

参加者D

これは指笛ですか。

二人で生活しているのがアート

折元

違う、違う。歯がないから、口のなかに突っ込んで、洗っている（笑）。なにしろ、二人で生活しているのがアートだと思っていて、それを美智子妃殿下も分かってくれる。今、外国で「アート・ママ」っていって、だいぶ評判になっている。僕が世界的になれたのは、おばあちゃんのおかげだし、おばあちゃんの才能をもらった。僕は水彩画も描きます。色がきれいでいいねって言われる。そういう感覚もおばあちゃんからもらった。才能だけじゃない。僕は73歳です。頑張って継続して努力したから今がある。やっぱりおばあちゃんの才能と、僕の努力。それで世界的になったと思っている。

僕は最初ニューヨークの学校に言った。なぜニューヨークかというと東京の藝大に7回落っこちました。貧乏していて四畳半に5人住んでいた。私立に入るのにも何百万円も払うお金がなくて、結局、藝大を7回落っこちて、行く所がないからニューヨークに行った。帰って来たら、東京の画廊が、折元さん、パフォーマンスというアートをニューヨークで見てきたろうから、やってくれって。じゃあ何かやろうかって「パン人間」を画廊で始めた。これね、僕の友達とお客さんが3人しか来なかった。取りあえず自分の好きなことをやろうと、やったわけですよ。3人しか来なかったので、じゃあ外へ出ようと、この写真を見てください。これは、ベルギー。外国に行ってやってみようというので、外国でやりました。

最初、公共の場所、道路とかレストラン、駅とか病院、そういう所でやるようになって、帰ってきたらおばあちゃんがうつ病っぽくなってきちゃって、僕が面倒を見なくちゃいけなくなった。おやじも亡くなった。

この写真を見てください。パン人間とおばあちゃんのはじめての作品。「アート・ママとブレッド」。これが最初の一つです。おばあちゃんは、何でも出てくれる僕のためなら。本当にかわいい人だった。それだけは自慢、うれしい。助かった。そういうわけで、こういうポスターも作りながら、世界に発信しています。

こちらへどうぞ。もうおなかがすいた（笑）。もうちょっと。おばあちゃん見てください。この写真を見てごらん、ほら。うちのおばあちゃんは小さいのよ。1m30㎝。ちっちゃかったの。まだ杖を突いて歩ける頃、僕と毎日公園へ行ったりした。公園でおばあちゃんがベンチに座ると、あまりにもちっちゃい。

おばあちゃんは、埼玉県秩父で生まれた。分家の百姓で、貧乏をして、土地がない。おしんみたいなことやった。秩父で小学校の時、すごく貧乏で、背が小さいから朝礼で一番前になる。山道を歩いて学校に行くけど、お金がないので、昔はゴムの靴でしょ、それの前がぱかぱか開いちゃっていた。恥ずかしいけど、小さいから朝礼で一番前になる。先生がおふくろの足を見てすごく恥ずかしかったと。もっと背が高くて、3番か4番目になれば、足元を見られないで済んだ。もっと静かに立っていられた。もう嫌でしょうがなかったとベンチで聞いた。だから僕が段ボールでビッグシューズ、大きな靴を作って背を高くしてあげたの。だから「スモール・ママ＋ビッグ・シューズ」。大きい靴、小さなおばあちゃんって言うの。これが評判になって、この靴を買いたいという人がいた。でも売らない。もっと高くなってから売る（笑）。

こういうポスターを作って襖に貼っておくとおばあちゃんは喜ぶ。死んでも何か残ると思ったんじゃない。必ず喜んでいました。おばあちゃん、いいでしょうこれって言うと、喜んでね、ベッドに寝ながら「ああ」って。だから、家にはいっぱいこういうポスターが貼ってあったんですよ。僕も親孝行したんだよ。そういうことで、100歳までなんとかと思ったんだけど98歳で老衰で亡くなりました。

僕は、このおばあちゃんに生まれて幸せだったし、23年も看て本当によかったと思っています。その温かい気持ち、本当に人に優しいし思いやりがある。僕もそういうのを受け継いでいる。おばあちゃんからこの性格を受けたのは非常にうれしいと思っています。今の若い人には冷たい人が多いけど、おばあちゃんはそういう人じゃなかった。最期はベッドでおむつを替えたり食べさせたり大変だったけど、死ぬ時は病院だったけど、なんとか23年も家で看られたので喜んでいると思いますよ。

おばあちゃんは、僕にとってはみんなおんなじに見える。世界中で「おばあちゃんのランチ」で、みんなでごはんを食べることを大切にしているんです。じゃあ、次に行きましょう。どうぞこちらへ来てください。

この写真は89歳の時。僕の家の小さな庭でショートステイから帰ってきた時に、ちょっと写真を撮った。車椅子のおばあちゃん。最期の何年か毎日僕が車椅子を押して、買い物にどこでも連れて行きました。デパートでも行っちゃう。やっぱり、家にいちゃあまずいからさ。寿司が好きだったから回転寿司によく連れて行った。今は、車椅子の人が多いから、車椅子をぱっと入り口に置いて、回転寿司に座らせたらマグロをよく食べた。まるぽちゃだよ、この頃は。これからだんだん痩せてきた。

一番好きなおいしいものは何かというと、秩父で生まれて食べ物がなかったから、おいなりさん、鰻。私のおじいちゃん、おふくろのお父さんは、土地がないから百姓をやれないので猪を捕ったり、鰻を捕ったり、そういう生活をしていた。それで、鰻が好きなので誕生日に鰻を食べさせる。一万円札を持って川崎駅のそばの鰻屋に車椅子で連れて行く。この写真は鰻屋で記念写真を撮ったもの、92歳の時。

おふくろはぼろぼろぼろぼろこぼすのよ。毎年一万円札を持って行くと店の人が「あ、今年も来ましたね」って。で、誕生日、お願いします。またぼろぼろ落とすわけ。だけど、店の人も「おばあちゃんはかわいいから、いいから」って言って、床にぼろぼろ落としても「後で掃除しますから」って。僕は残した余りを食べながら、おいしい河豚酒を飲みながら、一万円札を全部使って帰ってくる。それが一年間の贅沢でした。食べる人でした。僕はその場所でドローイングを描いて、それも記念に全部取ってあります。

どこかに連れて行った。寝てばっかりいるとまずいので、どこかになにしろ連れて行った。15分くらい、車椅子で、天気のいい日に行く。でも喜んでくれた。

僕は、生活自体が、おばあちゃんと生活すること自体がアートだと思っていますから、おばあちゃんと生活して一緒に作ったものがアート。前から近所のおばあちゃんたちをみんな呼んで、一緒にごはんを食べようとやっていた。それを僕は今世界中でやるようになったわけです。今までにイギリス、ブラジル、デンマーク、川崎とか、それから福島で、それをぜひみなさんでやりたいと思っています。

浪江・二本松

day4 オープンディスカッション
パフォーマンス

浪江・二本松

day4 オープンディスカッション
パフォーマンス

男の代わり

僕のお母さんは「おだい」といいます。男の代わり。すごい名前です。埼玉県の秩父の皆野町、分家で、畑もない貧乏、子沢山、昔の苗字は大河原。いい名前です。僕はこっちのほうが好き。大河原家は、戦前、男の子が生まれた。女の子も生まれた。けれど一歳にならないうちに、どうやら死んじゃう。次、女の子が生まれました。また死んじゃいました。で、次におふくろが生まれた。昔の人は、大河原家では女は育たない。そう考えたみたい。それじゃあと、男の代わりと名付けた。「おとこのかわり」じゃまずいから、「男代」と呼ばせた。そうしたら98歳まで生きたわけですよ。

それでね、前にも話したけど、かわいそうですよ。ああいう顔を見るとね、おふくろって、鼻がこうなっているでしょう。蓄膿症だったのよ。3回も蓄膿症の手術をして、そうしたら、顔がこんなに腫れたわけよ。手術した後に、担架に乗ってこんなに腫れて包帯を巻いて出てくる。名前が「折元男代」だから、看護師さんは間違えて、男の部屋に入れたの。それを見てね、おやじがね「おい、これは俺の女房だ。女だぞ」って言ったのを覚えていますよ。そういう人生がある。

折元家のおやじは、普通の名前で「ミツオ」です。九州の炭鉱で生まれて、たいした博打打ちで、おじいちゃんは総入れ墨していた。写真だけでお見合いさせられた。写真でお見合いをさせられて、身一つで来ればいいなんて言われて行ったけど、行ってみたら何もなかった。おやじは博打打ちだから、競輪・競馬が好き、酒も好き、女も好きで給料を持ってきても使っちゃう。おふくろは、3回逃げたって。昔は仲人のところに逃げる。仲人に、もう嫌だって。ところがお腹に俺の兄貴ができたから我慢しろと言われて、我慢した。その後、女、僕のお姉さんが生まれたけど、やっぱり一歳で死んじゃった。その後に僕が生まれたんです。運がいいのか、悪いのか。

参加者E
95歳まで、昔の時代で長生きしたっていうのはちょっと珍しいですね。

折元
うん。でも長く生きると、長く生きるよね。うちのおばあさんは98歳。なんとか100歳までと思ったけど、折元男代は二年前に亡くなったけど、まあ幸せ。僕の作品に全部載ってくれた。

最初、川崎市の美術館で、折元さん、おばあちゃんと何かやりましょうと言われて、僕は町内会で30人のおばあさんを招待して、美術館で「おばあちゃんのランチ」というのをやりました。みなさんとごはんを食べることは大切でしょう。目と目が合って、一緒にご飯を食べる。何もしゃべらなくていいから、たくあん、味噌汁と納豆があって食べる。それだけでも気持ちがいいわけですよ。しゃべらなくてもいい。そういうものが大切だと思っている。それで、川崎で始めました。何年前かはポルトガルに招待されて教会で500人。その映像がありますので、ちょっと見てください。

パフォーマンスビデオ「おばあさんのランチ」上映

折元
12時になりました。予定より早いですけど、テーブルに座ってもらっていいですね。

浪江の方。こちらが二本松の方。右が二本松の方。名札を前に置いてください。前の人に分かるように置いてください。今日は、二本松のおばあちゃんと、浪江町のおばあちゃんの交流会ですから。一番奥が空いているじゃん。俺と和尚さんが座る。

和尚さんのお話があり、料理を作った人のお話があり、そして料理を食べながら、そしてその後、パン人間もやってみせます。そしてみんなで記念にポラロイドも撮りましょう。じゃあ、和尚さんがこのお寺のお話をしますので、よろしくお願いします。

武田良典
みなさんこんにちは。大丈夫ですか、みなさん疲れていないですか。私はこの龍泉寺の43代の住職武田良典と申します。よろしくお願いします。今日はみなさんのおかげで、本当に天気ももってくれて、いい日になったと思います。このお寺の紹介、ご存じかもしれませんけど、ちょっとお話しをさせていただきます。

1460年に曹洞宗の寺として開山されまして、今年が559年で、来年560年になります。曹洞宗の歴史としては559年ですけれども、真言宗からすると800年。そして千年以上、二本松の方々と一緒に、この寺は存在しておりました。

曹洞宗559年前のお殿様、畠山さんの6代目の方が建ててくれたのですけれども、そのときからずっと祈願寺として、どういった祈願をしたかというと、戦勝祈願であり、一番はやはりみなさんの幸せを祈願していたと思うのです。そういうお寺だった。ですので、千年以上前から、この二本松の方々の幸せを祈願しているお寺だと、私は信じております。

今日は折元先生、世界的に有名な先生のお食事会をご一緒できる、そしてまた、浪江、二本松のみなさまとこうやってお食事ができることを、本当にうれしく思っております。今日はありがとうございます。

パフォーマンス「おばあさんのランチ」

原田アキイ
浪江町のはらこ飯、みなさんにはその言葉が分かりやすいと思うのですけれど、浪江では「はらこ飯」とはあまり言わないで、「さけのよご飯」、地元ではそういう言葉がなじんでいるお料理です。

そして、家庭によってお料理の仕方がありまして、作り方としては、さけのよを皮ごと入れるところ、皮なしで入れるところ、混ぜご飯にするところ、炊き込みご飯にするところ、お寿司でやるんですというところもありまして、今日は、だいたい平均的なもので食事していただきたいと思ってお作りしました。

最初にイクラを醤油漬けにしておいて、さけのよを醤油とお酒で漬けて、それを炊き込みご飯にしてお出しします。よろしくお願いいたします。

大松佳子
お疲れさまでございます。ありがとうございます。今日はこんな素晴らしい会場で、みなさんと一緒にお食事ができることを、とてもうれしく思っています。私は二本松で、味噌、醤油を造っている家に生まれました。「ざくざく」は、二本松全体の郷土料理ですけれど、地域と時期によって、各家庭によって、まったく違います。基本的に同じだと言えるのは、野菜が四角く切ってあることぐらいです。醤油味も同じかと思ったら、一部で味噌味という人も発見されて、これぞざくざくという定番があるわけではないのです。昔から、女の人が冠婚葬祭の時に、みんなで寄って作る時に、野菜の端まで無駄なく使える。「四角く切って」と言えば、若いお嫁さんも、お年を召したベテランのお母様も、みんな同じく切れるという便利なことがありまして、四角くなっているという説もあります。

会津の「こづゆ」との違いもいろいろ言われるのですけれど、こづゆは武士階級の食べ物で、ざくざくは庶民階級の食べ物なんていう説もあります。それから、宝がざくざくということとかけて、ざくざくという言葉があるんじゃないかということも。

今日は私の、大松の家のレシピで作っています。それから、普通は焼き豆腐を入れるけど、焼き豆腐を作っている時間がなかったので、厚揚げで今日は代用しています。野菜が四角く切ってたくさん入っている、そして醤油味というざくざくを召し上がっていただければと思います。鶏肉が多いですけど、うちはなぜかホタテの貝柱を入れるのですが、ホタテの貝柱は高くていっぱい入れられないので、少しだけ入っています。お味見、よろしくお願いします。どうもありがとうございました。

折元
ホタテが入っている。イクラ、イクラ。もう、涎が垂れちゃう。

このために、いろいろな人が手伝ってくれました。お花を持ってきてくれたり、箸を作ってくれたり、今回は福島県立博物館のスタッフと福島大学の生徒と先生も来て、やってくれています。みんなで作った。

ジャジャジャジャーン。スタッフの人が、こういう箸を作ってくれました。みなさんに今日、使ってもらって、持って帰っていいです。僕の顔が出ていて、ちょっと嫌だろうけど、それは勘弁ね（笑）。こういうのを作ってくれた馬場ちゃんです。ちょっと嫌だよ、ハンサムだから（笑）。もっと不細工な奴が来るかと思ったら、ハンサムな馬場ちゃんが。どういう所で箸を作ってくれたのか、説明してください。

馬場立治
はい。いわき市にある磐城高箸さんという割り箸屋さんで作ってもらいました。浪江町と二本松といわきの想いも入っている箸です。いわきの国産の割り箸ですので、これで食べてください。よろしくお願いいたします。

飾ってある花は浪江町の川村博さん、Jinさんという、浪江の新しくできた小学校の前で育てたお花、トルコキキョウです。それを浪江町から持ってきました。浪江町のお花トルコキキョウを楽しみながらお食事していただけるといいと思います。どうもありがとうございました。

折元
ここのお寺のお母さんですか箸置きを作ってくれたのは。

小林
檀家さんたちでしたっけ、ご住職さま。

武田
はい。そうです。これの説明は母親が一番詳しいですけど。

小林
ここで折られたのですよね。

折元
折った方がいる。ほら、いるって。

参加者F
いや割り箸の袋。袋があるでしょ、箸が入っている袋を半分に折って作りました。

折元
何でも使っちゃうね。

参加者F
そうです。無駄なく。もったいないです。

折元
もったいない。もったいないということです。それでこんなにきれいな鶴が。これもちゃんと箸置きにします。まだだよ、ごはんは。イクラもホタテも出るから、もうちょっと待って。食べちゃったらみんな、紹介できないから。今回は、福島大学の生徒と先生、それから福島県立博物館の学芸員の人、それからいろいろ。

浪江・二本松

day4 オープンディスカッション
パフォーマンス

馬場さんが来た。先にお茶を飲もう。お茶の説明をして。

大松
九月九日が重陽の節句、菊の節句です。菊の花と葉っぱに付いた朝露を飲むと長寿になる。菊の節句ですけど、今日は菊の代わりに、カモミールティーにしました。カモミールも菊の花の一種、みなさんにおいしくハーブティーを飲んでいただこうと思ってご用意しましたので食事の前に喉を潤してください。

小林
湯飲みは、先ほどお料理を説明してくださいました原田さんが、大堀相馬焼の湯飲みを浪江町からお持ちくださいました。みなさまのテーブルと入り口の花生け、花器も大堀相馬焼をお持ちくださいました。

折元
福島大学の渡邊先生がいるから、話してもらいます。

渡邊晃一
今回、福島大学の芸術による地域創造研究所主催というかたちでやらせていただきました。手伝ってくれているスタッフの学生を紹介します。

菅野愛実
はい。2年生の菅野愛実です。よろしくお願いします。

太田怜子
同じく2年生の太田怜子です。よろしくお願いします。郡山市出身です。

佐藤友美
同じく2年生の佐藤友美と申します。出身は相馬市です。よろしくお願いします。

佐久間このみ
私だけ大学4年生です。名前は佐久間このみといいます。出身は、近くの三春町出身で、三春町から通っています。よろしくお願いします。

折元
もう食べたいよ（笑）。もう、朝抜き。もうだめ。最初は何かな。
いいかな、食べて。食べよう。

パフォーマンス「パン人間」

折元
I am breadman, not human being.
二本松のおばあちゃんと、浪江のおばあちゃんが、これからも幸せに長生きすることを祈って、パン人間が世界中から想っています。どうも今日はありがとう。
Thank you.
お布施は僕じゃなくて（笑）、お坊さんにあげてください。本当に今日は、僕のパン人間を見てくれて、ありがとう。
Thank you very much, everybody.
それから、おいしいごはんをありがとうね。みなさんね。

もうちょっとお願いします。パン人間と記念写真を撮ります。じゃあ、ポラロイドをお願いします。

参加者G
おしゃれして。

折元
はい、いきますよ。はい、チーズ。
ちょっと首が痛い（笑）。パンって、案外重いのよ。重いの。だから30分やっていると首が痛くなる。締めつけられているから血の循環が悪いのよ。ちょうど時間となりました。ここでパン人間は終わり。食事もおいしかった。浪江と二本松のみなさん、もう一回並んでください。並ぼう、並ぼう。本当にみなさん、ありがとうございました。本当によかった。
Thank you very much, everybody. Thank you.
ありがとさん、ありがとさん、ありがと、ありがとさん。
ありがとさん、ありがとさん、ありがと、ありがとさん、ありがと、ありがとさん。
ありがとさん、ありがとさん、ありがと、ありがとさん。

小林
安斎さんと原田さんから、お願いします。

桜で遊んでいる私と、桜を一生懸命大切にしている原田さん

安斎文彦
二本松の安斎文彦といいます。みなさんから見ると、太って見えるかもしれないですけど、ものすごく太っています（笑）。はい。今日の朝現在で120kg、体重だけが自慢の安斎です。よろしくお願いします。
未来創造ネットワークというチームで活動しています。大松さんもそのメンバーで、一番は桜について活動しています。桜の写真展をやったり、桜ツアーで、みなさんに呼びかけて、二本松の桜を紹介したり、桜で遊んでいると言ってもいいくらい。
ある日、岳温泉の桜がそろそろ咲くかなと思って岳温泉に行った。そうしたら梯子をかけて、ごそごそ、やっている人がいた。朝5時過ぎですよ、何をしているのかなと思って見ていたら、隣にいる原田さんが、義理の兄弟の小黒さんと一緒に兄弟同士で桜の手当をしていました。「二本松には世話になったから、俺ら桜の手当するんだ」なんて言ってね、そんなところに遭遇したことがあります。桜で遊んでいる私と、桜を一生懸命大切にしている原田さん。私のお話しはそんなところにして、原田さんお願いします。

感謝と恩返し

原田雄一
恐縮です。原田と申します。今日一日、朝から本当にご苦労さまでございました。バスの中で安斎さんとのことは、いろいろお話しさせていただきました。私はずっと浪江で生まれて育ちました。震災で二本松にお世話になって8年半になるわけですけれども、「長寿とアート」というのを、最後にどうやって考えたらいいかなと思って、ずっと折元さんのお話しを聞いていました。
私どもは被災した時に、二本松の方もみなさんもそうですけど、全国の方からご支援いただき、今までなんとかこられたなと自分では思っています。それはどういうことなのかというと、自分ではやはり、感謝と恩返しじゃないかと思います。これは被災した人間でないと分からないかもしれませんけど、そういう気持ちで生きていかざるを得なくなったのです。そういう気持ちを持ちながら、ずっとこれから生きていくわけですけれど、その二つを自分の気持ちの中に持ちながら、これから私どもは生きていかなければならない。そういう気持ちを持って、私は二本松のみなさんとお付き合いしていきたいと、今でも思っております。
先ほどのお話しの中で、折元先生が、I am breadman、not human being と言いました。英語ですと、私は分からなかったけれども、日本語でおっしゃった時に、「俺はパン人間だ」と。「人間さまではないのだ」とお話しになった。そこに私は、何かヒントがあった。やっぱり人間様というのは人間が生まれてきてから作って、体にべたべた貼りつけてきた、いろいろなものですよね。それを取り除くのがパン人間なのかなと思った。

折元
いいことを言いますね。

驚きと、かけがえのないもの

原田
ああ、すみません（笑）。それがパン人間の本質かなと、ちらっと思ったのです。こうして他の場所に来て、いろいろな方と接する場合に、浪江でどうだった、ああだったなんて言ったってしようがないわけですから、私たちも今まで身に付けたいろいろなものを、今の自分のありのままを二本松の方にぶっつけて、そこでフランクにお付き合いしていただければありがたいなと思っております。
実は私にも、今、94歳の母親がいます。浪江町で外科のお医者さんをなさっていた方も、二本松に避難なさった。その方と私は、あまり浪江ではお付き合いがなかった。ちょっととっつきにくい人だったものですから。その方のお母さんが認知症になった時に、その方はどんな態度を取ったか。認知症の方は何回も同じ事を言うそうです。同じことを何回も言う。それでも「なんだ、さっき言ったべよ」とかじゃなくて「ああ、そうだった」「ああ、そうなの、そうなの」って、いつも初めて聞いたように接してきたと聞いたのですね。その時、この人はそういう人だったのかって、私も考えを変え、その方の見方ががらりと変わっちゃったのです。これから、みなさんもそうですが、今、お年寄りの方を介護なさっている方は、「介護もアート」だとおっしゃいましたから、そういう常に新しい気持ちを持って、「ああ、そうか、そうか」というのが、私は大事なのかなと思っています。
アートって何かといったら、私は、今おっしゃった驚きと、かけがえのないものなのかなと思います。こうやってみなさんがお互いにお会いして、目を合わせて、お食事をなさった、これはかけがえのないものになりつつあるわけです。
私はこれからも二本松の方にお世話になりたいと思いますし、先ほどの感謝と恩返しは忘れないで、向こうに行くまで持っていきたいなと思っております。
今日は本当にありがとうございました。みなさん、お寺さんも、本当にここまで私らをお世話していただいて、本当にありがとうございました。恐縮いたします。どうもありがとう。

浪江・二本松

After meeting

関係者との振り返りミーティング

After meeting

日　時：10月29日（金）13：00〜14：30
会　場：龍泉寺
参加者：武田良典氏
大松佳子氏（にほんまつ未来創造ネットワーク事務局長）
原田アキイ氏（二本松コスモス会会員）
川延安直（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）
江川トヨ子（福島県立博物館学芸員／ライフミュージアムネットワーク実行委員会事務局）

もう無くなるのかと思うと悲しかった

原田アキイ
私ら最初にこっちでお世話になった時、十日市をやらせていただきました。その時に、私思ったけど、昔だったら地区ごとのお御輿をみんな子どもたちがやったでしょ。そんなに立派なお御輿は、浪江にはなかったけれど。十日市でそのお御輿担いで一軒一軒回る。子どもたちは、お小遣いとかいろいろいただく。そういうのが、ああ、もう無くなるのかと思うと悲しかったです。

ここの提灯祭りみたいに、ずっと脈々と続いているのが、ああ、私らの代で、ぷっつり切れちゃった。十日市の時いろいろな所から集ってきたでしょ。そうすると「なんだ、原田さんのお孫さんか」なんて、みんなに言われた。

でも、来年はこういう光景は、もうないのかと思うと、悲しくなっちゃいました。歴史は、続いていったほうがいい。提灯祭りもすごいと思っています。

武田良典
提灯祭りがなくなったら、おしまいです。

大松佳子
こうやって平和でと言ったらいいか、何事もなく続いているから当たり前だと思っているけど、何か災害とかあって、この地を離れなくちゃいけなくなる、そういう事も起きる。

原田
ありますよ。家の夫たちが青年部の時に見に来て、二本松の提灯祭りは警察がいなかったって。どうやって運営していくのだろうと見学に来たのですよ、浪江からみんなで。

大松
ああ、そうだったのですか。

原田
そう。交通整理はどうするとかなんとか、それを参考にして十日市もやったと思う。

大松
警察も関わってはくれている。

武田
ちょっとは出ています。

大松
確かにやるけど、太鼓台前後の交通整理は全部自分たちでやります。

原田
ねえ、みんなね、そう。

事務局・江川トヨ子
すごいですね。

原田
だから、それを見学に来た。もう何十年も前。

大松
そうでしたか、恐れ入りました（笑）。

原田
やっぱり、浪江と二本松って繋がりが、いっぱいある。

相馬には、会津を通って新潟から来た人が結構います。会津通って、二本松通って、浜に行った人が結構いる。繋がりが長く続いている。お祭りもずっと新潟から続いてきて、最後が浪江町だったと、懸田先生からそんなお話しを聞いたことがあります。

そして親戚関係とかありますよね。二本松の人が浪江に嫁いで、浪江の人がこっちに来て。二本松と、結構繋がりがあった。

大松
そうだったのですね。

原田
うちは、まだいろいろお世話になっていますけど、ここに。

大松
いやいや、とんでもない。

地域のみなさまの力が潜在的に

事務局・川延安直
お祭りに警察がいないとお聞きすると、そういうことが、今回の企画をうまくやらせていただけた原動力だった気がします。自治力と言うか、地域のみなさまの力が潜在的にある。子どもたちが、きちんと我慢とかできるのってそういうところから始まっているのかな。

大松
大した土地じゃない。やっぱり会津のほうがずっと。二本松は十万石だし、江戸城の中では、結構位が上だったと言うけど、そんなこと全然（笑）。

原田
歴史があり過ぎるから分からないんじゃないですか。

ものすごく豊かな土地だから競わなくても、なんとなく暮らしてきたのに、急にこんなことになっちゃった

大松
福島県は、海があって、湖があって、山があって、川があって、水がおいしい、米はおいしい。ものすごく豊かな土地だから競わなくても、なんとなく暮らしてきたのに、急にこんなことになっちゃった。「えっ」と思って、あらためて考えたら豊かなところだった。でも、リンゴでもなんでも1位じゃない。イメージも1位じゃなくて2位、3位。なんとなくやってきたこの感じが、もっと売らなきゃダメだとなって、はじめて「はっ、そうだ」と思っているのかもしれない。

原田
当たり前に近くにいろいろなのがあり過ぎて、気付かない点があるのかもしれない。

川延
ただ、はらこ飯とざくざくが同じ県内でできるというのは完璧ですよ。全ての素材が満

浪江・二本松

After meeting

たされている。

今回は4日間にわたる長いプロジェクトで、みなさんのお力で成り立った。今後の参考にしたいと思っていますので、ご感想、お気付きの点を教えていただければと思います。

武田

個人としては楽しかった。でも、折元さんは自分の持ったものがありますし、自分の思い、食事を作る方々の思いがあって、難しさもあった。ですけど、結局、参加されたみなさんも笑顔で楽しんでくれていた感じで、結果的には良かったと思います、はい。

お互いの聞き取りが、すごく大事

大松

みんなものすごく忙しく働いている。特にあの人たちは社長さんなので、なかなか3日間、全部に関わるのが難しい。構築の仕方、開催の仕方、その手段みたいなのはある程度ちゃんとしていかないといけないから、致し方ないですけど、普通の仕事をしている人たちには、この時間の長さが難しい。

それから、折元さんとの関わり方、彼の表現が、果たして、一日一日違う形を見せてくれたかというと、そうではなくて、参加した回数が多い人ほど重ねて聞かざるを得なくなってしまった。同じアーティストなので、作品が同じなのは当たり前だけれども、日を重ねてやることの意味は何か。

こういう反省会、お互いの聞き取りが、すごく大事だと思う。「重陽の芸術祭」をやっていても、なかなかその時間を作るのが大変。今回、龍泉寺さんが快く引き受けてくださったので、ロケーションが最高だったから、あらゆることを消し去った（笑）。

どこか場所を探してやろうと思ったら、なかなかできなくて、ご住職はもちろんお母さまの協力もあって、快く場所を提供してくださったのが、とてもありがたくて、私たちは楽しんだけど、大変なご迷惑をおかけしたかな。

菩提寺じゃないお寺の庫裏まで入るって、普通はないので、私たちを心広く受け入れてくださって、こういうイベントをいいよと言ってくださったことがすごい。

お寺の姿

武田

そうですね、まあ、ありがたかったです。こういう姿がお寺の姿なのかなと個人的には思うのです、お檀家さんだけじゃなくて。確かに、染みとかそういうのは怖いですけど、でもお寺は神聖な場所というより素朴な場所だと思うのです。

大松

昔はよろず頼りどころみたいな感じで、何か書いて欲しいとか、これどうしたらいいでしょうかとの相談事、字を教えて、そういうのは全部お寺さんに来た。仏様の愛の中に包まれているみたいな感じもある。

避難して来ている浪江の方たちと二本松の私たちの日常の関わりもあったけど、あらためてこうやってお互いの文化を知りましょうと、時間をかけて深い話し合いをしたわけじゃなく、一緒にバスで巡ってご飯を食べただけだけど、久しぶりに会ったり、初めて会ったりということが起きる。それもすごかったし、この状況で二つのまちの人たちが会ったのは、お寺でやった意味も大きかった。

宗教って考え方はいろいろあるかもしれないけれど、日本人にとっては仏教とか神道とかそんなに区別なくどっちもありがたい。特に仏教は救ってくださる。ここで笑ってできて。

きっかけ

大松

パフォーマンスよりも思い出深い。折元さんがいらっしゃったのはきっかけ。みんながが交流したということが、結果としてとても素晴らしかった。

そして、渡邊先生の関係で、ずっと重陽の芸術祭をやってきて、先生から学ばせてもらったこともも多くて、今回も渡邊先生が持ってきたみたいな話しで、時間的な大変さはあったけど、私はとても勉強になった。本当に感謝。

母も同じようなことを言っていました。もっと足が元気だったらいろいろな所で、ちゃんと降りて智恵子さんのお墓参りをして、浪江の住宅の方たちと関わって、そんなことをしたかったけど時間の問題もあり、自分の足腰がちゃんとしていない。けれど、ああいうツアーも、こういうことがなければ、なかなか組めるような話しじゃないのでありがたかった。

原田

ありがたかった。

川延

折元先生がきっかけになった。このプロジェクトは全てそういう流れでやっています。交流のきっかけになっていただければとてもうれしいです。楽しかったから、またやりたいと言っていただければミッションをコンプリートみたいな感じです。ありがとうございます。

食は文化の一つの象徴

大松

食べるってすごいこと。食は文化の一つの象徴だし、作っている人たちと話になるので、すごい勉強になった。何人もの奥さんが関わって、一人一人作り方違う。

江川

原田さんと大松さんのお母さんとの話、ギャラリーからの言葉も「いや、家はこうだ、こうだ」って、それぞれの話がすごくすてきでした。何が正解かではなくて、全部が正解でした。

原田

私たちも、こういうのが途切れないように郷土料理をずっと続けて、子どもたちに教えていきたいと思いますけど。

川延

アーティストは、すごく表現力があると同時に敏感な人たち。渡邊先生もそういうところをお持ち。原田さん、大松さんのお二人で前日に料理のトークをしていただいたことは、折元先生にとっても大きくて、あの時間がなかったらランチの時間も雰囲気が変わっていたと

思います。お二人の料理を通してのいろいろな思いが通じていた。何回も参加していただいた方には申し訳なかったですけど。お二人のお話しは全てが本当じゃないですか。レシピを勉強してとかじゃなく、全部体験に、ご自分の味覚に裏打ちされている。そこが重いのですよね。しっかりしたお話だったので、とても良かった。

人と人との繋がりの感動

原田
私も初めて参加させていただき、いろいろな方とお話しして、初めて体験することがいろいろありました。
私は、こちらにお世話になっているから、ちょっと引け目もあって、ここからいずれは出て行かなきゃならないのかなという気持ちもあるのです。いつまでもここにお世話になっていては申し訳ないという気持ちをみなさん持っている。なんとか自立するまでここでお世話になろうと。でもこういう機会があって、いろいろな方とお話し合いして、ああ、やっぱりここに落ち着こうかなと言った方もいらっしゃいました。うん、そうそう。だから、交流は一番大切と思いました。
私も折元先生と初めてお会いして、この人はなんだろうって（笑）、最初は思いました。でもパンフレットとかいろいろ見て講演を聴いて、やっぱりアートって、私らはアートというと美術館、資料館で見るとか、そういう感じを受けていたけど、先生のお話でアートって感動なのかなと思った。人と人との繋がりの感動ですね。そう、うん。それは、かたちであり、気持ちで、いろいろな受け取り方はあると思うけど、そんなことを学ばせてもらいました。

武田
原田さんのご主人の締めの言葉が良かったと思っています。

人間さまじゃなくて

大松
人間さまじゃなくて、自分のいろいろなものをそぎ落として、それで人間になるのだということをおっしゃっていました。原田さん、すごくすてきと思った、思った、確かに。今回は馬場さんがすごかった。東京のデザイナーさん。復興庁の復興支援で、インバウンド向けにパンフレット、DVDを作りましょうという支援に二本松に来たのです。二本松の前に会津でやっていたプロジェクトチームの一人だったのです、映像とかをやる。会津で立派なのを作った後に二本松に来て、「僕は二本松のほうが好きです」とか言っていた。
そのうちに、田中泯が二本松に来ることになった。大山采子さんの関係で、突然来ることになって、急にバタバタとお城山でやったのです。田中泯が、そこを気に入ったらしくて、その踊りは他でやるどんな時よりも時間が長かった。

川延
見に来ればよかったな。

大松
本人すごく機嫌良くて、普通サインなんかしないのに長蛇の列に全部サインした。馬場さんたら、田中泯さんに実際会ってお話しした。なぜ芸術を目指したかみたいな話しをして、ここは縁起がいいと言って、自分の会社をこっちに持ってきた。うちの隣の蔵を会社の住所として登記して、うちのアパートに越して来ちゃった。東京と二本松と半々で仕事をしています。
部屋から安達太良山が見える。二本松は、住んで人と会って、街を歩けば歩くほど好きになるって言う。最近二本松にそうやって復興で入ってきた人たちが、みんなそんなことを言う。見た目の会津の良さにはかなわないけど、住んだり、滞在したり、長くいると、また来たくなるし、良さが分かるとか言われて、私たちは、全然なんだかピンときていないですけど。

武田
二本松は最高だと思います。自分も東京に10年ぐらいいたので、離れてみて、渋谷よりも魅力があると思います（笑）。

大松
例えば角館みたいに桜があって武家屋敷があるかというと、そういう所はないし、もちろん金沢とかまったく格が違う。でも、何も城下町らしい所が残っていないのに城下町らしいってみんな言う。
お城はあります。お城の素晴らしさは、私たちはよく身に染みていて、天守閣とか建物が、一切残っていないけど、石垣が素晴らしくて、あの山自体がみんなの誇りです。何年か前に、一夜城じゃないけど、光だけでお城を見せたことがありました。その時みんなで、ここから見えた、あそこから見えたって話していた。

浪江・二本松

After meeting

昔は、立派な天守閣じゃなかったらしいですけど、住んでいる人がお城を見ながら、この城下に暮らしていたのかなって城下町の町民になった気持ちだねと言っていました。
お城からは郡山が見えて、そうすると二本松藩が治めていた所が遠くまで見える。500年前からあるっていうのはすごいことだなと思った。龍泉寺の素晴らしさも。

武田
こんなに木は育っていなかったから、もっと丸見えだった。

大松
馬場さんは、そんな感じでここに住んでいるうちに、みんなにいろいろ頼まれて、浪江と二本松の架け橋になりたいという思いがすごくある。
浪江のトルコキキョウと二本松の麹を使った入浴剤を、お風呂に浮かべて溶けたら花が出るようなのを作りたいと言って、馬場さんに県の補助金にプレゼンしてもらって、通った。今、部屋で研究している。あの部屋が研究室になっている。でも、トルコキキョウってドライになりにくい花なので苦心惨憺している。

原田
月見草みたいな感じだね。

大松
そうです、花びらが柔らか過ぎて難しい。現代アートに興味があって当然折元さんのことも知っていたのがすご過ぎ。折元さんも気に入って東京で会ったらしいです。

原田
どこでどう繋がるか分からないですね。

大松
馬場さんは今、無償の引っ張り凧。

川延
大事です、そういう人。町の発明家みたいな（笑）。

大松
大山采子さんが来た時からこんな感じです。采子さんが関わったことによって、采子さんが関わっている人が二本松に来る。田中泯自体を知っているわけじゃないけど、田中泯の関係者と仲が良かった。キャンセルになったのがあるから、采子ちゃんどこか二本松でできないかと言われて。

川延
場所も良かった。二本松のお城は雰囲気がありますね。何と言うか清潔な感じがする。さっぱりしている。

大松
何かおっしゃるのがよく分かる気がする。

川延
気持ちがいい、晴れ晴れする感じ。丹羽光重が大改修した最高傑作だと思いますよ、あれ全体が。

大松
遊びに行って登っていた所が、えっ800年前だったのみたいな（笑）。あんなに無料でどこまでも平気で登っていけるのに。

原田
部活動でランニングしていました。私らもお客さん来ると上まで案内するの。そうすると四季折々の景色が楽しめて自由に出入りできる。だからうれしいと言うか、開放的になっているのが最高。

大松
シンボルです。安達太良山とお城。一日一回は見上げるらしい。

原田
こちらに来てから見ます。庭から見えるから。今日は曇っているなとか今日は晴れとか。

大松
そうそう天気とか。晩年の大山忠作さんを采子さんが連れて来る時に、郡山からずっと左側をお父さんが無言で見ていた。安達太良山を見ていた。何も言葉を発しないで。やっぱり心の山。

心の故郷、目の故郷

原田
そういうのって心の故郷、目の故郷。

大松
浪江って長い町じゃないですか。海の人たちも山の民もいる。全員に聞くと、全然違う生活をしていた人たちなのかなと思う。

原田
本当に海の幸、山の幸、そういう町でした。私は海の方だったから、風景と言うより、焼き付いています。二本松の方の目に焼き付いているのは安達太良山、お城。

江川
原田さんはこちらに住みながら、海に行きたいと思いますか。

原田
私の生まれた所は、海からちょっと離れています。でも、夏になれば、汗だくだくで海にずっと行った。海の香りは山を隔ててもありました。ちょっと山を越えれば海の音が聞こえて、潮の香りがするという思い出があります。

急には誰にも解決できない

大松
その故郷を失うわけじゃないけど、世界中の誰もと言ったらいいのか、日本の誰も経験したことのない経験をしている。それって急には誰にも解決できないという話を、この前、原田さん、馬場さんと話しました。何をどうすれば良かったのか、これからどうすればいいか、誰も明確に答えを出せない中で生活するって、どんな気持ちかなと思うと、筆舌に尽くしがたい。

原田
そう思っていただけるだけで、私はホッとします。こればっかりは解決ってない。それ

ぞれに解決じゃなくて消化していくしかない。このことを話すとまた暗くなっちゃうけど。

大松
最初の頃、「千の花」で再会した人も何組もいた。「ここの近くで住んでいたんだね」なんて言って、あそこで会っているのを見ると、こっちも感動したりしていたけど、それぐらいみんな分からなくなっちゃっているのだなと思った。

原田
浪江では情報もなかった。どこでもいいから逃げなさいだった。みんな散り散りばらばらになっちゃった。まとまって、浪江の町民はこっちに行きなさいと最初に指示があれば、ある程度気持ち的にも、拠り所ができたと思うけど、それもなくて、みんなどこでもいいから逃げなさいだった。
だからみんな気持ちの下にあるのではないですか。どこに行ってもふらふらしているみたいな感じが。どこかに落ち着かなきゃならないと思っていても、どこにしたらいいのだろうって。

川延
これから人口が減ってくると集落をたたまなきゃいけない。会津ではそういう問題が目前に迫ってきています。災害じゃなくて、もう行政として持ち切れなくなってくれれば、そういう話になっちゃう。

原田
過疎ということですか。

川延
はい、みなさんの経験は、今後、大事になってくるはずです。

原田
だんだん過疎化になるのは、気持ち的に準備しなきゃならない。でも、私たちみたいに災害となると考える余裕がなく出てきたので、ふらふらしちゃうのです。

江川
そうですね。また戻って来る、ちょっとの間だけ逃げればいいのかなと。

原田
そうそう。それがもう帰れないとなっちゃった人たちは、気持ちの葛藤がある。

江川
そこは計り知れないものがあります。

原田
準備して逃げるのと、何も準備しないで逃げるのとは違うから。

武田
二本松も線量は高かった。自分は修行を終わって、歩いて帰ってきたのです。神奈川県から二本松まで。

原田
歩いてきたの。

大松
全然知らなかった、その話は。

こんなに辛いことはない

武田
３週間です。３週間かかった。ふるさとの話になっちゃうのですけど、安達太良山に勝る景色がなかった。みなさまたぶんそれぞれに思いはある。自分は二本松に生まれたから、そう思うだけであって。それが、戻れなくなっちゃう。こんなに辛いことはない。

川延
みなさん、実はすごいエピソードをお持ち。

大松
震災直後は、そういう話を、周りからいろいろ聞いて、そんなことあったの、そんなこともあったのという感じだった。原田さんたちとの出会いも不思議。
震災の後、市民観桜会とかお花見が全部中止になったのです。そんなのに負けてたまるか、やっちゃおうなんて、自分たちで勝手にお花見をやった。お城山で。すごく線量高いって言われているのに。そこに小黒さんを誘った。安斎文彦さんたちがＪＣ（公益社団法人日本青年会議所）で友だちだったから。

原田
ありがとうございます。私の実家が小黒で、お世話になった。

大松
そしたら来てくれた。そしてみんなで鍋をやりました。お城山で。風がびゅうびゅう吹いて、「ずいぶん私たち放射能浴びたよね」とか言いながら、みんなでそこで花見をやった。そこに小黒さんが来てくれた。

原田
お世話になりました。

大松
そんなことないです。その後、浪江の方たちがいろいろな所に住んでいると聞いていました。文彦さんが岳温泉を通りかかったら、桜の木の手入れをしている人がいた。なんだろうと思ったら小黒さんと原田さん。旅館も避難している人たちでいっぱいだった。ＪＩＣＡ（独立行政法人国際協力機構）にも入れた。ので、大阪での訓練中で訓練生がいなくて。小黒さんたちが、そういうことをやってくださっていた。
どうしても、あの花見が忘れられません。そこで小黒さんと知り合いになった。うちのアパートからＪＩＣＡの人たちがいなくなって空いていた。

原田
それで、みんな浪江の人がお世話になった。家を流された方とか。

「子どもたちを見ると涙が出る」って

大松
小黒さんのおじいちゃんとおばあちゃんが来てくれた。小黒さんの奥さんのお父さんが背の高い活動的な方で、植木の手入れとかお上手だし、社交的でたくさんお友達がいらっしゃって、うちの味噌と醤油をお菓子の代わりに、四つ、五つとお土産に持っていってくれたから、そこからお客さんが来てくれて。すごいです。
頭がよくていろいろな事をご存じで、初めて避難していらして、10月に二本松のお祭りで太鼓台を見た時に、「子どもたちを見ると涙が出る」って。

原田
そうだったね。

大松
涙流しながら見ていてくれた。故郷のお祭りがみんなでできなくなったということを思っておられるのだなと思った。

原田
今まで５００年間常にある。一代だけではなく昔からある。

武田
地域の祭り、小さい祭りはなくなっていっています。どうしても後継者がいなくて。神社も荒れちゃうし、そういうのはやっぱり悲しいです。

大松
武田さんは修行しているところから帰ってきたのですか。

武田
そうです、そうです、修行が終わって。震災に負けないと言うか、わざと面白いので（笑）。一応、托鉢して。修行は６年やったのです。

原田
歩いて来るのも、また修行ですか。

武田
修行です、修行です、修行の一環。昔であれば、新幹線とか飛行機で帰るなんて普通じゃないのですから。でも、ものすごく良かったです。

川延
おうかがいしたいですね体験談を。

江川
３週間托鉢しながら帰って来たということ。

武田
はい、それは二本松市に募金しました。５万円ぐらいですけどね３週間で。

原田
おいくつだったのですか、その時は。

武田
27歳、28歳、震災の頃は、そうですね。

大松
武田さん、それは絵巻物にしたほうがいいよ。

武田
確かに残したいですね、見た光景とか、みかんをくれたおばあさんとか、うれしかったですもん。車の中から頑張れみたいな。

浪江・二本松

After meeting

大松
ありがたいと思っちゃいます。思わず手を合わせる。

武田
でも、ばかにするような声も。そんなにいなかったですけど、笑っている人とか。

原田
4号線沿いで来られたのですか。

武田
4号線が一番安全で、電気もあるし。でも人が怖かったです、変な人に会わないかって。

原田
震災直後はいろいろな人が福島に来ましたから。他県ナンバーがいっぱいでしたよね。

大松
男女共生センター（福島県男女共生センター）って県の施設があるじゃない。あそこにみんなを避難させるのに、ヘリコプターが北小学校のグラウンドで離発着していた。うちの父が、「戦時中でも、こんなに飛行機飛ばなかったぞ」って言ったぐらい毎日すごかった。
ヘリコプターから降りた人が男女共生センターに入っていくのにスクリーニングしていて、自衛隊がすごい防護服着ているのに、私たち何も知らないから、犬の散歩しながら、なんだろうねとか言っていた。北小学校の窓が割れちゃうぐらいの振動だった。
その時は相当線量が高くなったって言っていました。砂埃がすごいし、毎日何十回も往復した。

原田
そういうのを受け入れるのも、地域に知らせずどんどんやることになっちゃったの。

想像していなくちゃいけないことばかりです

大松
そうみたい。市役所でも、朝出勤したら市役所の前に人がいっぱい。浪江の人たちが二本松に行ってくれと言われて来たけど、市役所の職員自体が事情をよく知らない。
避難所は寒かったじゃないですか。で、周りの住民たちが、寒かろうと言って、毛布、ストーブを持っていくけど、「向こうの避難所はそれがないのに、こっちにやるわけにはいきません。」って言われたりして。大変な人たちが来ているから、なんとかしたいとみんな思うのだけど、それが不平等になるからダメってどういうことかよく分からない、不思議。
二本松市役所の職員も、市に、市民に何かあったらどうするかというマニュアルはあるけど、自分のところ以外から人が来た時どうするかというのがなくてバタバタしちゃった。
それって想定外というのはないのです。想像していなくちゃいけないことばかりです。

人は当てにしちゃいけない

原田
うん、そうです。私らも思ったけど、今まで、いろいろな災害があっても、そういうマニュアルが全国には広まっていないの。災害が起きれば、それはゼロからというのは、私らが学んだ経験だと思います。人は当てにしちゃいけない。
会津でも、病院にはスクリーニングしないと中に入っちゃいけませんとなっていた。ちゃんと書いてあったの、「浜通りから来た方は、ここから入っちゃいけません」。それを見て、ウワってなんだろうって思いました。でも、会津でお世話になって、向こうから出る時は、涙、涙で出てきました。今も、お世話になった方とは繋がりを持って行ったり来たりしています。
まず、こう、政府は、嘘つきだって、あの頃思いました。

江川
ころころ変わっていましたしね、情報も流さないし。

原田
爆発してから、家にいろいろ取りに行こうと思ったら、ここから行っちゃいけませんと止める人がみんな、タイベックスの大きいのですから、私は一瞬、オウム真理教がまた始まったと思った。ガスマスクみたいなものを持って。私らは普通の格好で、こうやって車運転して、家に帰ろうと思ったら止められて、どうしたのと聞いても。その時は自衛隊だった。

江川
きちっと教えていただけなかったのですか。

原田
そう。目の前が家だと言っても、「ここから行っちゃいけません。あなたのためだから逃げなさい」と、ただそれだけだった。真っ白の白装束で。あ、白装束とは言わないのね。

大松
スクリーニングしている自衛隊の人たちの格好はそうでしたよね。男女共生センターでもそうだった。

原田
一般の人は、みんな、このまま。

大松
私たちは普通だった。

原田
こっちにお世話になった時、高校が0.7。ここに子どもさんがいていいのかしらって、私らは思ったの。

大松
なんだか不思議な状況だよ。

原田
きちっと言うことは言う。判断するのは、それぞれ違うけど。情報開示は一番必要だと思いました。

江川
知らないってことは怖いことです。知った上で、個々で判断できればいい。知らされないで、分からない状況が一番不安です。
いずれそういうお話も、ちゃんと記録しておかなきゃいけないです。みなさん、すごい体験をされているので。

大松
ほんとに、そうだと思います。

川延
すみません、いろいろ話は尽きない、ありがとうございました。またこれをご縁にぜひ、お力になれることがありましたら、ご一緒させていただければと思います。

江川
こうしたかたちでやらせていただき、みなさんの笑顔が印象に残っています。突然話を持ってきたのに、どんどん動いてくださった。全然不安がなくて、大丈夫、大松さんと原田さんだったらやってくれる、武田さんだったら全部うまく回してくれるって思いました。心強かった。

川延
二本松は、いろいろな事ができる場所だというのが良く分かりました。

江川
二本松のパワーはすごいと感じます。

川延
今日は、その秘密の一端が分かった。祭りだ、祭り。

江川
そうですね、祭りでの繋がりですね。コミュニティーが今もちゃんとある。

川延
また勉強させてください。細かいことを申し上げてすいませんでした。

大松
とんでもない。きっちり仕事をなさっている。なるほど、こういうふうにしてやるのだと勉強になりました（笑）。間に入って仕事をしなくちゃいけないから大変ですよね、予算の話があったり、こちら側に伝える話もあったりするから、そこをきっちり伝えるのは大変だな。

オープンディスカッション 2

概念を壊す。響きました。（ 二本松市、40歳代 ）

折元先生のお話がとっても楽しかったです。もっと「感じる」ことに目を向けていきたい。（ 二本松市、40歳代 ）

良かった！もっと自由に生きてみたい。（ 二本松市、40歳代 ）

オープンディスカッション 3

昔は葬式の時などに作りました。今は家庭も少なく、る機会も少なくなって、なつかしいです。（ 二本松市、70歳代 ）

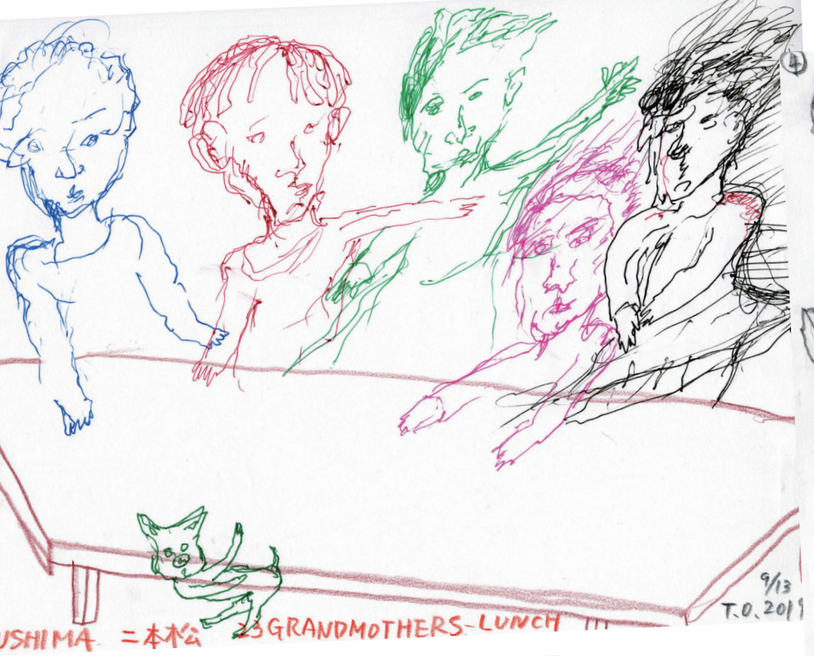
見るのも聞くことも80年生きてきて初めての経験でした。しゅうございました。（ 二本松市、80歳代 ）

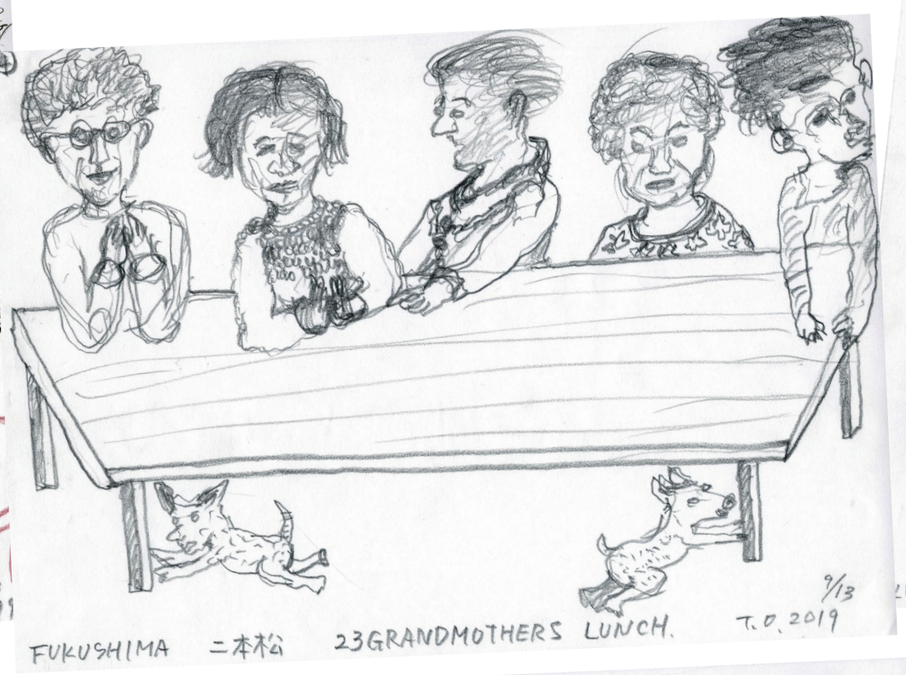
おふたりの料理紹介がとても良かったです。各家庭ごとに違うそれぞれの郷土料理。本松と浪江の交流の歴史（二本松出身の浪江の方とか ）

“しゃけのよごはん” とよぶ話などが良かった。（ 郡山市、50歳代 ）

食がその土地その土地の文化だということが、大松さんのお話で本当にわかりました。ありがとうございました。（ 二本松市、70歳代 ）

浪江・二本松


USHIMA 二本松 23GRANDMOTHERS-LUNCH
9/13
T.O.2019


FUKUSHIMA 二本松 23GRANDMOTHERS LUNCH.
9/13
T.O.2019

USHIMA. 二本松 23 GRANDMOTHERS

IIMA 二本松

FUKUSHIMA 二本松 23 GRANDMOTHERS LUNCH
9/13
T.O.2019

②
智恵子が愛した生家。
中庭には庭園があり
ゆったりとした時が流れます。
T.O.2

受継ぎ守りな
9/13
T.O.2019
二本松 23GRANDMOTHERS-LUNCH

©

③
5名様 会津鶴賞
5名様 大木代吉本店賞
1名様 大谷忠吉本店賞
5名様 有賀醸造賞
5名様 四家酒造店賞
7名様 太平桜酒造賞
FUKUSHIMA 二本松
9/13
T.O.2019

智恵子ちゃん
男代ちゃん
23人のおばあさんランチ
二本松
2019 9/13
T.O.
撮影 © 高村 規
Tatsumi Omoto
智恵子の生家
二本松市智恵子記念館
「岩石山とほんとうの空」～阿多多羅山～
「微笑む裸婦像」高村光太郎作
「微笑む裸婦」1924年
「微笑む裸婦」明治45年
「樹下の裸婦」
「樹下の裸婦」1923年
「樹下の裸婦」明治45年
「樹下の裸婦」大正12年
「樹下の裸婦」大正13年
「樹下の裸婦」大正14年
「樹下の裸婦」大正15年
「樹下の裸婦」昭和2年
「樹下の裸婦」昭和3年
「樹下の裸婦」昭和4年
「樹下の裸婦」昭和5年
「樹下の裸婦」昭和6年
「樹下の裸婦」昭和7年
「樹下の裸婦」昭和8年
「樹下の裸婦」昭和9年
「樹下の裸婦」昭和10年
「樹下の裸婦」昭和11年
「樹下の裸婦」昭和12年
「樹下の裸婦」昭和13年
「樹下の裸婦」昭和14年
「樹下の裸婦」昭和15年
「樹下の裸婦」昭和16年
「樹下の裸婦」昭和17年
「樹下の裸婦」昭和18年
「樹下の裸婦」昭和19年
「樹下の裸婦」昭和20年
「樹下の裸婦」昭和21年
「樹下の裸婦」昭和22年
「樹下の裸婦」昭和23年
「樹下の裸婦」昭和24年
「樹下の裸婦」昭和25年
「樹下の裸婦」昭和26年
「樹下の裸婦」昭和27年
「樹下の裸婦」昭和28年
「樹下の裸婦」昭和29年
「樹下の裸婦」昭和30年
「樹下の裸婦」昭和31年
「樹下の裸婦」昭和32年
「樹下の裸婦」昭和33年
「樹下の裸婦」昭和34年
「樹下の裸婦」昭和35年
「樹下の裸婦」昭和36年
「樹下の裸婦」昭和37年
「樹下の裸婦」昭和38年
「樹下の裸婦」昭和39年
「樹下の裸婦」昭和40年
「樹下の裸婦」昭和41年
「樹下の裸婦」昭和42年
「樹下の裸婦」昭和43年
「樹下の裸婦」昭和44年
「樹下の裸婦」昭和45年
「樹下の裸婦」昭和46年
「樹下の裸婦」昭和47年
「樹下の裸婦」昭和48年
「樹下の裸婦」昭和49年
「樹下の裸婦」昭和50年
「樹下の裸婦」昭和51年
「樹下の裸婦」昭和52年
「樹下の裸婦」昭和53年
「樹下の裸婦」昭和54年
「樹下の裸婦」昭和55年
「樹下の裸婦」昭和56年
「樹下の裸婦」昭和57年
「樹下の裸婦」昭和58年
「樹下の裸婦」昭和59年
「樹下の裸婦」昭和60年
「樹下の裸婦」昭和61年
「樹下の裸婦」昭和62年
「樹下の裸婦」昭和63年
「樹下の裸婦」平成1年
「樹下の裸婦」平成2年
「樹下の裸婦」平成3年
「樹下の裸婦」平成4年
「樹下の裸婦」平成5年
「樹下の裸婦」平成6年
「樹下の裸婦」平成7年
「樹下の裸婦」平成8年
「樹下の裸婦」平成9年
「樹下の裸婦」平成10年
「樹下の裸婦」平成11年
「樹下の裸婦」平成12年
「樹下の裸婦」平成13年
「樹下の裸婦」平成14年
「樹下の裸婦」平成15年
「樹下の裸婦」平成16年
「樹下の裸婦」平成17年
「樹下の裸婦」平成18年
「樹下の裸婦」平成19年
「樹下の裸婦」平成20年
「樹下の裸婦」平成21年
「樹下の裸婦」平成22年
「樹下の裸婦」平成23年
「樹下の裸婦」平成24年
「樹下の裸婦」平成25年
「樹下の裸婦」平成26年
「樹下の裸婦」平成27年
「樹下の裸婦」平成28年
「樹下の裸婦」平成29年
「樹下の裸婦」平成30年
「樹下の裸婦」平成31年
「樹下の裸婦」令和1年
「樹下の裸婦」令和2年
「樹下の裸婦」令和3年
「樹下の裸婦」令和4年
「樹下の裸婦」令和5年
「樹下の裸婦」令和6年
「樹下の裸婦」令和7年
「樹下の裸婦」令和8年
「樹下の裸婦」令和9年
「樹下の裸婦」令和10年
「樹下の裸婦」令和11年
「樹下の裸婦」令和12年
「樹下の裸婦」令和13年
「樹下の裸婦」令和14年
「樹下の裸婦」令和15年
「樹下の裸婦」令和16年
「樹下の裸婦」令和17年
「樹下の裸婦」令和18年
「樹下の裸婦」令和19年
「樹下の裸婦」令和20年
「樹下の裸婦」令和21年
「樹下の裸婦」令和22年
「樹下の裸婦」令和23年
「樹下の裸婦」令和24年
「樹下の裸婦」令和25年
「樹下の裸婦」令和26年
「樹下の裸婦」令和27年
「樹下の裸婦」令和28年
「樹下の裸婦」令和29年
「樹下の裸婦」令和30年
「樹下の裸婦」令和31年
「樹下の裸婦」令和32年
「樹下の裸婦」令和33年
「樹下の裸婦」令和34年
「樹下の裸婦」令和35年
「樹下の裸婦」令和36年
「樹下の裸婦」令和37年
「樹下の裸婦」令和38年
「樹下の裸婦」令和39年
「樹下の裸婦」令和40年
「樹下の裸婦」令和41年
「樹下の裸婦」令和42年
「樹下の裸婦」令和43年
「樹下の裸婦」令和44年
「樹下の裸婦」令和45年
「樹下の裸婦」令和46年
「樹下の裸婦」令和47年
「樹下の裸婦」令和48年
「樹下の裸婦」令和49年
「樹下の裸婦」令和50年
「樹下の裸婦」令和51年
「樹下の裸婦」令和52年
「樹下の裸婦」令和53年
「樹下の裸婦」令和54年
「樹下の裸婦」令和55年
「樹下の裸婦」令和56年
「樹下の裸婦」令和57年
「樹下の裸婦」令和58年
「樹下の裸婦」令和59年
「樹下の裸婦」令和60年
「樹下の裸婦」令和61年
「樹下の裸婦」令和62年
「樹下の裸婦」令